岳山

第四十年
第一號

山岳

目次

第十四年第一號　大正九年一月發行

信州笠ヶ岳と横手山　工學博士　辻本滿丸……一頁
九州旅日記の中より　工學士　吉岡八二郎……一〇
白砂登山記　法學士　日高信六郎……三四
山嶽諸相　森喬
　理學士　辻村太郎……四四

圖版

○萬座峠より望める笠ヶ岳(辻本滿丸氏撮影)○笠ヶ岳頂上の神祠○澁溫泉寺附近よりの東南望○硯川附近より望める横手山○硯川附近より見たる笠ヶ岳(以上武田久吉氏撮影)……對頁八
○澁峠の山道より望める笠ヶ岳○白根山より上信國境の山脈(山田峠附近)を距てゝ笠ヶ岳及坊平山を望む○白根山水釜を距てゝ横手山を望む(以上辻本滿丸氏撮影)○澁峠西端約二千米の地點より望める笠ヶ岳及小笠(武田久吉氏撮影)……四〇
○野反池東北岸より辨天山遠望○ネンバ坂より南望○辨天山八間山の鞍部より北に野反池

を望む○野反池南端より北望○同上(以上日高信六郎氏撮影)……七二

雜錄

○神戸岩と御前山○一二山湖の名稱○コンベの意義○四阿山上州方面の登路○万田山卑考○伊豆の大室山(以上六項武田久吉)

登山案內者

◇駒ケ岳登山者强力組合◇甲斐柳澤の旅舍と人夫

山岳圖書批評

○白馬岳ノ登山案內

雜報

○立山頂上の氣象觀測○北アルプスの湖沼調査○石室十ケ所位置決定○阿蘇山噴火○伊豆大島三原山噴火○燒岳噴火○砲兵中尉行方不明となる○富士山の初雪○雪來る○會員通信

會報

○事務所の移轉○小集會規定の變更○會員章の變更○會員章貸與及再貸與規定○不在會員規定○會費拂込に關する注意○會費の改算に就て○第五回小集會記事○第六回小集會記事○幹事改選に就て○會務報告○會員の訃報○退會者○會籍削除○交換及寄贈圖書目○會員名簿○規則の正誤○會則拔萃並に投稿規定

英文欄

卷末附錄として英文欄を添えたり

信州笠ヶ岳と横手山

辻本滿丸

前號の本誌上に岩菅山の記事を掲げたから、其附近にある笠ヶ岳と横手山とに就き、些か書いて見やうと思ふ。

此二つの山に登つたのは、大正五年の夏で、約四年許以前のことになる。私は明治四十五年の七月、白峰に登山した以來、健康を損じたので、三年間は全く山登りを止めてゐた。其の年の夏も只だ溫泉に浸つて休養しようと云ふ目的で、信州安代溫泉（澁溫泉の西隣）に出掛けた。丁度親戚のものが滯在して居つたのと、一つには此平穩溫泉の東方にあつて、比較的世に知られて居ない、所謂毛無火山群なるものに興味を持つてゐた爲に、此處に來たのである。登山に就ては、まだ體力に自信がないから、先づ諦めることにして、せめて主なる山の形でも、遠望したいと思つてゐた。然し久々て懷しい信州の山間に入つて見ると、もう大分私の頭から消えかゝつてゐた、雄大な山の景色や、面白さを、復活させずにはすまなかつた。滯在約一週間近くになつて、到底山麓からの眺望や、地獄谷の見物位では、滿足できなくなつたので、兎に角澁峠の山道を登つて途中の熊の湯と云ふ溫泉まで行つて見ることにした。それで馬の周旋を宿に賴んで出かけたのが八月二十九日であつた。此繁昌する溫泉場も續々客が歸つて、ずつと靜になる頃である。

馬方は沓野の角さん（黒岩角太郎）と云ふ男で、馬方に似合はず、八字髭もあれば相當に教育もあり、話も良く判る。角さんとは其後三年續けて此附近の山登りをやつたので、今では親しい友達の樣になつてしまつた。波坂にかゝる途中、笠ヶ岳登山のことを一寸尋ねて見た處が、夏は登つたことは無い

が、登山は容易であると云ふ話で、尚ほ時間があつたら澁峠の側にある横手山に案内したい。此山は笠ヶ岳よりも高く眺望も非常に佳いと云ふ。私は登山など云ふことは到底取り合つて呉れぬものと思つて、ほんの試に話しかけた處が、斯様に理解ある返事を聞いたのは全く意外であつた。横手のことは内々野心を持つてゐたことであるから、この話が導火となつて無暗に山へ登つて見たくなり、體の工合などは毛頭考へてゐることが出來なくなつたので、今日は笠ヶ岳に登つて熊の湯に一泊し、明日は横手登山と云ふことに、すつかり極めてしまつた。

波坂の曲折した坂路や、沓打の茶店から、遙に白雪輝く白馬連山、鹿島槍、立山等の壯觀を嘆美したのも此時が始めである。潤滿瀑も、琵琶池も、幕岩も始めて見た。幕岩下から狹い峽間を通り抜けると、平床の原と云ふ原に出る。景色が俄然變つて高い山の上に居ると云ふ氣がしなくなる。原には主に短い笹が繁つてゐて、其の間にはアカモノとシラタマノキが多い。又ウメバチサウだのモウセンゴケもある。澁、安代邊から非常に高く仰がれる坊平山（一八三九・五米）も、此邊では一の丘陵に過ぎぬ程低くなつてしまう。熊の湯に近づくと當面に尨大な然し無恰好な横手山が蟠まる。其左方の傾斜の頗る緩なるに反して、右は切取つた様に傾斜してゐる。角さんは其の傾斜面の下の邊を指して、あすこが澁峠だと教へて呉れる。右手には笠ヶ岳が前山を越して現れて來る。頗る兀突たる形をして、左の方は垂直に近い恐しい岩壁の急斜である。平床の原を通過すると、右手の山の下に熊の湯の孤屋が見える。街道から分れて、下り氣味に二町程行つて角間川の上流を渡ると、そこに着く。朝七時二十分に安代を出て、着いたのは十一時半である。熊の湯で笠ヶ岳のことを尋ねて見ると、至極簡單らしいので、中食を濟してから、直に角さんと二人で出かけた。十二時頃であつた。

熊の湯から其後方の斜面を二十分許丈の高い根曲竹の間に通ずる路を登ると、佐野村方面へ落すと云ふ用水の堰に出會ふ。これは岩嘗路にあるものよりも小さく、亦水も殆んど無い。それに沿うて平

坦な路を山腹について、西北に繞つて行く。樹木は針葉樹となり其下には根曲竹が多い。テルペンの香氣は頭を爽快ならしめ又山深く入込んだ氣分を感ぜしめる。小さい谷を三つ四つ繞ると左は笠ヶ岳の斜面で頂上は直ぐ上にあるが、直接には到底登れない。右は角間川の谷を隔てゝ東北の方が見える。山頂二分した志賀山（二〇三六米）は獨立した火山の形を呈して其裾を平床の原の方に引いてゐる。志賀の右には頂上が可也廣さうに思はれる截頭圓錐狀の峰が其裾を志賀と同じ方面に引いてゐる。これは草津峠（新道）の北々西にある約二〇四〇米の峰で、角さんは鉢山と呼んでゐた。

此附近に幣軸竹（即ち根曲竹）を刈取る山師が七八軒も其筵で小屋を造つて住んでゐた。小屋は長い筵を曲げて造つたもので、屋根や壁に當る處も全部筵で出來てゐる。掘立小屋と云ふよりも筵の曲げ立て小屋と云ふべきで、面白い形をしてゐる。刈取つた筵は養蠶具の製造に使用するのだと云ふ。皆須賀川村（高社山の東麓）の住民で今日も途中、竹を負ふて里に出る男女に大分會つた。大抵十月末迄滯在すると云ふ話である。

熊の湯から一時間程かゝつて笠ヶ岳本山の登山口に來た。其入口は堰を横ぎつて小さい二本の丸木橋がある許で、注意せぬと見落す處がある。此登路は笠の頂上から北方に長く引いてゐる比較的緩斜の尾根を登るものらしい。入口は絶頂から恐らく三百米餘りも下の邊であらうと思ふ。

愈本山にかゝると傾斜は頗る急で森林の中の丈高い笹を押分けて登る。切り明けは朧にあるが、笹が繁つてゐるので中々面倒である。稍登ると笹の方は大分樂になる。栂の大木の根の空處などには光蘚が一面にある。ミヤマダイコンサウ、ダイモンジサウ、ゴゼンタチバナ、イチヤクサウ等が見參に入る。私は再會出來難い知己に廻り合つた様な懐しさと嬉しさとを感じた。大部登つても頭上の樹木は繁つてゐて、明い空が現はれないから、頂上はまだ遠いものと思つて登る。四年振りの勞動は隨分樂なものではない。漸く坊平山や、小笠（笠の西北にある岩石露出した約一八〇〇米の峻峰）などが、

遙に下の方に見えるやうになつたので、もう大したこともあるまいと、最後の勇氣を振つて辛くも絶頂(二〇七六米)に登り着くことが出來た。本山にかゝつてから四十分を要した。

絶頂は餘り廣く無く、最高處に大岩があつて、其上に日和天狗の大石を戴いた小さな祠がある。岩の東に少し平な處があつて、其崖側には稍重厚な偃松が蟠屈してゐる。東南は絶壁的大急斜を以て松川の深谷に臨む。コメツガ、アヲモリトドマツ、ダケカンバ、ミヤマハンノキ等の外、岩間にはヤマハヽコ、ゴセンタチバナ、ガンコウラン等がある。日和天狗の御利益か、今日は天氣が良い。祠の內を見るとビール壜の樣なものに水を容れて(?)供へてあるのは感心出來ないが、山頂には竹の皮も、卷烟草の吸殼も、紙屑も、さては其他の不潔物も見當らないから、先以て有難いとして、岩に腰を下して四方を眺める。

東北から東方を經て南方に至る迄、信州上州の國界及び其附近の山々は良く眺められる。東館の上に聳える岩嵓から始まつて、志賀、鉢山、それから横手、濁峠、山頂の禿げた草津白根、元白根。それ等は容易に確認することが出來た。南に當る松川の谷は恐しく深く、笠ヶ岳も此の方面には峨々たる岩の斜面を露してゐる。此の谷を隔てゝ雲の間から黒い二三の高峰が隱現する。此登山のときには良く判らなかつたが、多分黒湯山(二〇〇七米)及び御飯ヶ岳(二一六〇米)等であつたと思はれる。又雲の上に四阿山と覺しい尖峰を望んだ。西方は雲があるのと、霞んでゐた爲に、遠方は分明しない。然し濁、安代、湯田中邊を初め、高社山などは明瞭に見えた。又東館の半腹に發補溫泉の家屋を認めた。日本海の航行者に目標となると云ふ此山も、今日は其方は全然見えない。何分非常に高いと云ふ程の山でなく、東には比較的高い國境山脈が連亘してゐるから、それに妨げられて東方の遠望を擅にすることの出來ないのは致し方がない。

笠ヶ岳は其丸い形から、一寸獨立した火山の樣に思はれる。毛無火山近傍地質調査報文(『震災豫防調

査會報告』第八號百四十一頁）には「笠岳は突兀として孤立せる圓錐形の山にして高さ二千四米突に達し（中略）、一望直に之を判定することを得べき特殊の山相を有す、蓋し一の火山たりしこと疑を容るべからずと雖も其一個獨立のものか、將た其近傍の連嶺と共に一大火口を圍むものなるかは一方面の觀察を以て速斷すべからず」とある。其後大橋良一氏の研究に係る草津白根火山地質調査報告（『震災豫防調査會報告』第七十八號二〇頁）には「笠ヶ岳の如きは特に高く聳へたりと雖も、要するに上下高井郡の界をなせる山脊の一點に過ぎず」と斷定されてある、五萬分一圖の山田峠（白根の北方）の直北にある約二〇八〇米の尖峰なども笠ヶ岳類似の形を持つて居るが規模は小さい。

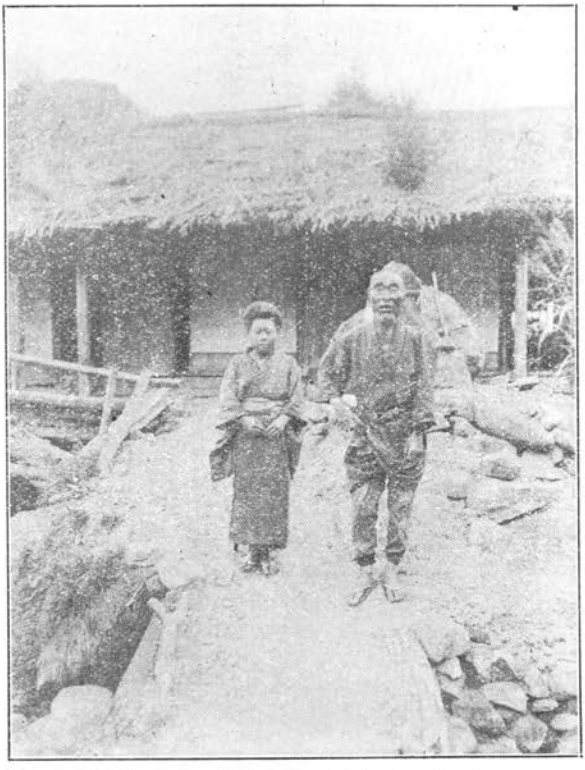
山頂で一時間近くを過してから下山した。本山を下り切るに三十分許かゝつて、三時四十五分熊の湯に戻つた。

一昨年山田溫泉から松川谷を溯り、萬座峠（一八二七米）を越えて、萬座溫泉に行つたとき、聞いた話に據ると、笠ヶ岳には此松川谷からも登れる。登路は山頂から南方に引いてゐる尾根を登るので、川から二十餘町と云ふことだが、餘り樂なものでは無いらしい。

熊の湯には只一軒溫泉宿がある許で、豫期してゐた處ではあつたが、隨分穢ない。湯は溫度は高いが硫化水素の臭が非常に强く、湯の表面には湯滓（硫黄）が充滿してゐる。それを掻き分けて暫時浸つてゐると臭氣に中てられて目が廻つて來るやうに思はれた。最上等の座敷でも天井は無く屋根には孔が澤山あるから夜は寢ながらにして星の光を見得る便宜はある。宿の家族は主人の山本彌曾吉老人と、十六七歳のお竹さんと云ふ娘が居る許であつた。お竹さんは度々笠ヶ岳に登つたことがあるそうで、今日も案内してやらうと云つたが、それにも及ぶまいと思つて斷はつた。山頂から富士が見えると云つてゐた。（老人は此翌年死んで、お竹さんには婿が來て、矢張り營業を續けてゐると云ふことを其後聞いた）。

幸ひ客が皆無で閑靜なのは有難かつたが、食物の頗るまずいのには最も弱つた。然し老人父子から

眞率なる歡待を受けたのは感謝に値すると思ふ。老人は頻に目脂や、鼻汁を手でこすりつゝ、直ぐ其手で御茶を入れたり、菓子をつまんで呉れたり、斡旋大に勉めて呉れた。熊の湯で蛇を飼つてゐると云ふ話は後に聞いたが、眞偽は知らない。

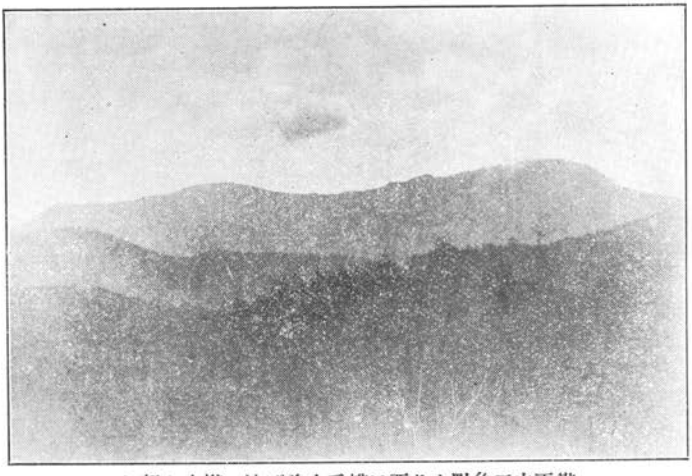


熊の湯と山本老人父子（辻本滿丸氏撮影）

此處は位置が山間の平地であるから、發補の樣に高い處に居るとは思はれないが、流石に海拔一七〇〇米近いだけのことはあつて、夜になつてからは非常に寒くなつた。煎餅蒲團では少し凌き難い處へ、久々でやつた、急激の勞動の爲か、動悸が充分治らないで、寢苦しくつて困つた。其上前日來、此地方で度々起る鳴動が、此處では頗る烈しく響いて、幾度も驚かされた。後に長野測候所の報告を見ると、此鳴動の中心は笠ヶ岳附近であつたそうであるから、强かつた譯である。曉近くなつて少しまどろむだ許で碌々眠らずに一夜を過した。

翌日も幸に天氣は好い。不眠の爲で氣分は頗る惡いが、横手に行つて見ねば氣が濟まぬから、又馬に乘つて角さんに引つ張られながら、六時熊の湯を出掛けた。

峠道へ出て僅かに行くと硯川の茶店がある。信州側での最後の休所である。それから少し行くと路は二つに分れる。左方は新道の草津峠(一九五六米)を越えるもの。右方は舊道の澁峠(二一七二米)で、此の二つの路は上州側の葭ヶ平(よしたひら)で一つに合する。澁峠は横手山の殆んど肩とも云ふべき邊を通つてゐるから、横手に登るには此方の路を取らねばならぬ。私は以前草津から白根に遊んだとき葭ヶ平まで登つたことはあるが、峠の頂は通らず又今度も横手頂上の直下まで行つただけで、それから先は知らぬから詳しいことは云へぬが、舊道の方は概して樹木が少なく眺望は良い。新道は開豁な眺望が無い代りに、栂の深林を穿つて頗る幽邃の趣があるそうだ(『山岳』第六年一六五頁、須田正雄氏「澁峠」參照)。今でこそ仙水峠(約二三五〇米)夏澤峠(二三九二米)さては又針ノ木峠(二五四一米)とか、三伏峠(約二五八〇米)など云ふ、恐しく高い峠が、登山家の間に普通となつたものゝ、是等は所謂乘越か或はそれに類似のものであるから、此澁峠は我邦の街道筋の峠としては、最も高いものゝ一つと云つて差支なからう。



辨天山三角點より西に横手山及び池の塔山を望む
(日高信六郎氏撮影)

舊道は深い笹の間に切開かれた、大きいゴロゴロ石の路を登つて行く。オヤマリンダウの紫花が目につく。次第に景色が雄大となつて來る。もう實際横手の傾斜を登つてゐるのであるから、頂上は當面に聳えて頗る近い。山頂は良く晴れてゐるが、草津峠邊

から鉢山に亘つて纏りついてゐる雲が、追々動き出して來たので、少し心配になつて來た。上州方面には雲が多いらしい。然し信州側は至極快晴で、二千米を超した山路に來た頃には、絶大な眺望が西方に開展された。

先づ目につくのは昨日登つた笠ヶ岳で、一つの獨立した山となつて其岩の斜面を此方に向けてゐる。澁、安代邊から見る穩かな形とは違つて頗る豪壯な山相を呈してゐる。西北には妙高山が非常に高く聳える。それと姉妹山と云はれてゐる黒姫、飯綱は大部分横雲の裏に沈んで、其代りに戸隱の裏山（高妻、乙妻）が妙高と兄弟分と云つた様に雲を拔いてゐる。笠ヶ岳の後には白馬附近から始まつて飛騨山脈の峻峰が長く天際に連つてゐる。懐しい山々だが、今は少しも登つて見たいとは思はない。遠方から眺めて讃美の聲を放つてゐる方が餘程宜い。西南には乘鞍火山も見える。

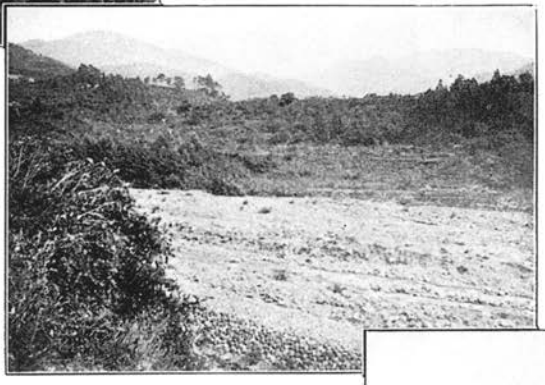
横手山から笠ヶ岳へ連る山脊を過ぎて、松川谷を見下す處へ來ると南の方が開豁になる。上州方面から押して來た雲は已に白根の一部を蔽つて、今や國境山脈の障壁を突破し様としてゐる。四阿山は見えるが淺間の方は全く見えない。此邊に來ると白根爆裂の影響は頗る著しくなつて、松川方面には樹木が白骨の様になつて立枯してゐる。凄い景色だ。松川の水源も恐しく深い谷だ。大橋氏に據ると此部分は初め一大爆裂火口であつたらしいと云ふことである。横手の南面が急斜なのは其爲であらう。

松川谷を右にして水平に近い山腹の路を稍暫く行くと、舊頂上茶屋の廢趾がある（峠まで約半里）此處で馬を下り、馬は繋いで置いて尚少し先に進んだ。此邊は横手山頂の直下であるから、何處を登つても目的を達せられないことは無いが、都合の好さそうな處が見當らない。其内に大分雲が襲つて來たので、氣の急くまゝに良い加減の處から登りにかゝつた。初めは岩崩れの斜面で、それを過ぎ偃松のある處へ出ると傾斜は愈急になる。昨夜の不眠で脚が馬鹿に重い。もう直ぐ頂上と云ふ處で、どうにも脚が擧らなくなつたから、角さんに杖で引き上げてもらつて、辛くも這ひ登つた。それでも絶頂の二

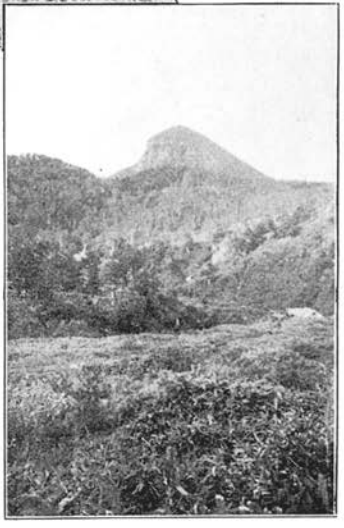
1

2

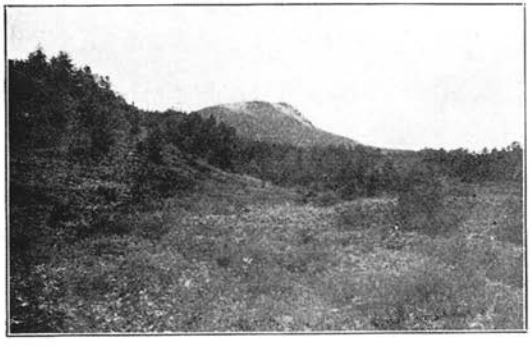
3



5



4



1. 萬座峠より望める笠ケ岳(辻本滿丸氏撮影)。 2. 笠ケ岳頂上の神祠。 3. 澁湯温泉寺附近よりの東南望。左端、坊平山。中央、笠ケ岳。其右、小笠。右端、中倉山。 4. 硯川附近より望める横手山。 5. 硯川附近より見たる笠ケ岳。(以上武田久吉氏撮影)

三〇五米の三角標石を見たときには、今迄の苦みも忘れて嬉しかつた。八時十五分で峠路から三十分程かゝつたと記憶する。

標石の側には、石尊大權現だとか云ふ、小さい石の祠がある。頂上は廣く丈の短い笹が蔓つてゐる。偃松もある。北の方は高い針葉樹が茂つてゐる。登つてゐる途中から雲がかゝつて來たので、今は全く展望が無い。北の方のことは判らぬが他の三面は確に開豁な眺望があらうと思はれる。大して深い雲でも無く、時々薄日が漏れて來る位だから、或は晴れるかと稍暫く待つたが、到底見込が無さそうなので下山にかゝつた。

初めは同じ處を降つたが、途中から少し右の方へと下つて、一つの大きい岩の蔭を右に見下して下つた。此方が歩き易く又高山植物なども餘計にあつた。遂に馬頭觀世音の立石ある處で街道の路に下り着いた。若し此山に登らるゝ人があるならば、私は此降路を登ることを推薦する。それは馬頭觀世音の處から蔭を左にして登れば宜い。

此の馬頭觀世音の立石は明治二十四年九月暴風雨の中を草津から歸るとき、沓野の女二人、馬方一人、馬一頭が、此山拔けと共に松川谷に落ちて非命の死を遂げた爲に建てられたものであるといふ。碑は頭が缺けて、馬頭の二字は讀むことは出來ない。

ゴロゴロ石の處の下りは危險であるから、馬には乘らず、ぶらぶら歩いて歸路に着いた。少し降ると雲は無くなつて、信州側は依然好天氣である。丁度暑くも寒くも無く良い位の氣溫の處へ、兎に角目的を達した爲か、非常に良い氣分になつた。振り返ると横手の絶頂は、すつかり晴れた。もう少し待つて居れば宜かつたものと殘念に思ふ。下の方を見ると荷馬が幾頭も續いて登つて來る。澁の方から貨物を草津に搬ぶものだそうで、多分菓子もあらうと云ふ話だから、賣るか、どうかと、角さんに聞いて見ると、角さんは大聲で「羊羹あるかー」と怒鳴る。「あるー」と云ふ返事が聞える。それから

二人で一棹三錢五厘の羊羹を一つづゝ噛りながら、西方に開展された絶大な景色の眺望を飽迄貪りつゝ呑氣に下つて行く。妙高の左肩に白く見えるのは、雪か、薤かと云ふ様な問題を盛に辯じあつた。十一時硯川で休み、二時昏打で遲い中食をして、まだ日の高い三時少し過ぎに安代の山口屋に歸つた。直ぐ前の浴場に飛込んで浸つてゐると、山登りの苦みも、熊の湯の穢さも、すつかり忘れて、只愉快な記憶だけが殘る。確に自分は弱くなつたには相違ないが、まだ全然山登りを止めねばならぬ程でも無いと云ふ確信を得て、滲々有難いと感じた。

九州旅日記の中より

吉岡八二郎

九重山は日本風景論日本山嶽志などにも記載してはあるが、大日本地誌の記事が可なり委しい様である。九州の中央部に蟠踞して、高さも九州本土の第一であるのに、割合に人に知られて居ないと見えて、自分は其の名を知つて、一度登つて見たいと、登路の便否などを種々捜索して見たが、充分な記錄を見ることを得なかつた。數度阿蘇山へ登つた際にも、正北遙に高聳せる此群峰を、或は亂雲の間から、時にまた夕榮えの美しい空に瞥見し凝眸して、一向に憧れて居たが、其後測量部五萬分一圖の宮原號を見て、山中地形の概略を窺ひ得たから、大正四年三月半ばに西の方杖立温泉から小國村の峽ノ湯を經て、山中の白瀧温泉（五萬分一圖には筋湯とある）に入り込んだ時には、彌生の忘れ雪とやら、積雪二尺に餘る涌蓋山麓の茫々たる裾野の吹雪に道を失ひ、危く凍死の難を免れて石原の小屋に半は凍へた軀で轉げ込み、辛じて温泉には着いたが、山中の跋渉は愚か、雪に閉ぢられて歸ることさ

へ叶はず、空しく四日間を湯に浸りながら過ごし、幾に道の通ずるを待つて、北方森町に逃げ出した。其後同年五月再び、今度は南方宮地町から入り込み、三四日温泉に滞留して、其間四周の峰を渉り歩いたが、不案内でも想ふた程の不便もなく、また森林の美をば飽いて居るが、巉岩磊砢たる絶崖に亂れ咲く石楠の花と、奔湍岩を蹴る石溪の幽麗なのに攀躋の苦を忘れた程だから、知り得た丈けの案内に似たものを聊か記して見よう。當時多少は拙いスケッチなどを作つて置いたが、其斷片も悉く今は他所に在るし、他書を渉獵した譯でもないから、誤れる個處又は足らざる部分は、後遊の人に御示教を乞ふのである。

阿蘇谷から白瀧温泉まで

熊本から大津線に乘り換へて終點肥後大津驛に下車すると、此處は阿蘇外輪山の西麓で、土地は高燥であり、展けた四邊の眺望は頗る氣持ちの佳い處である。東方に長堤を廻らした様な俵山、鞍岳の間を破つて流下する白川の火口瀦をなす缺所から、阿蘇の山容を望むことが出來る。外輪山の性質上、外側は傾斜極めて緩漫であつて、熊本まで裾を展べて居るが、白川に截り割られて居る谷の兩側は急峻殆ど攀ぢ難いものがある。大津町から二里の大道を知らず識らず登つて立野峠の上まで來ると、此急峻な翠壁を對岸に瞻上げ瞰下ろすのである。夫が十月中旬であると、翠紅相錯り白流碧湍相次ぐ峽谷の艶美は、其奥に控えて居る焦熱地獄の噴火口に導く木戸口として、看板人を詐るも甚だしいものである。

立野の茶店はさして清潔とも思へぬが、位置が好いのか何となく休み心地が良いので、毎時も此店先に腰掛けて、饅頭を茶受けに澁茶の二三杯は、必ずしも自分のみではなからう。茶店を過ぎて間もなく道は左右に岐れ、左は登り右は降つてゆく。降れば白川に沿ふて阿蘇を西より南に廻り、やがて

高森町に達するのであるが、今は左に登つて較や緩やかな山腹を斜めに、山田の段々相並ぶ間を進むと、程なく阿蘇盆地を一眸の下に望むと共に、阿蘇五岳の内の杵島岳烏帽子岳が眼前の半天を領し、其中腹にこんもりと黒く茂つた森のあたりから、一沫の白い煙の立ち騰るのが湯谷湯泉である。

立野峠の分岐點から約二十町も進むと、右下に深く黒川の流が倚り添ふて來て、數鹿流の瀧が眼に入る。高さは十丈位もあらう、黒川の本流が迫り寄る岩間を跳ね超えて懸墜を瀉下する下は、渦巻きかへる廣い淵となつて、周りを絶壁に圍まれ、深さは測つた人もあるない。瀧の上流まで見通す程に四邊に立樹の茂つたものもないから、本末共に開展して居る爲め、些の凄氣を藏さないで、惜いことに平凡を極めて居る。

路は此邊から略〻直角に北に折れて、緩やかに阿蘇盆地の西北隅に降る。西方は鞍ケ岳續きの八百米突前後の外輪山が脚元から急に隆まつて、萱草の茂つた山腹を擴ろげて居るが、東北にかけては阿蘇の北麓を繞つて阿蘇谷の平野が開いて居る。夫を包んで建て廻らした屏風の様に、頂上を略〻水平に引き均らした其の内側は總て頗る急峻である。此平野は廣い處で南北の幅員一里に餘る半月形の全部が水田に耕されて、宮地内ノ牧の町を始め、幾多の豊かな農村が榮えて居る。平野の標高は五百米突からあるが、此中に立つては格別高いとは思へない谷底で、南邊は緩やかに隆まつた先が阿蘇火口丘の五嶽となつて、半腹以上は隨分急峻となり、殊に高嶽の北側などは絶壁仄立、匍ひ登ることさへ全然不可能である。

數鹿流の瀧から約十町で人家五六軒の赤瀬に到り、黒川を東に渡る。阿蘇の南麓を繞る白川が其麓を洗つて流れるとは反對に、黒川は火口壁の内側に沿ひ、平野の北緣を蜿り流れて、阿蘇を遠巻きにして居る。赤瀬の橋を渡らずに北に向ふ大道は、略〻黒川に沿ひ、其右岸外輪山内壁の崖底を掃ふて内ノ牧に出で、其處から蛇行二十町ばかりで外輪山を絡み登り、宮ノ原を過ぎて杖立温泉に通ずるの

である。

赤瀬の橋を過ぎてから大道は、火口丘の裾を田の畔や森の中、或は荊の茂る野を分けて、三里ばかりは人家に乏しい。右に杵島岳の秀峰を樹の間野末に仰きながら進むと、五月頃は叢の中から何か荷物を脊負ふた女が不意に出て來るので驚かされる。薬用にする爲に龍膽の根を掘り採るのであるといふ。うら淋しい三里を辿り盡すと、路の兩側に人家較や稠く、荒物屋もあれば菓子屋もある。黒川村の坊中である。北方からの阿蘇登山口で、宿屋も二軒ばかりあつて、案内者の周旋から準備品の調達も仕て呉れる。坊中から一里程で古神と云ふ處に來ると、大道が十字に交叉して居る。之を右すると日ノ尾峠を越えて阿蘇の南麓高森町に達する。左して七八町行くと宮地町に着く。田舎相當の町で、官幣大社阿蘇神社が在るので名高い。阿蘇大宮司の後裔である、今の阿蘇男爵は、昔風の乘鞍に長韉を揮つて馬を乘り廻して居るとか人に聞いたが、神社は樓閣の彫琢、廻廊飛檐の立派な建築に加へて、宮小路康文の大哉神德の大額が立派であるといふ。社域は平坦で森嚴の趣に乏しいのは惜し様である。此地には蘇川館と呼ぶ旅館があつて、奥には整ふた座敷もある。殊に朝暾夕暉を斜めに浴びて、怪奇を極めた山峨襞皺を、濃淡の隈を別けて明かに曝露する猫岳高嶽を座敷の内から見晴らす點は、必ず愛山家の氣に入つて、給仕の少し位の不行屆などは氣にも留めぬであらうと想はれる。

大津驛から此處まで約六里、裾野の路を厭ふ人は、四時間餘りの間激しい上下左右動を辛抱する氣ならば乘合馬車もある。歩けば大津から立野まで二時間、立野から宮地まで四時間半を要する。

宮地附近で四周を見廻すと恰も盥の底に坐つた様で、東から北を廻つて西まで、高さ約三百米突の堤に取り巻かれ、天地は此阿蘇盆地に限られて居る。あの堤の馬踏に登つたら如何なる景色が眼に映つるだらうとは、たとへ見慣れた眼に充分地圖で地形を視て置いた人でも、必ず好奇の想像を描くに

違ひない。宮地の町を北に出離れて田圃道を正北に十町ばかり進み、下原の部落から道は岐れて、左を進むと五六町で堤の底に突き當り、右を取ると山際に沿ふて西手野の部落から急坂となる。黒川の上流をなす幅二十間程の川を越すと、道が三方に分れて居るが、中央の者を取つて阪に懸ると暫く森林の中を登つて、やがて森を脱けて顧ると盆地を一眸の下に俯瞰する様になつて、阿蘇の峰頭が倍々高い。小さな岩崖の縁を傳ひ、茅の茂つた間を登り盡すと、外輪山の上端に立つが、此處に頭を突き出した突差に行手を眺めて、先づ呀と叫ばない人は少なからう。よしや悉しい地形圖を綿密に檢索して、凹凸起伏した地貌を呑み込んで居ても、地圖に依つて描いた想像と、今此處に立つて望觀する現實の差が、餘りに甚だしいからである。普通の考へでは阪路を頂上まで登り盡せば、其次は先づ降りであつて、從つて峠下の低地を眼下に望む見晴しを豫想するのが當然である。然るに三百米突の外輪山を僅の間に喘ぎ登つて頂上に着くと、眼前に展開された幅畫は、山下の田嚙部落ではなく、南北三里東西八里に亙る青毛氈を敷き展べたやうな茫々たる廣野である。見渡す限り一株の立樹も一棟の小屋もない。青毛氈には襞も皺もなく、群青を溶して、大鏝で撫で廻しても斯うまで美しくは均せまいと思はれる。尤も夫は自分が眺めた初夏の光景であるが、秋の末に草の霜枯れた代赭色や、又は雪の降り積んだ冬の景色は、嘸や荒凉寂漠を極めたものであらう。是位の平野は小國の我國にも決して珍しくはないが、盆地の底から這ひ上がつた突差に、眼前に突如として展開する眺望であるため、正に井戸から飛び出した蛙が周圍の景色に呆れるのと同様である。

阿蘇を中心とする此邊一帶の地形の科學的記述や、其成因に關する説明などは、別に其人があつて調査報文などもあるから、自分は雪だ眼に映じ胸に浮んだ感想を述べるだけであるが、打見たところ脚元から一面の平蕪が遠くまで展開して、殆ど何等の模様も不同もない單純な線の一色を、落ちついて仔細に觀ると、地圖に現はしてある通り、其間を縦横に抉つた谷とも溝ともいへる淺い凹地が不規則

に入れ違つて、時には巨浪の僅に高まり初めた様に緩やかに隆起した部分もあるから、此平野を其まゝ板木とし、一面に印肉を塗つて白紙に捺しても、隙間なく捺せるとはいへまいが、兩眼の高さで見通すと、譬へば千疊敷の一隅に肱枕して室内を見渡した時に、疊の敷き合せが判然見へぬのと同様なのであらう。此何萬疊敷の盡くる極てを限つて、一穂の鐵槍鋭く大空を劈く久住山の尖峰を衞るかの様に、右に大船山の截頭圓錐形、左に九重山及黒岩山の岩嶂が、九州の骨軸は我ぞとばかりに、さながら巨人の踞るに似たる其左右に倚り添ふて、幾多の稍低い峰頭が愾んで扈從し、襞を正した裾を長く曳いて居る。頂のあたりは岩壁殊に嶮しく、其間を綴る嫩葉の綠に紫紺を混ぜた床しい色澤が、裾に漫つた青綠に溶け合ふまでの間を、更に染め抜いた様に無數の岩崖が模様をつけて居る、その單調で廣い野原を前に控へて、我は顔に豪然と構へた態度は、眞に威容颯爽とも云ふべきである。附近に比肩するに足る山峰もなく、左方は宮ノ原附近の丘陵遙に低卑し、右は直入郡の小連脈が標高は我脚元より少く、由布鶴見の續きが遠く淡く顔を覗かして居るのみである。もとより我等の神經を鋭く唆るものはないが、麓を明かな地平線に劃られて可なり高く根張りも相當に大きいのを、配合の佳い前景を超えて、全體を適當の距離から仰望するので、其壯大艶美は九州に於ては祖母山、市房山、或は由布鶴見を別府から瞻上げたり、又は牧園附近から霧島連峰を望むに勝つてゐる。自分は雪に覆はれた此山を大野郡の神角寺の峠から望むのを除いては、九州第一の稱を與ふるに躊躇しないものである。況して立野峠から阿蘇を鼻先近く望むのとは比較にならぬ。更に山中の幽麗、岩崖の奇趣は、硫氣噴口などを除いても、九州本土の他の諸高山の到底及ばざる處で、晉森林美に於て祖母山や市房山に劣り、蒼海の波光を望むことの出來ないのが、鶴見岳や霧島山に及ばない。然し山中諸所に温泉が湧いてゐるから、登山者の便利に缺くる處もないのに、探見する人の少ないのは、交通機關に縁遠い九州本土の中に隱れて、世人の視聽に遠ざかり、東からは由布鶴見、西からは阿蘇を賞するのみで、此邊まで入

込む人がない爲に世間と沒交渉の故であらう。

眼を拭つて靜かに矚望すると、西麓の宮ノ原から久住に通ずる一路が山の裾を截つて走つて居る、その兩側に並んだ松並木が黒く斑らに五六町續いてゐる間に、瀨ノ本の茅屋が微かに夫かと認められる。凹い所には四五軒相聚つた荒村も多少ないではないが、夫らしいものも眼に入らない。此廣野を綾に絡らんで、草徑が雨上がりの蚯蚓の痕の樣に蜘蛛手に交錯して居るから、果して何れが眞の徑か分からないが、夫でも今登つた阪の上から始ど一直線に黒川溫泉を目懸けて、膝まで茂つた小笹や蕨を踏み分けた野路が踏み均らされて居る。路には違いないが、歩き易い處を勝手に踏みつけて自づと出來たものであるから、狹い處は消えさうであるのに廣い處は二三十間にも及び或は幾條にも分れて、一寸行き迷ふこともあるが、好い加減に一二町も進む內には復た合することもある。微かに見える樹立の茂つた黒川溫泉のあたりを目當に進めば、苞だしい間違ひはあるまいが、夫でも途中小さな谷川を渡る處もあり、小高い瘤を繞る折もあるから、踏み迷ふと二三町の道損を覺悟せねばならぬ。此原は小國村の組合牧場であるから、農閑の冬の末から初夏までは、無數の牛馬が放牧してある。狹苦しい厩から放たれて思ふが儘の放浪生活に、何處と云はず青草を覓めて跳ね廻つて居る。自分の樣に牛嫌ひな者は、黒牛飴牛が三々又伍々相聚つて、懶さうに四足を延ばしたり、歩むともなく草間をがさごそと踏み荒したり、時には道を横切つて無作法に長く寢て居る傍を、怖れながら通りぬけやうとすると、一齊に此方に頸を向け、迂散者奴と云ひた氣に大きい眼を鋭く光らせて見詰められると、もしや角を傾けて躍り懸るのではあるまいかと、わざと四五十間も遠廻りするが、決して行人に害は加へないとかねて此邊の村民に固く保證されて居ても、また決して氣味のよいものでない。實際自分は山から宮地に趣く際、瀨ノ本から西手野に通ずる廣い道を夕方近く獨り歩いて來ると、あたり近くに牛馬の影も見えなかつたのに、不意に響く蹄の音に怪ながら顧ると、遙か遠方から一文字の大道を此方目懸けて馬

が一疋駈けて來る、と思ふ間もなく左右二三町のあたりから、荒野の伏勢が俄に起つたやうに大小三十に餘る馬群が、鬣を振り亂し小笹の葉末を蹴拂つて勢凄じく駈け寄つて來るのには、殆ど進退度を失ひ、幸に東側に牧場を區劃する高さ四尺ばかりの土堤が長く築いてあるその上に駈け上がつた時には、疾風の如き馬群は已に自分から十間程に肉迫して來た。最早絶體絶命、そこで携へて居た洋傘を潑と擴ろげて斜に構へ、ぐる〳〵八方に氣を配つてゐると、彼等は其儘ぴたと停つてヂロリと此方を眺めて居たが、すぐと頭を轉じて氣の抜けた調子で元來た方へ歸るもあり、あたりの草を噛んで居るものもある。餘りの意外に自分は安心したものゝ、今までの追て方が馬にさへ氣恥かしかつた。後に聞けば、久しく飼主を離れて鹽氣に饑へて居るので、夕景に遠見の人影を味噌を與へるものと認めて、我勝ちに集つて來たのだといふ。之が馬であつたからまだしも、若しも自分の怖れる飴牛などであらうものなら、恐らく自分は氣絶したらうと、今にその折の氣持ちが冷めたい記憶に殘つて居る。

然し斯うした滑稽劇の起り得るのも五月末頃までのことであつて、農家の野良仕事が始まると、飼主は銘々に馬を伴れてかへるのであるが、數里の野原へ放し飼にした我馬を捜し當てるのは容易の業ではない。尤も轡も嵌めてないので、頸に細紐を通した青竹を結びつけて、夫に原籍が記してある。勿論一々札を視るまでもない。近寄れば飼い馴れた馬も人も見知りはするものゝ、夫れまで探し當てるのが一通りでない。此の季節に此野を通ると、辨當を背に負ふた旅姿の百姓に折々行き遭つて、其都度呼び止められ、斯う云ふ馬を見なかつたかと尋ねられる。馬に關する智識皆無の自分などは、青の三才駒で爪白の後脚の膝がどうのと特長を聞かされても、青い馬などは見懸けなかつたと、相手を面喰はせるばかりである。飼主は斯うして馬の行衛を尋ね、時には三日も朝から晩まで親子連れ立つて、野の末谷の隅を駈け廻つても、馬と主とは行違ひに一二里も此方彼方に離れて、遂に出會はないこともある。幸に谷陰の農家の軒などに立ち寄つた馬を頸に掛けた名札で飼主が知れると、端書で遠

方まで通知して呉れることもあるといふ。賴山陽が「地高無草木、瀰望唯黃茅、居民食蜀黍、行客避豺狼、名曰九重嶺」と詠んだのは、果してどの地點か知らぬが、野中の小高い處では八百米突を超え、「風力四時狂」であるから元より米は採れないが、昔は知らず今は狼に牧馬を害されることもあるまい。

野中の道草に案外暇取つたが、小學校が見晴しの佳い處に建てゝある小田と呼ぶ小さな部落を過ぎると、僅に高まつた丘の麓を幾重も廻つて、貧弱な水田の並ぶ幅二三町の谷間を小さな川に沿ひながら、分り易い道を黑川溫泉に着く。餘り奇麗でもない溪流を挾んで、溫泉宿が七八軒ある。設備などはいふも愚である。近鄉の農民が米味噌携帶で湯治に來るのであるから、客は割合に多いらしい。宮の原から久住に通ふ本道に沿ふて居るから、其あたりから來るには便利であらう。此處から西方一里半ばかりで滿願寺溫泉があるが、往て見ないから樣子は知らない。黑川溫泉から東北に谷を分け入ると、闊葉樹の茂つた森の中を過ぎ、廿町ばかりで水の清い溪流を樹の下陰で渡り、緩やかな斜面に何の樹であつたか、枝の廣く高い闊葉樹の空を蔽ふて森閑たる根元の筧を分けた小徑の、辛じて絕へざるばかりなのを猶ほ二十町も進むと、瀨ノ本から來る立派な本道に出る。是から先は白瀧溫泉まで迷ふやうなことはない。

强ひて立ち寄る價値も必要もないから、黑川溫泉に寄らなければ、宮地を發して西手野の阪を登り、獵師岳の南麓に五六軒かたまつて居る瀨ノ本の村影を目當に、此廣野を矢張り殆ど一直線に橫斷するがよい。此道は通行者も割合に多く、かつは南小國村と產山村との村界に沿ふて、自分が馬に追ひ上げられた土堤が、蜿々と續いて居るから、紛れる惧が少い。西手野の阪を登り切つた處から一里程もゆくと、割合に廣い道が交叉して居る。此處でともすると中央の道に踏み込むが、夫は何時の間にか黑川に向ふから、右に折れて必ず土堤傳ひにゆくべきである。此道の附近にも、隱れた谷間に斑らに

村落も二三ある様だが、道からは更に見られない。瀬ノ本の附近には樹立も割合に茂つて、久住山と獵師岳とを分つ深谷から走り出る水の奇麗な渓河が静かな此村を貫いて居る。川に出る少し手前に茶店がある、立ち寄つて澁茶を啜つたり辨當を食ふ位には差し支へない。行き暮れた時などには泊めても呉れやう。此處を東西に通ずる大道は判然たるもので、西すれば二里で黒川温泉、東に向ふと五里で久住町に達する。西手野から瀬ノ本を經てゆくのが、阿蘇地方から白瀧温泉に到る本道であらう。

瀬ノ本で渓河に架けた風雅な橋を渡り、小阪を登つてから、更にゆるやかな登り勾配に立派な道が、獵師岳の裾を縫つて南から西に繞つて居る。顧ると浪のうねりの搖れ殘る暴風(しけ)後の海に似た野面が、一面に綠を湛へた中にも、鰯の群に水色の變るやうに、濃い所もあれば淡い所もある。南から見通した時に見へなかつた蛭側の土の崩れや、谷間にかくれて居た小さな杉杜などが、浪頭の引きあとに顯れてくる岩礁に似てゐる。遠い地平は綠もやゝ紫にぼけて、帆船の去つた跡に殘るみをと見るのは、土色の赭黒い今來た道である。其上にわざと据へた様に阿蘇が夕榮えに輝く薄色の紫水晶を飾り立てる。碧に一分の灰色を混ぜた午後の大空に貼りつけた様に奇態を誇る猫岳が、右隣の高嶽に噛みつくのではないかと思はれるまで、惡相の亂杭歯を磨き立てて居る。此處から見ると、廣野は彌よ其領土を擴ろげて、眞に渺茫たる波野ヶ原の廣袤十里に餘る遠い果てに、裾を霞にかくして祖母山が、絶頂の巨岩に尖る金字頭を折々雲に包まれながら、卓を隔てゝ兩雄相對すとでも云はうか、わが立つ後に九州の覇王と濟し込んで居る久住の岩峰と遙に呼應してゐる。

黒川温泉から出て來た小徑と落ち合ふ處で、眞夏は水の涸れさうな石渓を横切ると、一目山の東麓を山腹にかけて之字の阪を登り、八丁原と地圖にあるやゝ濶い鞍部を乘り越すと、右から突き出た尾根の上から、黒岩山が其名の通り眞黒い頭を無遠慮に擡げて來る。岩と灌木とが手際よく配置された間に、斑牛が散歩して居る。崩れる許りに澤山の薪を負ふて涎の糸を曳く黒牛の後に跟いて、雨上が

りには隨分滑りさうな赤土の急な阪を降りかけると、杉の梢を透かして白瀧溫泉の茅屋根が、廣重畫くとある板畫其儘の姿を眼下に展げて居る。

白瀧溫泉場

涌蓋山の北麓を東に半周して、之と久住山群とを隔つる玖珠川の狹い谷を奥まで分け入ると、餘り登ることもなく、谷の詰まりの狹苦しい底に、白瀧溫泉の湯の煙が白く立ち騰つて居る。蒼苔の厚く蒸した茅葺の庇が、時といふ重荷に堪えかねて、うなだれてゐる二階造の溫泉が宿狹い道の兩側から半ば崩れかけた樣に建ち並ぶと云ふても家數は十五に足るまい。粗末な挽物細工の玩具や草鞋罐詰を順序不同に並べた店先を出つ入りつ、丹前姿や浴衣掛の不行儀の男女の群が提げてゐる手拭からも、湯の匂が街路に横溢する。汽車の煙や飛行機の噫などとは隔世の別天地である。

谷の方から來て丁字に突き當る右角に、古ぼけた頑丈な浴場がある。宿屋も四五軒あるが、自分は何時も本陣兩筑屋と云ふ家へ泊つた。二階座敷は何れも襖で仕切られて、何等裝飾もない片隅に昆爐や鍋が置けるやうに自炊向に出來て居る。客の特別な頼みでもあれば、旅籠勘定もするのであらうが、普通は何處の家でも木賃勘定で、註文に從つて飯も炊けば御馳走も用意するとは云へ、何處へ出るにも近くて三里遠きは六里の山阪を越さねばならぬ山の中では、日數に堪えぬ飲食物は貯藏し難いから、主なものは豆腐に鷄卵、椎茸に干瓢の外は、鯖の罐詰か干溫飩で諦めねばならぬ。

此頃と相場は大分違ふであらうが、自分の行つた頃は次のやうな規定が各室に貼つてあつたから、參考のために附記する。

木賃表

一、上室一人泊り　金十錢

一、下室一人泊り　金八錢
但し五歳より九歳までは一人泊り二錢、十歳より十四歳まで一人泊り四錢。
一、自炊者又は蒲團持參の御方は、前項木賃へ金二錢を増し可レ申事。
一、室内火を焚く事を禁ず。
一、上蒲團一枚一泊　金七錢
一、中　金六錢
一、下　金五錢
一、並敷蒲團一泊　金三錢
一、莚筵一枚一泊　金二錢
一、豆腐汁（一丁煮）　金十錢
一、下駄一足　金五錢
一、炭火大一箱　金十錢
一、炭火中一箱　金八錢
一ランプ一ケ一泊（中）　金三錢
一、ランプ　（小）　金二錢
萬不レ得レ止來客の需による時は、一泊より二泊まで
一、中宿料　金七十錢
一、並宿料　金五十錢
以　上
右之通、同業者一般協議の上、相定候事。

大正二年五月一日　白瀧温泉宿屋同業組合

主として地方民の客が多く、稀に自分のやうな温泉の靈效より山を慕つて迷ひ込む風變りの者が入り込むのであるから、都會で所謂桂を炊ぐとやら云ふやうな紳に適する設備食品は望み難い。季節により特に馬の便を圖つて註文でもしたら、生魚生肉の類を得ることが出來るかも知れぬ。その昔阿蘇の大宮司が猪鹿を狩したことがあつたと云ふが、現今では山中に是等の獸類が住みさうにもない。兎や雉や小鳥位のものであらう。食料品は總べて小國方面から馬の背で運ぶのであるが、住民は年が年中豆腐に生きて居ると見える。然し味噌汁に採り立ての獨活の馨りはかう云ふ山間に天與の珍味であらう。自分は曾て宿の者からシカを採りに行きませうと誘はれて、さ程容易く鹿が獲られるものかと不審かつたが、夫は折り取つた根元に二本の角を立てゝゐる獨活のことであつた。

此處には内湯はないから、一足五錢の朴下駄を突掛けて共同浴場に行かねばならぬ。しかし四五軒の宿屋が街路を挟んで浴場と向ひ合せに建てゝあるから、降る雨の中でも軒先から小走りに駈け込むことが出來る。大さは四間に六間位。茅葺の棟の尖つた薄暗い建物で、湯氣が凝つて冷たい雫がぽたりと落ちる古ぼけた梁の下から、五條の瀑となつて廣い湯槽の中へ落ち込む温泉は、肩を撲たして熱つい程でもない。透明無色とは云ふが、浴場の構造が暗く出來て居る上に、立ち騰る湯氣は雪の頃は別けて朦々と室内を罩めてゐるから、爽やかな氣分を缺いてゐる。浴槽は二十人位は優に漬ることが出來る。深さは膝までだが、中間に二本の丸棒が湯面に横に取りつけてある。夫を枕に背中の凝りを湯瀑に撲して、日の暮れるにも頓着のない浴客は呑氣なものである。白い湯氣は雫に霑れた茅庇の下を輕げにくゞりぬけ、横なぐりの涼しい谷風に乘つて颯と舞ひ狂ふ。

不便を極めたこの温泉に來る客は、湯に浸る外には新聞さへも容易に得られない。互に話相手を求めて生國も知らぬ他人同士が打ち解けやすく、同宿者は勿論、浴場に二三度顔を合して湯桶の譲り合

ひでもすると、やがて晝寢のひまに御國自慢の並べ合ひか、少し圍碁の嗜みでもある人ならこれ又相手に事は缺かぬ。かう云ふ簡素な溫泉に豆腐の單調を我慢さへすれば、別府あたりの遊樂地に跋扈する或種の人間が發散する厭ふべき臭氣に鼻を掩ふ必要もなく、悠々と塵腸とやらを濯ぎ得ること受け合である。

惜しいことには谷の行き詰りで碧い川がない。針葉樹闊葉樹の入り錯つた森林に乏しいこともないが、雨の後に立ち迷ふ雲霧の宿となる可き巖の嶮しいものがない。もし此處が阿蘇西麓の栃ノ木溫泉のやうに、崖に枕んだ危欄のほとりから、紺碧の潭や白い鮎返の瀧を瞰下ろし、座敷の中まで流れ込む春の翠や、窓外に瞻上げる絕壁を綴る秋の紅葉の眺めがあつて、岩壁から瀑と落ち込む溫泉の深さ隣に達する浴槽の底に沈んだ針さへ見透せる明るさ美しさに加へて、夏などは湯浸しの肌に冷しい山風が、河面かけて谷から吹き込み吹き拔ける爽やかさがあつたならば、自分は六里の野原を越えても、此山間に駈け込むであらうが、此處にはそのやうな風水の眺めがない。然し此溫泉あるがために九重山中を露宿の煩ひもなく跋涉が出來得るのであるから、餘り贅澤も云はれない。

此白瀧溫泉に南方阿蘇方面から入るのは、前に記した道が便利であるが、中津邊から來るには、彼の名ばかり高い新耶馬溪を溯つて森町に出で、玖珠川に沿ふて二里足らず上流の富迫と呼ぶ村に到り、其處から支流町田川に沿ふて宮ノ原街道があるから、夫を桐木の部落の手前で、小學校の傍から左の狹い谷に入り、串野の人家を過ぎて小さな峠を越え、小流を渡つてから愈よ登り道となる。此處までは家もあり行人も多いから行き迷ふ惧はないが、雜木の茂つた阪道はもつれた小徑が可なり多い。富迫のあたりから高く見えて居た正面の涌蓋山は此阪路からは見えなくなる。自分は曾て此處を降る時、雪の中に路を誤つて可なり廻り道を仕たことがあつたが、注意すれば馬蹄の跡が多いから紛れることもあるまい。登り切ると眼下に廣い萱原が、處々に松林を點じて、東方に限りもなく豁け、霧でも懸

るか吹雪にても巻かれると方途がつかない。峠から一二町急に降つてから、平らな野中を七八町も進むと、十字路の北側に人家が二軒ある。地藏原と呼ばれて居る。脚元から涌蓋山がせり上がつて、圓錐形の峰頭には毛すじ一本立てゝ居ない。其麓に倚り添ふて草野を進むと、夥しい岩塊が疣の様に散點せる間に、斑らに松や雜木の茂つた、黒岩山から北に延びた尾根が行手に立ち塞がる。石原を過ぎて七八町も行くと湯ノ坪溫泉がある。此處には人家も多く、暇さうな郵便局などもあるが、溫泉の設備は到底宿泊に堪えない。須く更に小阪を登降すること二十町にして、白瀧溫泉まで行くべきである。此道は途中に何等觀るべきものもなく、啻だ富迫からは附近に到る處溫泉が迸つて居る。壁湯（カベユ）、生龍（イキリウ）、川底、寶泉寺などがそれである。最後のもの〻外は、其名からして餘り感心しない。自分も是等の悉くに立ち寄つた譯ではないが、多くは村民が仕事の暇に漬る共同湯場がある位で、未だ設備などは少しもない様である。此道は耶馬溪鐵道を利用すれば、早朝中津町を發し舊耶馬溪の一部を新耶馬溪の全部を見て、一日の内に白瀧溫泉に達することも必ずしも困難ではあるまい。石原からは日が暮れても甚だしい困難もなからうが、自分は曾て降りてはあつたが、積雪の中を午前九時十分に白瀧溫泉を立ち、悠長な步調で午後三時に森町に着き、森町を午前八時十五分に發し、新舊耶馬溪分岐點の柿阪に午後一時十五分に着いたことがある。因みに森町柿阪間は五里三十五町十四間と云ふことである。

更に西方久留米邊からは、豆田を經て杖立溫泉に出で、山影水色共に翠の濃い杖立川を溯り、池ノ鶴の寒村から東方の二俣明里などの部落を經て、岳ノ湯、峨ノ湯まで出るのであるが、此邊一帶丘陵が皺の如く入れ違ひ、登り降りは疲れる程でもないが、眼先が開けず、窪地にかたまつてゐる村里の間か、藪蔭や雜木林を分けて、小徑に枝股が頗る多く、然かも草鞋に吸ひつく日陰路が極めて辿り惡くい。寧ろ土田（ヘンダ）ノ瀧を探つて宮ノ原に廻り、北里博士の鄉里とか聞く北里村の隣の奴留湯を經て、岳ノ湯に出るのが判り易い様である。唯だ此道は美しい涌蓋山を絶へず眞正面に眺め、夫が或は松の蒼

黒い赤土山の上から、或は里の子供が立ち並ぶ小川の土橋を踏まへて老柳の葉越しに、時にまた大根畑の畔に据風呂を焚きすてにした、黄な玉蜀黍を暖簾のやうに懸けてゐる茅屋の庇を掠めたりして、どう舞臺を變へても何時も嫣やかに自分を迎へて呉れる樂しみがある。春の頃平地の雪は殘らず融け去つても、遠見に立樹を見せぬ此山が、白妙の厚衾を脱ぎもせず、霽れ渡つた碧空に浮み出た時は、絶大の白玉を刻むと言ひ度くも、全膚に毛すじ程の黛の痕もなく、全く磨き上げたやうで、清淨の極であり單純の極である。あれが昔熱火に熔けた醜い熔岩から築かれて居るとは、どうしても信ぜられない。更に夕陽を浴びて薄桃色に染められた姿は一段の美しさである。

沿道の溫泉の中で奴留湯は、其名の通り溫度は低いが、粗末な旅宿はある。岳ノ湯には碌な浴場もない様で、湯は田の畔から湧き出してゐる。傍らに水車小屋に似た小家はあるが雨を凌ぐのが漸くである。峨ノ湯には强ひて我慢すれば一泊の出來ぬこともあるまいが、此等は何れも里人の風呂場と見るのが至當であらう。

峨ノ湯から十町ばかり樹陰の少しもない阪路を登ると、涌蓋山の北麓の裾野に出る。此處からひた登りに絶頂目懸けて、麓近くの雜木林を切り拔けると　半腹以上は萱の短いのが足先に絡まるのみである。其儘頂上を乘り越して草の斜面を南麓の鞍部の少し平らな處に降れば、小國方面から白瀧溫泉に通ふ山徑に必ず逢着する。峨ノ湯の阪を登り麓を繞つて直接石原に出る小徑も、多少闊葉樹の林を出入する。雪のない時ならば紛れやうはなく、夏などは左に岐れて地藏原で森町方面から來る前記の本道に會するまで、草野の中を照りつけられるよりは、此の道の方が少しは涼しからう。

以上の外、大分市又は由布嶽方面から湯ノ平溫泉を經て、千町無田の名ある荒蕪耕すに堪えないと云ふ濕潤な廣野を横切つて入る一路もあるが、自分は通過しないから首尾に亘つて玆に委しく書く智識がない。此他にも案内知つた地方民が往來する山徑は少からずあるが、荒野の岐路百出で迷い易い

こと夥しい。

久住山群

此火山群の總稱が九重山であるか久住山であるか、或は各峰の名稱が眞か誤か、幾分調べかけたこともあるが、要するに歷史的に意義の重要な點もない樣であるから、竹田地方と小國方面と多少稱呼を異にする點もあらうが、今は總て陸地測量部五萬分一圖の記名に從ふことゝする。また實際秩父の奥山などの樣に議論を生ずる程複雜した山群ではない。

山群中の最高峰は一七八八米突の久住山で、東隣の大船山と標高相等しといふてもよからう。位置を九州山地の中央に占めて居るから、汽車の沿線からは見られないと思ふ。比較的遠方と云へば、伊萬里近傍の靑螺山上から望み得る位であらう。北方からは玖珠直入の群山に伍して際立つて見えないが、南方から望むと群小を後へに從へて、居然九州の重鎭たる貫錄がある。然し數峰相倚つて近く攢つて居るから、秀拔の趣は由布嶽溫泉岳に及ばないが、阿蘇の東方波野ヶ原邊から見る如く、全く草より外に眼に映つるものもない、靑綠の廣野の地平線から、些の躊躇もなく崛起した山容は稀に觀る異彩である。高さは二千米突に足らない。信濃の飯繩山よりも百二十米突も低いから、南北日本アルプスの巨嶂に較べては物の數にも入らないが、外見內容共に飯繩あたりとは全然其撰を異にしてゐる。然も九州では覇王と誇り得べき此山が溫泉岳や彦山程にも其名を知られないのは、不幸であり同時にまた幸であるかも知れない。唯自分は熊本或は大分から十里の道を厭はないで、此山中の巖に映える石楠花を訪ふ人があると聞けば、嬉しく思ふのである。

涌蓋山

標高一五〇〇米突。白瀧溫泉を根據とすれば、何れの峰頭を究むるにも朝出て晩に還るのは容易である。殊に此山は標高近江の伊吹山を凌ぎ、滿山草に蔽はれて裾の邊りに僅かの樹林を抱へて居る點は略ゝ似てゐるが、山態は彼に比して頗る行儀よく、孤立せる圓錐體で、登路も亦極めて容易であるから、下駄ばきで駈け登ることさへ敢て困難ではない。

溫泉から小川に沿ふて豐後道（溫泉から南方肥後に通ずる道を肥後道と呼び、北方豐後に出づるものを豐後道と呼んで居る）を五六町北に降ると、疥癬湯に行く細道が川を渉つて左に岐れて居る。向ふ岸に半ば荒廢した茅家が一棟立つてゐる。此處に湧き出る湯が特に疥癬に利くのか、此病氣が嫌はれる爲に患者が此處にのみ浴するのかは聞き漏らしたが、自分が前後二回遊んだ折には、入湯者は見えない樣であつた。しかし斯う露骨の名を呼ばれては、卓效があるにしても、此湯に浴するのは何となく氣がひける。五月頃には此破屋の軒端からかけて川岸に、高さ七八尺の黃躑躅が鮮かな金色の花を枝も撓むばかりに咲き誇つて居る。

疥癬湯から南に面したなだらかな山腹に、小松や櫟などが疎らに立つて居て、其間に痩せた山畑が拓いてある邊りを七八町も登ると、較ゝ平らな草原に出る。若草の頃は青天鵞絨を敷き詰めたやうに美しい野の緣が切れ込んで、襞のやうに淺い谷だけを闊葉樹の嫩葉が麓から中腹まで飾つて居る。此緩やかな傾斜面を知らぬ間に一五〇〇米突の頂上まで登つてしまふ。頂上は四五十間四方の平地で、草の中にさゝやかな石祠が建てゝある。殆んど均整した圓錐體の頂點であるから、四顧の眺望を妨ぐる何物もない。山麓の周圍を殘なく見廻すことさへ出來る。東南に近く久住山群の懷に抱かれて居る白瀧溫泉の二階の欄干までも見えるから、反對に頂上に立つ人影を溫泉から認めることも出來る。宮ノ原を中心として南北小國村に連亙する丘陵地を西南一眸の下に鳥瞰し、遠い西の空に肥前の多良山、溫泉岳が薄紫にかすんで見える。手近には日田郡の波神嶽が寫眞で見るマッタアホルンの恰好を

して聳えて居る。北から東にかけては、彦山を中堅に筑豊の山巒が幾重にも背を重ねて、それと物色するのに甚だ困難であるが、由布鶴見の二山は流石に高い。山中何の奇もなく、水もなければ岩もない代りには、登路攀躋の苦もなく、山といふよりも寧ろ好個の展望臺である。白瀧温泉から女の脚で緩歩しても、頂上まで三時間半もあれば充分であらう。

久住山

九重（一七六四米）久住（一七八八米）三俣（一七四五米）の三峰が、白瀧温泉の東南に鼎足の勢をなして聳えて居るが、三峰の内で久住山が僅かながら最も高いから、之を主峰として置く。小國の荒野から望んで突兀高聳して見えるのも此高峰で、其絶頂の部分が西から南にかけて岩壁鋭く仄立して居るから、南麓を繞る久住街道から瞻上げると危く落ち懸りさうに見える。三峰共に遠目には全山殆んど衣を着けざる磊磈たる火山岩の堆積である。三俣山の西麓には一部闊葉樹の茂つた所もあるが、夫でも數年前の暴雨に山海嘯（やまつなみ）を起し、何萬坪の大小岩塊を一夜に瀉下して、谷底の硫黄精煉所を一溜りもなく埋めて仕舞つたといふことである。今もなほ慘憺たる當時の名殘りを一條の磧に留めて居る。

温泉から肥後道を取つて二三町の小阪を登り切ると、貧弱な山田が拓かれてある。其處から街道と別れ、黒岩山の裾に跟いて小溪を遡ると、徑は一歩々々と高く、丈の短い芝草や小笹の中を分け登るに伴れ、雜木の埋めた狹い溪を瞰下して、やがて較〻平坦な廣い草野に出る。八丁原（ワイダサン）を超えて向ひの一目山が目八分に伸び上がつてくる。其右には涌蓋山が圓錐頭を高く擡げて頂上の石祠が指點される。左に沿ふては黒岩山の半面を蔽ふた茂みが、眞急に頭の上に覆ひ被さつて見える。此芝原が小さな分水界をなして、東北に廣い谷が始まる、夫を分けて一條の小徑がある。温泉から寒の地獄に通ふ山徑である。自分は夕方の薄闇りに之を辿つたことがあるが、小徑ながら硫黄精煉所の坑夫が通ふの

で、割合に踏みつけてある。それでも灌木の中で澤を渉つたり、石傳ひに道を捜す位の覺悟を要する。現在では此廣い谷は一面に茫々たる草と灌木が茂り合ふた間を、更に小笹が綴ぢた無益な荒地であつて、大林區署が曾て赤松を植林したが、十八萬本とかの苗木も今は悉く枯木となり、其後更に檜が植ゑられてあるが、これは生育しさうである。然し何年かの前には欝葱として容易に分け入ることも出來ない大森林を成してゐた時もあつたことは、數圍に餘る大樹の根株が灌木の中に潜んで居るのを視ても分る。其頃は久住登山も容易のことではなかつたらうと想像されるが、今は鼻歌を謠ひながら四方を見渡して登ることが出來る。

小徑の交叉點から前面の隆起を目懸けて登ると少許で、大岩塊の錯落せる頂上に着く。土人は此處を一ツ石と呼んで居る。此處まで温泉から約一時間を要する。無雜作に堆積せる岩塊には岩鏡が一面に生えて居る。此頂上を乘り越して反對の側に少し降ると、南麓の瀬ノ本を潺々と流れる溪流の水源に落ち合ふて、更に左に九重山の横腹を掠み、芝草の斑らに生えた路もない急峻な斜面を横這ひして、久住山の尖頭を右手に見上げるまで進むと御池に達する。池は直徑二三町で稍〻圓形に近い。東北西の三方は岸からすぐ高くなつて、南の一方が稍〻開けて居る。周圍は總べて火山岩で、總に苔の蒸したものや又は稜角の鋭いものが不規則に散亂するのみである。水は極めて清冽で、渇を醫するに充分である。土人は御池と呼んで一種の信仰を捧げて居る。

御池の岸から約三十分で久住山の絶頂に登ることが出來る。頂上には殆ど平坦部がないといふてよい。測量部の櫓が多年の風雨に曝された殘骸を留めて居る。此絶頂は實に九州全土の最高點であると共に、又た殆ど九州の中心に在つて、四周を重疊せる幾多の大小山脈に圍繞されて居るから、展望は少し窮窟の憾がないでもない。北方は九重山三俣山の尖頭が近く目通りの高さに聳え、横髪に僅かばかりの粗毛を風に靡かせてゐる。兩峰の間の險しく截れ込んだ谷の向ふ側から、硫煙が白く細く立ち

騰るのが見える。この荒涼として生色に乏しい横廣い谷の底に、御池の水が碧い一面の鏡と凝つて、辛くも一脈の生氣を漂はしてゐる。

南方を望むと局面全く一變して、垂直に近く截り立つた脚元から擴がる大平野は、西は小國東は竹田から祖母山の麓まで、唯だ大鏝の一撫でに撫で伸されたやうに見える。自分が登つたのは丁度五月の青葉盛りであつたから、此荒蕪の平野も青竹色に染められて、其間に散點する村里や小さな杜や、久住竹田あたりの粉壁瓦影まで悉く眸裏に收むる所は、赤城の上から關東平野を展望するに似て、小さいだけに又た手近いだけに美しさは格別であつた。此鳥瞰の壯觀は九州全土は勿論、本州の中にも極めて少ないであらう。

阿蘇の群峰は西南から迫つて威嚇的な噴煙は猫岳の奇態と共に頗る穩やかならぬものがあつても、我より眼下に在るのは面白い。少し左に遙か遠く祖母山傾山は、淡い紫紺色の衣紋を整へて、絶頂の巨巖は今や正に雲の冠を戴かうとして居る。自分は久住山を辭して一週日の後更に祖母山を攀ぢ、其絶頂の巨巖上に踞して、久住山頂を眺めた時には懷しさに堪えなかつた。正東には大船山が手の届く程に近く、赤裸々の圓錐頭を我と水平の高さまで擡げて居る、其左には名詮自稱の黒岳が、物々しい姿を見せて居る。

晩秋から冬期にかけて好く霽れた日には、可なり遠方まで見えることゝ信ずる。肥前の溫泉岳多良岳は勿論、佐賀の北に峙つ天山、さては又有田燒の原料を供給する以外に奇景に富める黒髪山や青螺山は見えるが、肥後の市房山が遙に呼應するか否かは、玆に斷言することが出來ぬ。

惜しいことに西の方は、阿蘇外輪山の鞍ヶ岳から北に連つた高距八九百米突の長堤に眼界を制限されて、熊本平野の一端をも覗き見ることが出來ない。もし有明灣の波の上に溫泉岳を眺め得たならば、頂上の展望は更に幾層の美と壯とを加へるであらうのに。又夫と同時に熊本附近から此尖頭を仰望す

ることが出來たならば、獨り阿蘇山をして其名を恣にせしめなかつたであらうのに。

九重山

御池の岸から直ちに岩角の無作法に突き出した急勾配の斜面に、芝草の疎生してゐる所を遮二無二這ひ登れば、容易に九重山の頂上に達する。西北側の溪間には幾分か闊葉樹が枝を交して居る部分もあるが、夫とて森林と云ふべき程のものではなく、頂上は唯だ大小の岩塊が狼籍として居るのみである。眺望は久住山頂と大差はない。北方は泉水山と三俣山とに挾まれた廣い谷が更に北に展びて、千町無田と呼ばるゝ茫々たる薄の茂つた荒蕪地に續き、夫から田野の村あたりまでも眼下に指點することが出來る。

三俣山と九重山と互に腕を組んで居る其腋下とも云ふべき溪の中から盛に硫煙を噴き、岩石が盡く硫黄華のために蒼白色に染められて居る。此處に九州硫黄會社の精煉所があつて、伏樋式とか呼ぶ方法で、硫煙を暗渠中に導いて凝結さした硫黄を更に釜に熔かして精煉して居る。火山岩礫の堆積した極めて不安定な傾斜面に之字形の棧道を造り、多數の坑夫が硫黄を運搬して居る。綠樹の豐かな炭坑はまだしも、銅山なども一般に煙毒の爲めに附近山野の草までも枯れ盡し、荒涼凄慘の氣が亞硫酸の臭氣と混じて、此世の天地とは思はれないものだが、火山地方の硫黄採取地は此趣が更に甚だしい。綠の森や清い水などは見られないで、唯だ焦石の堆き間から渦巻き騰る白煙より外には些の生色なき斯ういふ處で毎日貴い汗を流して働く坑夫の生活が想ひやられる。

精煉所から西方にさゝやかな小川を越して四五町行くと、闊葉樹のそこ此處に立つて居る中に寒の地獄と呼ばれる冷礦泉がある。旅宿が一軒と浴場が一棟建てゝある。礦泉は平地から湧いて、五尺四方ばかりの浴槽に溢れて居る。無色透明で臭氣もないやうであるが、極めて冷たい。浸した指先は夏

でも凍るかと思ふ程である。自分の行つた時（大正四年五月二十七日午後五時）には妙齡の娘が一人、此冷水中に首まで浸し、兩手の指を胸の上に固く組んで兩眼を閉ぢたまゝ身動きもせず、ぢつと冷苦を堪へて居るやうであつた。婦人病に卓效があるとか聞いたが、此やうな冷水中に漬つて五體を思ふ存分に冷し、夫で病氣を治する效があるものかと不審に堪えぬ。草津の時間湯は熱いので隨分苦痛のやうだが、此寒の地獄の冷礦泉浴も亦た劣らず難業であらうと思はれる。相當の滯留客もあるやうに見えるが、四境靜寂を極めた谷の中で、然も人里とはかれこれ一里以上も隔てた疎林中の一軒家、軒端に見えるものは九重三俣の突兀たる峰頭と、其根元から不斷に立ち騰る硫煙ばかり、普通の温泉宿とは餘程變つた趣がある。

此寒の地獄の礦泉が靈效あるもので、また斯の如き冷泉に浴して治病の效あることが如何にして發見されたか、夫等に關して自分は聞知する機會を失つたが、後遊の士にして調査される方があつたならば御示敎を賜りたいものである。

三俣山の頂上に登らなかつたから、絶頂の委しい事を記す知識がない。然し其名の通り、絶頂は三個の小峰に分れ、久住九重の二峰に比ぶると、多少灌木などが茂つて居るらしい。其西北側は可なり深く浸蝕された數條の急な溪が輻射狀に切れ込んで居る。豪雨の際は水流が隨分猛烈で、時に岩石の崩壞する際には、濁流が大小の岩塊を驅つて一瀉千里と奔下する勢は頗る凄じく、其響だけでも此三俣山が裂けて飛ぶのではないかと、夜などは碌々眠られないことがあるとは、精煉所の坑夫の話であつた。

三俣山の東麓には小さな温泉があつて、法華の湯と呼ばれて居る。浴舍が一軒建てゝある。岩骨の洗ひ出された急斜面にあるので、不便極まる境地であるが、脚下に深い谷を隔てゝ大船山と相對して居る、何處から來るにしても甚だ不便であるが、南麓久住附近からは白瀧温泉に比して遙に近いため、

農民などの來り浴するものが幾分かあるやうである。

御池から窪地の草の生えた間を東方に進む、闊葉樹や躑躅の蒸した岩塊の間を縫つて、一條の奇麗な小川が流れてゐる。時々小鳥の啼く聲も聞える。此處を更に東方に突きぬけて、此小高原の緣まで來ると、大船山とは谷一つ隔てゝ相對するやうになる。

久住山中は一般に樹木乏しく、森林と稱すべきものは皆無であるが、此方面だけは木立が乏しくない上に、登攀殆ど不可能と見ゆる斷崖絕壁を綴つて、石楠花が咲き盛つてゐる。自分は其美しい花を上から眺めて此谷を降つて見たくなり、案內の老爺が不賛成であつたのを强ひて谷底まで降つて見たが、久住山中の幽麗は實に此谷間に一切秘められて居て、御池の岸を眺めて後戻りするやうな不熱心な登山者の眺むることを容さないのであると思つた。岩角に縋つて前方を望むと、大船山が碧い空の大部分を占領してゐる。下を覗き込むと脚下三百米突の谷底から、一條の細徑が遠く久住町のあたりまで續く青野原を走つてゐるのを微かに見たが、絕えて行客の影を認めなかつた。

久住町の方面から此谷を登つて、久住大船の兩峰を連ねてゐる低い鞍部を超え、北麓田野村方面に通ずる道は、丁度今脚の下になつてゐる谷底のあたりで、蘆や虎杖の茂つた淺い盆地の中に通じ、降雨の際は左右から落ち込む野水が悉く此處に集つて、一時的の池を現出し、少くも二三日は通行不可能ならしめるといふことである。此谷間の道の兩側は頗る樹林に富み、殊に大船山の西南麓は欝蒼としてゐるが、岩と美しい石楠花とは久住山側に限られて居るから、春此山に登る人は此溪谷（溪谷といふても直立三百米突位であるから長さは元より知れたものである）に分け入らぬまでも、御池から戻らずにせめて此谷を俯瞰する高原の緣まで辿り着かれんことを切にお奬めする。

白砂登山記

森　喬
日高信六郎

一

上信越三國の境は、古くは稻包山と信ぜられて居た、それで其東を通ずる峠に三國峠の名が與へられたのであるといふ事だが、事實三國の境に跨つて居るのは白砂山（二一四〇米突）である。此邊所謂三國山脈の西部は、地形が實に錯綜を極めて西の岩菅、北の苗場等の火山と接觸するあたりは、標高こそ高くないが、魚野川清津川の深谷を抱き、野反の池の靜寂を藏し、此地方に特有の熊笹の繁みは濫りに人の近づくを許さず、未だあまり人に知られて居ない一種の神秘境を形作つて居る。「山岳」十年一號及び十一年二號に掲げられた木暮氏のスケッチや其の解說に依つて、初めて此地方の一斑を知つた私共には、その未知の溪谷と、處女の山岳とを訪づれ度い心が起つた。

秋の週日を此の地方に費さうとの計畫は立つたが、皆目樣子が分らないので諸方に照會狀を出し、地圖とも相談の上で上州吾妻郡六合村字入山の花敷溫泉を根據として、白砂山から佐武流山苗場山迄の縱走を試みようと云ふ事になつたのである。

二

大正六年拾月拾二日。晴天。輕井澤より花敷溫泉まで。

霧深い朝の四時頃輕井澤驛に着いた私共は、そこで一休みして八時四十分草津輕便鐵道に搭じて出發した。草津行さらしい人々を乘せた小さな車は、霧の高原を泳いで舊輕井澤をすぎ、迂餘曲折しつ

つ離山の背面を喘ぎ登つて行く、峠を越えると、松にからまる蔦紅葉の美しいのが目立つ林の中を、ゴト〳〵と分けて行つて、林を出た草原の、海抜四二〇〇尺といふ標柱のある所で上州に入る。四阿白根の山々が秋天の下茅原の上に現はれ出して來た。十一時終點吾妻着、某宮家の牧場の中だとかで、何の風情もない原中の、木立が疎にある所に過ぎない。大きなリユックサックを背負つて爪先下りの黒土道を、淺間の雄叫びを後に四阿の背を行手に眺めて行く、草津白根には白い雲が屯してゐた。應桑の村迄半里許りであるが、私共はつひウッカリしてゐて道を迷つた爲に、三十分餘りも無駄足をして午頃に此處を通つた。村の出外れて草津道に分れ、吾妻川の支流熊川を右に瞰下しつゝ與喜屋、下田などの部落を經て、吾妻川の流れを渡り、午後二時二十分に長野原町に着いた。町の取つつきから一寸した峠を越えて白砂山の東に發源する須川の流域に入る。この峠からは寒峰が振かへつて仰がれた。これから川を右に、小さな部落を送り迎へしつゝ四時小雨着、澤渡を經て草津に行く前橋街道との交叉點である。長野原から二里、荷が可成りに重く感ぜられて歩がはかゞしくない。これからは道が急に細くなつて上下も激しい。梨木から坂を昇り初めた頃には餘程暗くなつて來た。闇の中を殆ど手探りで、京塚の民家に辿り着いた時は六時を過ぎて居た。蠟燭を分けて貰つて、又危かしい坂道を上下して漸く溫泉の燈火を下に見出した時は嬉しかつた。坂を下ると湯場の前に出る。それから橋を渡つて取つつきの家が大和屋であつた。時計は七時二十分を指して居た。

三

拾月拾三日。晴。野反池に遊ぶ。

昨夜は暗くなつて宿に着いたので、よく様子が分らなかつたが、宿は道を隔てゝ白砂川の積に向つて居る。數日來の雨に河の水嵩が稍增して、瀬の音高く流れて居る。宿の少し下手で西から一支流が合流する、澁峠に發源する長笹澤で、河中所々に溫泉が湧いて居る爲か、少し水が濁つて居る。之に架

した橋を渡つた對岸の水際にあるのが湯場である。溫度も低く、あまり奇麗でもない。底の砂や石が鐵に當つて一寸氣味がわるい。昨夜行燈を提げて入りに來た時は、一寸狐に抓まれた樣な氣がした。夕方になると山稼ぎ歸りの村人で可成りに賑ふ。泉質は硫黄泉らしい臭がして居た。このすぐ上手の河原にも湧く所があるそうである。

宿屋は三軒ある、大和屋と謂ふのが入札で村から溫泉を借りて營業して居るのだと謂ふ。主人の山田善正と曰ふのは三十餘りの男で、此近所の山の事にも可成りに通じて居る。

豫て賴んであつた案内は、小林區署の用で明日迄山に行けないと曰ふし、他には然るべき者もないとのことで、今日は一日休養と定めて野反池に遊ぶ事にした。

宿て道を聞いて九時十五分に出掛ける。小林區の官舍の裏手から左折して坂道を登り、根廣の村落に入る、朝から少し曇つて居た空は漸く晴れて、正面に尨大な横手山と、茶色に兀げた白根山とを見た(九時四十五分)。これから今迄の道に分れて右折する、一面の草原を登つて行くと、刈つた草を山の樣に背負つて下りて來る女達に會ふ、餘程上まで根廣の人が草刈に行くので、道は可成りにいゝ、野反池迄は岩菅を刈りに行くので、ちやんと道がついて居る。登るに從て天益々晴れ、淺間、鼻曲等の山々が間近く見える、尙登ると行手に八間山(ハチケンサマ)が見え出して來た。茅を分けて十一時十五分辨天山の三角點に達した。村ではこの東南にある峯を辨天山と呼んで居る樣である、その方の頂には祠もあり、高さも此の三角點のある峯より幾分高いかと思はれる。

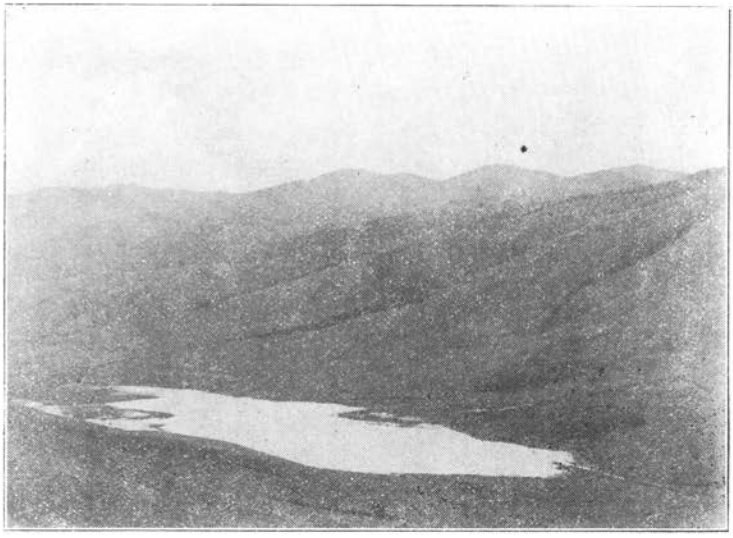
こゝらは一面に茅と笹に覆はれて、北方脚下には野反池が白く光つて澄みかへつて居る、四面山に圍まれた北の一方を破り、千澤(センザワ)となり魚野川となつて信濃川に注ぐ。中央が括れて殆んど二分された樣になつて、南北に長く東西に狹い、思つたよりは非常に明るい感じの池である。池を圍むスロープは撫でつけた樣な茶色の茅原に青い笹原を交へて、所々に白樺の林が黄葉美しく窪地を飾つて居る。

白砂山は八間山の陰になつて見えないが、大倉山（ダイクラ）から八十三山（ハチジウサンヤマ）の邊迄は、黒木と樺の森と笹原とを見せて、行路難を想はせる。雲が少し湧き出して來た千澤の谷の西は、辨天山から續く大高赤石の山々が丸味を帶びて連なつて居て、岩菅山の姿はそれに遮られて見られなかつた。其左には横手山、白根山、四阿から淺間の山々が鮮に眺められる。池畔に下りて、池の南端に小さな流れが注いで居る所で中食にする。清く冷たい水が滾々と流れて居る、絶えずブク〳〵と底から湧く泉が到る所にあると見えて、水量が比較的に多い。池の畔は浮草の根が堆積して腐つたのかブクブクして草鞋を濕らす。

此池は周圍の山から流す土砂と、萍が繁茂する爲とで、年々著るしく狭くなつて行くそうである。深さも到つて淺く身長を沒する程のところは無いと云ふ事であつた。ブラ〳〵と池に沿て歩いて見る、池畔の彼處此處に清冽な泉が數知れずあつて、長閑な秋の晝にブツ〳〵と微かななつかしい音を立てゝ湧き出して居る、私共はこの野反池がすつかり好きになつてしまつた。

歸途は八間山と辨天山との間の峠に出た、こゝからは淺間の烟低く六里ヶ原に這ふ左手、鼻曲山かと思はれるものゝ上に、秩父の國師甲武信破風の山塊を見、國師の上に眞白い不二の姿を認めた。左手には近く榛名、子持、小野子の上に赤城が控え、その左に皇海山（スカイ）らしい姿を望むだ。この峠から尾根傳ひに八間山迄大した苦もなく登れそうであつたが、遲くなりそうなので止めにし、一時四十分一瞥を野反池に與へて下る。こちらの路は幅は廣いが可成りに荒れ、石が露はれ笹が繁つて居て、あまり歩きよくはないが、楢の紅葉が美しい。左手に大原の氣持のよい高原を眺め乍ら下る。二時五十分岐路に出る。石標に右大原、川浦、左野反、岩菅と書いてあるのに依つて、野反方面からも岩菅山に登り得らるゝ事を知つた。和光原（ワクワウバラ）で宿の主人に遇ひ、其の實家に寄つて一休みし（三時―三時四十分）、近路を取つて宿に歸り着いたのは四時十五分であつた。すぐ湯に行く。

夜になつて案内者が來た、字引沼の山本照吉（五十五歳）といふ元氣で頑丈な、人の好さそうな爺



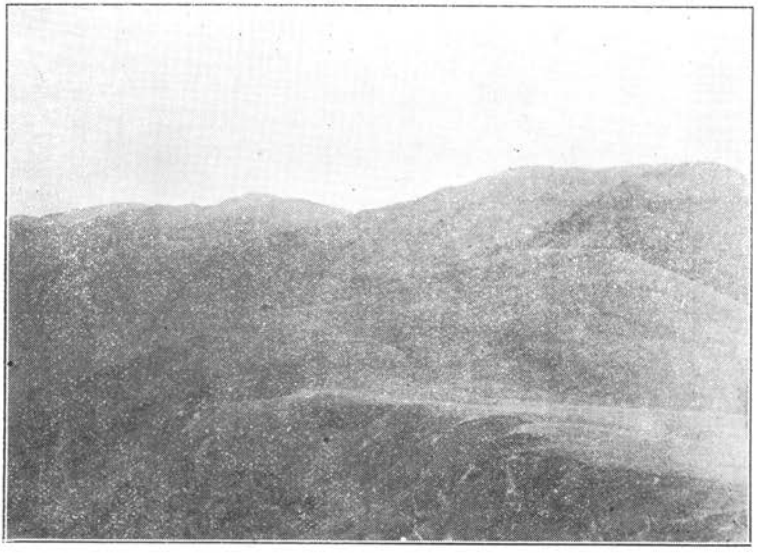
辨天山三角點より西北に大高山を望む（日高信六郎氏撮影）（其一）

さんで、非常に此の邊の山の事に委しい。相談の結果白砂苗場迄の縦走は、笹が深く且つとても豫定の日數では行けそうもないので一切割愛して白砂山に登ることゝし、明日野反池から千澤の一支流ハンノキ澤を溯り、八十三山の南で野營し、第二日に白砂山頂を窮めて川浦に下り、白砂川を下つて第三日に歸着する事とし、他にもう一人人夫を雇ひ、日當は一圓といふ約束に定めた。

四

拾月拾四日。快晴。花數より八十三山（北澤上流）まで。

二階の障子を開けると、碧空が快く目に映る、ふんわりと泛ぶ薄雲が淡紅色に榮えてゐるのも何となく快い。米や天幕等の荷物を二人の人夫に分擔せしめ、七時五十分宿を出た。人夫の一人はやはり六合村大字入山字引沼の山本嘉久平（二十九歳）。正直な、登山に興味を持つた好漢であつた。昨日の路を取つて野反池に向ふ、天氣が素的にいいので大變な元氣である。十時二十分辨天峠に着、今日は峠の東の辨天祠のある峰に登り、擔いで來た大双眼鏡を出して、秩父の山々とその上に高く白く端坐する不二とを見



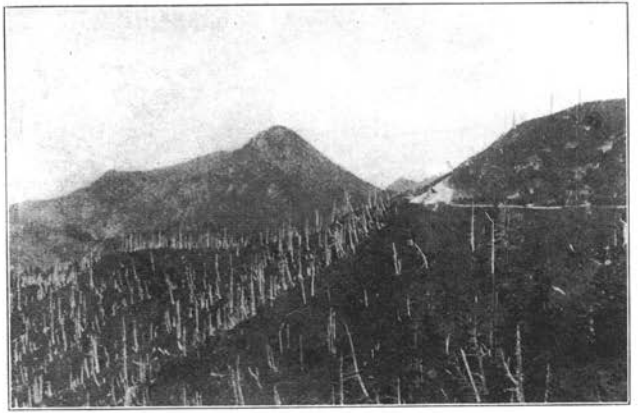
辨天山三角點より西北に大高山を望む（日高信六郎氏撮影）（其二）

る。池畔に下り立つたのは十一時、それから池に添うて暫く進む。池には鯉が多く居るそうで、ヤスで突いたり或は淺い所なら追ひ廻して鋸で打ち切つて捕るといふ。漁夫の泊る破れ小舍が池の西岸に見えた。十一時二十五分池をはなれて、右手の八間山から引く尾根へ懸らうとする草原の小流れのほとりに草を敷いて中食にする。秋の日はポカ〳〵と暖い。この邊に澤山生えてゐる草は、刈つて綱にすると強くていいといふ、岩菅といふ其の名は岩菅山と關係がありそうに思はれる。

午後零時二十五分出發。笹と草とを押し分け覺束ない道迹を辿つて尾根を越える、ネンバ坂といふのだそうだ、昔は魚野川に沿うて立派な路があり、牛馬を通じ、越後から牛の脊で運んで來た荷と、上州から馬の脊で積んで來た荷とを、此邊で交換したものだと云ふ。二十分で峠の上に達した。行手に大倉山の黒木や樺等の茂みの上に三角櫓が見える、八十三山の邊も見えた。（八十三山といふのは、昔し盛に此邊へ盜伐に入つた時―入山の人々は佐武流の邊迄も入つて居たそうで、色々の地名も其折に付けられ

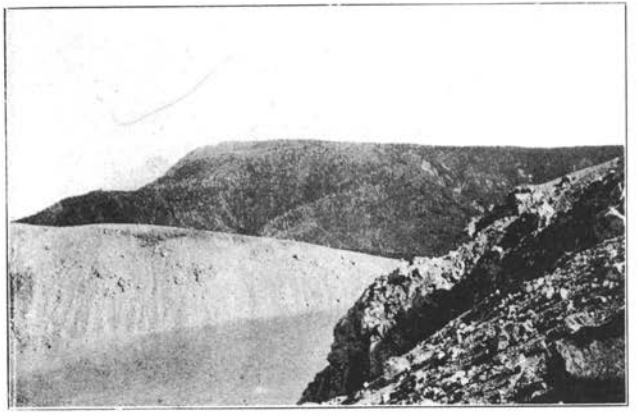
たものが多いと云ふことである－に、此山を上下するのに八十三度も休む位嶮しいといふ所から名付けられもたのだ相で、又大峠とも云ふ、地圖に記名してある八十三山の北に當る二千百二十米の圈で示された峰を指して云ふ様である、私は便宜の爲め以下假に地圖に云ふ八十三山を其の東北に發源する澁澤の一支堂岩澤（ダウイハ）の名に因んで堂岩山と呼んで置く）。道はこれから急に稍右手（南）に廻り氣味に下る、熊笹がひどく茂つて、道は川の様に凹く掘れてゐるので歩き悪い、十分にしてハンノキ澤に出る。切明から秋山に出る越後道は、これから北に向つて、國境をなす峠を越え、更に大倉山にかゝるのであるが、余等は澤を溯つて行く事十分で、左から來るタカンボウ澤に入る、水量も少なく傾斜も緩く樂な澤であるが、兩岸はかなりな絶崖をなしてゐる。川について右折左曲すること三十分位で、初めて左から一溪が合流し、本谷は東に折れて堂岩山に向ふやうになる。本谷を登ると竹が多くてつらいと云ふ事で、この二溪の間の笹の斜面を登る事にして一休みする（一時三十五分－二時）。急な笹原に微かに遺る昔しの盜伐の時の荷出し路の迹を辿つて十五分も行くと、一寸笹が切れて木立に入る。この邊から白根や行手の八十三山が見え出して來た。漸く國境に近附くと又々丈餘の熊笹が現はれて一行を惱す事一通りでない、やつと重圍を脫して一休みする（二時三十五分－五十分）。これからは少し左へ卷き加減に登つて三時國境の木立には入つた。肩幅廣い岩菅の英姿が見えて來た。林の中を國境の少し北側を東に向つて行く、栂と樺との木立の中には可成りハッキリと路の迹が殘つてゐるし、切株も多い。二十分計り行つてから北へ少し下り氣味に行くと澤に出た（三時二十分）。堂岩山と八十三山との鞍部に發源して北澤となり千澤に注ぐもので、地圖に八十三山とある山の字の邊に當つてゐるらしい。溪流に沿ふた窪地に笹を刈つてテントを張る、西には溪の正面に岩菅の山塊が夕榮えせる雲を背景に壯嚴なる沈默を守つて控えてゐる。木を伐つて盛な焚火の準備が出來た頃には、最早四邊は眞暗になつて了つた。

1

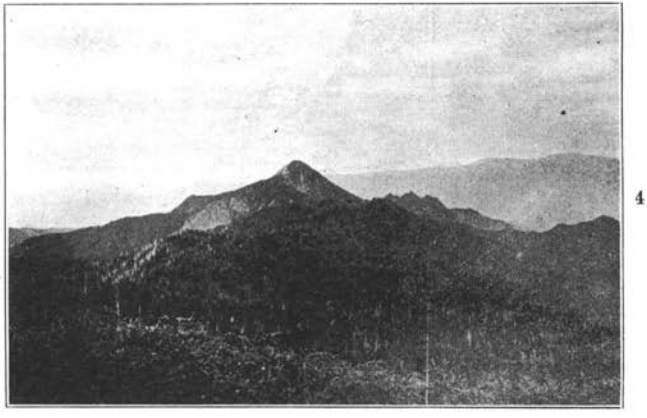


2

3



4



1　濁峠の山道より望める笠ケ岳

2　白根山より上信國境の山脈(山田峠附近)を距てゝ笠ケ岳及坊平山を望む

3　白根山水釜を距てゝ横手山を望む(以上辻本満丸氏撮影)　4　濁峠西端約二千米の地點より望める笠ケ岳及小笠(武田久吉氏撮影)

五

拾月拾五日。晴後大霧、雨。白砂山に登る。

夜は割合に暖かであつた。夜半に一度曇つた天は曉に及んですつかり晴れて、澄んだ空に清い星が仰がれた。五時半に起きる、谷間に屯する白雲の上に岩菅の姿が眞正面に仰がれる。豫定はこれから白砂山に登り、下りはレウシ澤（白砂山の南に發源し、白砂川に注ぐもの）に沿ふて川浦に出、川傳ひに歸るといふのであつたが、未だ雨後の水量が多からうといふので、今日は空身で白砂に往復し、明日此處から直にレウシ澤に出て歸る事にした。午前七時五十分輕裝して出かける。食事の頃から谷の白雲が怪しく搖らいで、斷續して東に走つたが、出かける頃には既に滿天に瀰つて仕舞つた。木立の下を笹を分け乍ら東に登つて、八時十五分堂岩山（二〇三四米）に辿りつく。栂の木立に覆はれた丸い頭の峯であつた。此頃になると霧は益々深く、南から國境を越えて凄しい風が吹き上げて來る。少し先へ行つて白いブリキ板に林班界五六〇號と記したのが栂の木立ちに打ちつけてある邊で、霧の晴れるのを待つて焚火をする（八時二十分）。暫くすると急に霧が薄らいで、白砂山の頂が高く高く左肩は急に右肩に一二の隆起を起したピラミッド形を聳やかして居るのが一瞬間仰がれた、九時十分出かける。少し下ると偃松が現はれて來る、脊梁（リッヂ）の上州側をからむ、東は獵師澤（當字）の原流らしい、此時又瞬時霧が破れて左に間近い八十三山の右に澁澤を隔てゝ、白砂の北に連なる佐武流（サブリウ）山と其の右に平たい苗場山の頂とが見えた。谷間から頂にかけて紅葉黄葉に美しく彩られた景色は、當日余等に許された唯一の眺めで、只一瞬間に過ぎなかつたが、忘れ難い印象を殘した。此邊の山谷の秋は實に美しい。次の瞬間には一切空に歸して、我等は唯霧の中を偃松と戰ふ。一つの小突起の南を絡み、次に暫らく信州側を傳つて二千四十米突の圈で現されてゐる峯に取り付いて一休みする（十時十分―三十分）。この邊にはかすか乍ら切明の迹もあり、稀に標木も見出される。これからは偃松と石楠木など

を分けて一寸下ると、笹もそろ〳〵現はれ初めて一行を惱まし、霧は益々深く卷いて來る、一寸した小隆起に達し（十時四十五分）更に十五分にして白砂山との鞍部と覺しき處に達した、南は切立つた樣な急崖の一枚岩で、下は霧が渦卷いて見るべくもない。微かな切明を辿つて東へと登る、霧に濕つた深い笹を分け乍ら登るのは可成りに辛い。幾度か頂上かと迷はされた小突起を踰えて、十一時四十五分漸くにして頂上二千百四十米突の三角點に達した、野營地から四時間を費した譯である。頂上は笹に覆はれ、上州側も一面に笹と草の斜面をなしてゐるが、信州側は灌木林に覆はれてゐる。その笹の中に壞れ殘つた三角標柱のみが淋しく立つてゐる。寒いのでそこそこに中食を仕舞つて歸途につく、零時五十五分。此頃から霧は雨となつて、濡れた笹は辷る事夥しい、一時五十分二千四十米突の峯に歸り着く、これから澁澤の上流堂岩澤（御堂の樣な巨岩が聳立してるから名付けたと云ふ）に向つて好い加減に急崖を下る。笹につかまり最後に崖を下りると澤に達する（二時二十分）、赤味を帶びた岩が多い、（下流の澁澤には銅や鐵の鑛石が出るといふ事である）。水量は大したことはない。この急な澤を西に十分計り溯り、二つに岐れた右のものを取り、遂に澤を離れて笹原に入り、五分も登ると堂岩山八十三山の間の鞍部に達する（二時四十五分）。これから西に空澤を十五分も下ると、右手から水のある小溪が合する、合流點の下が即ち前夜の露營地で、一足先に歸り着いた人夫の焚火の烟が淡く立ち昇つてゐる（三時半）。其夜は山の樣に切つて來た栂の木の大焚火をたよりに激しく降り注ぐ冷たい雨を辛くも凌いだ。

六

拾月拾六日。霽。野反を經て花敷に歸着。

夜明方に稍小降りとなつた雨は、出發に際して一時歇んで、岩菅の姿も雲の上に現はれたが、それも暫し又深い霧が出たので、獵師澤に出る計劃もパンノキ澤を溯つて八間山に登る計劃も、皆拋棄せ

ざるを得なかつた、濕れに濕れた笹を分けて來路を引き返す一行の姿は可成りにみじめなものであつた。霧の日の野反池は又變つた趣を呈して居たが、それを味ふ餘裕もなく、足元から飛び出す兎に驚きつゝも、ひたすら路を急いで三時半には宿の入口にスブ濕れの身體を現はした。

翌日は又小降りの雨の中を輕からぬ荷物を背負つて暮坂峠を經、澤渡から中之條に出て歸京した。三四日居なかつた間に谷の紅葉が際立つて美しくなつて居るのが目につく。野反の池、白砂川、魚野川、白砂山、岩菅山など今一度是非行つて見度いと思ひ乍ら、未だ其志を遂げ得ない。唯此地方の概念と信賴するに足る好導者（恐らく附近にて唯一のオーソリティーならん）とを後遊の士に紹介して、更に新なる紀行の出づる日を待つて居る。

七

餘記。

此地方の事を記したものには震災豫防調査會の毛無火山近傍地質調査報文（清水理學士）がある、野反池岩菅山苗場山魚野川等に關する可成りに精細な記事がある。

以下一行の導者山本照吉の談に依つて一二を附記する、但し當時眺望絶無、且つ實際歩いて見ない部分が多いこと故、誤謬なきを保し難い事は、豫め御斷りして置かなければならぬ。

一、白砂山の一等三角點の標石は、白砂川を通つて上げたものである相だ、以前獵師が多く入つてゐた時は道もよかつたが、今はすつかり荒れてゐる。白砂川はずつと上流迄溯れる、最も上の忠次郎澤から上（カミ）の合山（アヒ）（地圖に云ふものの東北二一二〇米の圈を有する峯を指すものの如し）を經て白砂山に登るのが樂な路である。又獵師澤を登つて行くことも出來る、此の澤には岩の洞穴があつて泊れるといふ事である。

一、白砂から北に行くと障子岩といふ絶壁がある、（地圖の二〇三五米の三角點の北にあるものを指

すか）佐武流山の北には月夜岳といふ山がある。これ等を縦走するのは笹がひどくて厄介である、五月谷間に殘雪のある頃、谷から登るのが最も樂である。

一、岩菅山へは魚野川を下つて十二澤（烏帽子岳より東流）を登りつめて、東の覗き（裏岩菅を指すか）に取りつく、此の以外には東面からの登路は無い、西の覗き（岩菅）へはそれから峯傳ひに樂に行ける。（大正八年十月記）

山嶽諸相

辻村太郎

今から暫くの間、私は山を愛する諸兄と山の形の事を語りたいと思ふ。然し御斷りして置きたいのは、私の智識は勿論てすが、一般の地形學の狀態も、未だ日本の山々の形狀を遺憾なく說明する程になつて居ないので、此篇の中には總て斷定的な言葉を使用することが出來ないことで有ります。然し愛山家諸氏も私も、山の樣々な容貌をみると何か其の起原に就て考へたくなつて居る。そこで不完全なことは萬々承知の上で、此所に地形學上からみた山嶽のことを少しく論じやうと思ひます。

岩山の話　私共が高い山を仰ぎみて、又登つてみて、驚喜する所のものは澤山あるが、山頂附近にいつも夥しく見られる岩石は確に其の一つであります。たとへ霧の爲に四方の眺めが奪はれても、又は時期が早かつたり遲かつたりして、高山植物の花盛りに出合はなかつたにしても、我々常に平野の土を踏んで生活してゐるものが、堅い踏みごたへのある「いはほ」の上を歩いたり這つたりしただけでも何だか有難い。

ませして自分の周圍に、穗高嶽や劒ヶ嶽のやうな巖の殿堂がづらりと立ち列んでゐるのを見たり、又五郎嶽や大天井嶽のやうな其の殿堂の墟址とも云ふべき亂石の山が聳えて居るのを見ては、何か自然を畏敬するやうな心を起さないでは居られない。我々は此所にはじめて地殼の眞の姿を見たやうな氣がします。私自身の經驗で申し譯がありませんが、相模の小田原に產れた私には、迂濶にも岩山など云ふものは晝て見る位、有つた所で何所か遠い外國の高山に存在するものとしか思へないで居た。然しながら北の方に聳える丹澤山の山腹に、所々見える白ぼい崩れや、時々遊びに行つた箱根明星ヶ岳邊の野山に赤く禿げてゐる方言（びやく）と云ふ、山崩れのあとなどに心を惹かれてゐました。所が十六歲の夏でした小島烏水氏の日本山水論を讀み耽つた時に、かねて地圖の上で名だけは知つて居た槍ヶ嶽と云ふ山は、槍の穗先のやうに尖つて、而も全山巖石で出來てゐると分つた時には大袈裟に云へば電擊を受けたやうな氣がしました。上野の圖書館でみたジアバニースアルプスの中には、其の岩山の寫眞が立派に載つて居たし、其の翌年には木曾駒ヶ嶽の寶劒嶽の岩山をみて驚き、更に翌年には大天井岳の邊から槍穗高の巖峰を眺めてあまりの感激に聲も出ませんでした。

其れから後の數年間に讀み得た地理學者や地質學者の說は、此等の山の形や其他今迄夢にも知らなかつた種々の地形の起原を敎へて智識的興味を與へて呉れました。此れ等の學說を覺束ない筆で少しく記述して、日本の山嶽の形相にも何所まで適用できるか考へて見度いのが此の篇の目的であります。

本當は、現今の地形學者のするやうな、系統の立つた形で此の問題を論じたいのですが、今は雜談をして居る積ですから、秩序もなく書く事と致しませう。

御存じの通り地表の形狀を變化さして行く力の中で、總ての地方を通じて行はれるのは風化作用でありますが、其中此處では器械的風化作用丈を考へませう。此の作用は岩石を分裂して、細片にし

て、所謂地被（Waste cover）を以て山の表面を蔽はうとします。此の岩屑は重力其他の作用で匐行（creep）をなし、極めて徐々に山巓から山腹に、山腹から谷底に動いて行く。蹈むと直ちにガサ〳〵と落ちかかる立山や白馬嶽あたりの所謂「ザク」を考へれば、登山家には匐行の作用は直ぐ合點が行きますが、森林草野に蔽はれた山の山腹にも此の作用は行はれて居る。ただ極めて徐々である丈の違てす。此の如き地被は岩石を蔽ひ隱して了ふ、而して此んな山腹は graded slope なる滑かな斜面であるし、山の頂きは丸く、尾根は鈍く丸味を帶びてゐる。詳しい事は先きに一般の地形の輪廻の所で申しますが、要するに風化作用は何時も山の形を圓滑にしやうとします。これは植物の繁茂する濕潤な熱帶溫帶の地方では勿論ですが、乾燥した沙漠地方、草木のない寒帶地方でも略同樣であります。然し此等各地方には其々違つた營力が有つて侵蝕作用を及ぼしますので、氷雪、乾燥等の輪廻に屬する種々の地形を現します。一方濕潤な地方では流水があつて侵蝕作用を營み、風化作用が供給する岩石片を運搬します。侵蝕が激烈になると、地被を取り去つて岩石を露出せしめる。侵蝕の激烈なのは、大體地形の輪廻で云ふ幼年時代か壯年の山嶽でも、起伏（Relief）の大きな、つまり高山峻嶺の間てすから、岩石は其んな所に多く曝露されることになる。

即谷に就て云へば、幼年に近い谷で天龍峽のやうな回春川（Rejuvenated river）の兩岸だのに、斷崖千尺と云ふやうな景色を造ります。楊子江の有名な三峽の險も要するに此の種類のものらしい。黑部川の谷も種々の點から幼年の形貌を具へてゐて、鐘釣山の岩や猿飛の峽流などは迅速な侵蝕の結果てす。

岩石が露出すると否とは、風化と侵蝕の何れが優勢かに依るのですから、風化作用に對して特別に強いやうな岩石て出來た山があれば、石峰攢立の狀を呈することが有ります。鋸嶽のやうに高さの割合には見事な岩山の景色を呈するものは此んな原因に因るのでは無いてせうか。アルプ地方の白雲岩

の山が壁立して居るのも此等の原因てせう。霞澤嶽が南畫の山水のやうに神河内の谷に臨んて居るのなども、此の山を作る堅い小紋岩の御蔭だと聞きます。

それから、或る山を構成する岩石が部分に依つて硬軟の差が著しいと巉岩が聳立するやうになる。或る種の岩石には此の現象が特に顯著で、左程高くない山にも斷崖を生じ、岩峰が崛起し、意外の奇景を造ることがあります。日本では、火山集塊岩に此の癖が甚しく現れ、耶馬溪、妙義山、小豆島の神懸、阿蘇外輪山の南部内壁などに見る奇景を造り、其れ等は見物に容易な所から、昔人に持てはやされて居ますが、勿論ほんとの高山の岩山の莊嚴觀には比べものになりません。其外硅岩、石灰岩などが此の傾向を持つて居るし、花崗岩にも時として著しく此の性質が現れます。それは猿橋附近の岩殿山や、甲斐御嶽の昇仙峽のやうな景色を造る。高山の頂で云へば燕嶽の頂上が丁度庭石を列べたやうな花崗岩塊が白砂の間に立つて居る樣子が代表的なものてあります。測量部の露岩と云ふものの一部をなし、信州越中あたりで岩巢とか「びんす」とか云ふものは此の類でありませう。此れは森林の蓊鬱と茂つてゐる熱帶地方にも間々見る所で、新占領地カロリン群島や、佛領のタイチ島あたりの玄武岩山ても、屢見事な岩峰を示すのは、玄武岩の下に軟かな火山灰砂層などが有る爲てす。之を譬へて見ると河流が硬軟樣々な土地を流れると、其の堅い岩石と柔い岩石との境に瀑布を生ずるやうなものであります。

岩屑の流れと云ふものを考へると、斯う云ふ露岩は丁度岩屑の流れに於ける瀑布であると云はれて居ます。中國地方には燕岳のやうな花崗岩の塊が山の上に散點する所が低い山に澤山あるし、山陽線寶殿驛附近のやうな全くの丸い岩石の丘陵もありますが、此れ等は亂伐其他の人工的原因に依る土地荒廢の結果出來た、云はば不自然な地貌で、此の現象は朝鮮などに行けば一層著しくなつて居る筈です。

次に山嶽の凹凸の程度、即起伏が大きくなり、傾斜が急になつて、一口に云へば山高く谷の深き高山峻嶺になつて來ると、急な山腹に於ける徒行の速さも大きくなり、從つて地被の厚さも薄くなると、丁度河に譬へたならば急流奔湍に相應すべきものであつて、稍もすれば岩屑の瀑布即露岩を現ずる機會が增して來る。のみならず、傾斜が餘り大きくなつて、安定の界限を越えると、直ちに山崩れが起ります。多少永久的な常に崩壞するやうな所は、測量部で云ふ崩土、頽岩の地貌即「なぎ」「びやく」「がれ」「あらし」等の方言に呼ばれる所のものであつて、紺青色に茂り合つて居る森林などの中に、或は白く或は赤き傷迹を見せて、山嶽に荒怪な有樣を呈せしめる。我々は遠望して此ふ云ふ山嶽の峻急なことや、然らずんば崩壞し易きことを察することが出來る。斯樣な地形が特に名につく時に、山の名が其の特性を以て呼ばれたのが、赤薙山とか、大枯山とか云ふ風なものであります。遂に此の種の崩壞が頂にまで及ぶと、全山草木のない岩山になつて赤兀とか白兀とか云ふ名を冠せられるやうになります。赤石山系の「がれ」は地形圖に表れたのや、紀行文に敎はつたぎりで知りませんが、地藏嶽、木曾駒ヶ嶽などには、良く似た花崗岩の眞白な崩れが、雪と紛ふばかりに其處此所に見えます。甲斐駒ヶ岳の一名白崩山などは此の高嶽の甚しい破壞の狀を表す良い名だと思ひます。駒ヶ嶽と云へば此の山の東面の所謂「くら」をなす大露岩は汽車の上からよく見えますが珍らしい特徵だと思ひます。

高山相　高山相と云ふ言葉の表す意味は、中々復雜で種々に考へられますが、傾斜の急峻なこと、起伏の大きいこと、などと共に岩が崔巍、嶙峋など云ふ形容詞で表されるやうに、山巓に矗々として聳えてゐると云ふことが隱然と表されて居ます。此の岩石の露出が今迄述べたやうに急傾斜、急侵蝕からくる直接の結果丈けであると、高山相の意義も餘程簡單なものになるのですが、困つた事には山嶽が其の地方地方に於て一定して居る所の、樹木草本の生育する限界の高さを超過すると、必然的に石山に成つて來ます。日本ならば偃松などがやつと生長してゐる所謂「たけ」と呼ばれる荒山になりま

す。此れから高度を増すに從つて、萬年雪が堆積するやうになり、やがては氷河を現出せしめるやうになつて來ると、純粹のアルプス型になつて地形は最早や氷雪輪廻に屬する所のものになり、尖々として天を刺すやうな岩峰は、我等の通常稱する所の高山形の極點を示して居るやうに見えます。然し此の地形は寧ろ氷河によれる尖鋭山形とでも云ふべき、別種の部類に屬せしめた方が穩當だと申します。なぜならば丁度高山植物と云ふ名が、どうかすると極地に近くては、妙に聞えて來るのと同樣に、此の氷河の彫刻による巖峰は、極地の方に近付くに從つて低い山嶽でも全く同じ形貌を具へて居るのは、諸威北部の山や、シュピッツベルゲン島の名が示す所の尖鋭山嶽を見ても直ぐ氣が付く事であります。

其故に嚴密な意味に於ける高山的巖峰は、臺灣の高山とかニューギネアの崇嶺とか、確かには云へませんが新高山のやうな、氷河時代の氷雪の影響を蒙らなかつた熱帶地の山嶽に求めるより外無くなります。日本あたりでは未だ此の不安が仲々ありますから、氷雪の侵蝕を考えないで高山の形を論ずるのは大變危險であります。

扨てどなたも御存じの通り、我々が飛驒赤石其他の高山嶽に登るに際して、針葉樹林を通りぬけ、偃松があらはれるやうになると、先づ通過するのは大きな圓石の亂積して居る尾根であるか、又は角ばつた岩片が滑かな斜面をなして、ハクサンイチゲやシナノキンバイなどの叢をのせて居る、若くは燕岳あたりに見るやうに眞白な花崗岩の細砂がサラ〳〵と崩れ落ちて居て、コマクサだのタカネスミレだのが離々として生へて居る所もあります。更に尾根に上り、峰を攀ぢると、其所は前のと大同小異ではあるが丸石の堆積は峰を構成する事が最も多く、木曾駒ヶ岳大天井嶽、五郎嶽惡澤嶽など此の種類で有りませう。長い間動かない大石にはイハブスマなどの地衣が一杯着いて居たりするのを見ます。此れは信州の或る地方で「ごうと」などと云ひ、又柳田氏の云はれたやうに日本の方々に強雜、

郷路山、などと云はれるのと同じく、五郎（ごーろ）岳の名を作らしめた所以でありませう。獨逸の言葉で云ふフェルゼンメーアとかブロックメーア（岩石の海）とか云ふのに當つて居るかと存じます。

此の「ごーろ」なる地形から岩片、砂礫と云ふやうな順序に、此れ等の斜面は順次風化による岩石の分裂の順序と、同時に眞の岩山が風化作用に屈服して平滑なグレーデッドスロープに移り變つて行く順序を示すものであります。此の階級にある山頂なり山腹なりは勿論荒寥とした感じは有りますが、次に述べるやうな巖山のやうな豪壯な形には未だ達しません。立山の眞砂峰の邊や、白峰北嶽其他日本アルプスの諸山頂の一番多くの部分を占める地形で、削つたやうな滑かな岩石片の斜面が恰も石の洪水の如く頽れ落ちて居ます。一概にも云へないでせうが此の程度の山嶽の峰線（Crest line）は悠々とした平たい双曲線狀をなして峰から峰へとつゞき、反つて中連山地（Mittelgebirge）と稱すべき、先づ二千米未滿位の山々に見る鋸齒狀を示して居ないやうな氣がします。此の感じは木曾駒ヶ嶽山脈常念山脈等を仰ぎ觀た時に得ました。

此所で附言致したいことは、此のやうな亂石から出來た「ごーろ山」や「マサゴ山」なりは、今の氣候の本に行はれる營力が昔から變らずに行はれた結果生じたのであるか、其れとも漸次に寒冷多雪になり行く氣候の下に生じたか、乃至は前には氷雪の多かつた氣候の下に或る種の地貌を生じ、やがて氣候溫暖に趣くにつれて現時の地貌を作るに至つたのであらうか。詳しくは申せませんが私には何うも第三の考が眞に近いのでは無いかと思はれてなりません。此れは次に申す氷河事變（Glacial accident）と名づくべき世界的な季候の變化が近き、地質時代プライストシーン期にあつた氷河時代に關係するものと考へられます。此の時期には一時降雪の量が多くなつて來て、後で述べる理由から氷雪及重力による運搬力が敏活に行はれて、以前峰頭を蔽ひ盡して居た岩屑は撤去せられ、巖峰が現今みるよりも遙かに廣い地域を占めたことを想像することが出來ます。氣候が緩和に趣いて、氷雪の運

搬作用が減ずるか、又は其前にても裸出した高山頂では、さしもの巖峰も激甚な風化の斧の前には一たまりもなく破碎されて、稜々として天にそゝり立つ岩が根も、先づ縦横に裂罅が出來る。立山雄山などに此の狀態が窺はれる。次に此れ等の裂罅に沿つて壞敗した結果、岩山はゴーロ山になる。岩山の山腹に轉落した岩片はザクを作り、ザクの領域が漸次山頂に擴張されて、遂に岩屑が山巓を完全に蔽ふやうになればマサゴ山と化す。更に分裂の程度が進むか又は極めて分解し易い花崗岩のやうなものであれば、燕嶽附近にみるやうな白砂珊々と云ふ光景を形づくる。此の理由から此の如き峰を目して敗墟に比したく思ふのであります。此れ等の山脈を萬里長城のやうなものに譬へたならばマサゴ山やゴーロ山は荒廢した城壁と見られ、高い峰に殘る巖山は櫓樓の未だ全く壞滅せずして殘存せるものと云へます。

勿論此の様な場合にも、風化に對して抵抗力の大きい岩石で構成された峰が最も長く殘留するのは、堅固に築かれた建築の永久に風雨に耐えるのと同様で、鷲羽岳北方の一小尖峰小鷲の如きは故加藤鐵之助氏の觀察によつて富士岩より成つて周圍の花崗岩上に突起して居ますし、烏帽子岳が筍のやうに崛起して居るのも、大黒岳の奇巖が隆起してゐるのも、乃至は立山の龍王岳などの秀でて居るのも多少此んな關係があるのでは無いでせうか。

氷雪の彫刻　此より飛騨山系の高峰に見る所の巖山に云ひ及ぼしたいと思ひます。申すまでも無いことでありますが中央日本の大山系を通觀して見ると、略等しい高度を比べて見れば巖峰の數は北方に行く程多くなると、而して殘雪の量が之に準じて北方に夥しいことは、何となく、氷雪と巖山との間に密接な關係のあることを暗示して居ます。勿論高度に對して岩石の反應することは甚だ鋭敏であります。でありますから穗高岳、槍ヶ嶽の群峰は其の著しい高度によつて、立山連峰、蓮華連山は其の可なりの高さと北に偏する位置からして、其の萬年雪の量と崔嵬の狀は人を駭かせずには置きま

せん。

氷雪の侵蝕に關する研究は、近代に於ける地理學の後代に誇る事の出來るものの一つであります。ラスキン先生は早く此の作用が山の形に及ぼす影響を書いて居ます。今はもう氷雪が山嶽を水蝕作用から保護するなど云ふ考を持つ人は殆ど無いばかりで無く、氷蝕なり雪蝕なりが水蝕作用に比して遙に強力なものだと云ふことは一般に認められる所であります。水蝕作用が風化や匐行と歩調を保ちつゝ徐々と彫刻して行く山嶽が、氷雪に蔽はれる時は俄に迅速に破碎されて行く。勿論一番最初多雪氣候の始りには萬年雪が谷の源にあたる「たをり」の下に溜ります。谷底も雪渓になつて萬年雪に滿されます。萬年雪は或る厚さに達すれば、傾斜に應じて徐々に動くと云ひます。雪の下には結氷點附近に於ける溫度の變化から劇しい岩石の分裂が行はれ、岩片は萬年雪に運搬されます。此の雪蝕の作用は近頃ボーマン氏がエール大學のアンデス探險の結果發表したものの中に詳細に論じられて居る。此れは私共に取つては大變に重要な發見であつて、此の作用によつて解釋すべき地貌は劍ヶ嶽や蓮華連峰の東面の巖峰では無いかと思はれます。殊に劍ヶ嶽の著しい特徴は、彼の銅色のドームの邊は勿論、黒部の谷に向けて派出して居る幾つもの尾は、其の上部に多少の植物があるにしても大部分巖山であつて、其の間には萬年雪に埋まつた險峻な谷が有り、谷の上の「たをり」は所謂窓なる凹字狀に裂けてゐて、彼のやうな嶮絶な容貌を呈して居ます。が此の岩峰の下に後に述べる槍ヶ嶽、穂高嶽に夥しく見える岩屑の堆積が殆無く、赤裸々の狀態にあるとであります。小黒部谷で觀測された通り、劍ヶ嶽は最も深雪の地と云はれる所を以て見ても、雪蝕作用の今に著しいことを想像出來るでは有りませんか。白馬嶽杓子岳鑓ヶ嶽の東面の諸溪に挾まれた山脚は、割合に岩石が良く露出して居ります、勿論此處では杓子澤の上方にせよ、鑓ヶ岳の山腹にせよ小紋岩の岩屑は灰白色に懸つて劍ヶ嶽のやうな眞の巖峰とは行きません。ここに追憶されるのは故加藤鐵之助氏が小黒部谷に遊んだ折に、萬年雪が流動す

るのでは無いかと思はれたと、其秋の地質學談話會で語られたことであります。

萬年雪が厚さを加へると、氷の結晶の凝集の度が大きくなつて、段々氷河の氷に近付き、透明になり氷に特有の青味を帶びて來、流動性に富んで來ます。斯うなると下底の岩石に及ぼす壓力も大きくなりますから、研磨（Scouring）の力も大きくなり、岩石を破碎しては持ち去る攫取（Plucking）の作用も增進して來ます。雪蝕は氷蝕と共々斯かる氷雪體の底に働くやうになる。

比較的に小さな氷雪體が峰近くに横はつて居れば、上記の旺盛な削剝作用の爲に山體は其の氷雪體、即小氷河なり雪田なりの周圍に於て非常な勢で破壞されて行きます。勿論此の破壞並に運搬は風化作用よりも遙かに優勢で有りますから、山體は氷雪の周圍から掘鑿されて行つて圈狀の斷崖を生じます。此れが小川博士の譯されて圈谷とした、獨墺の語で云ふカール（Kar）英米で云ふサーク（Cirque）佛蘭西で云ふシルク（Cirque）であることは先刻御承知の事と存じます。此のサークの地形の主因は、然し長い間の疑問でした。つい先頃物故した米國のジョンソン氏の所謂ベルグシュルント說などは一番有名なものでありましたが、最近にはボーマン氏の新說があつて、氷河の上端、萬年雪盆のまはりに深く口を開いてゐる裂罅即ベルグシュルントの存在は其んなに必要では無いと云ふとです。勿論多くの場合には存在して居て、特有の作用を及ぼすのですが、氷蝕及流動する萬年雪の雪蝕を合併すると、此の兩作用の合力がシルクの作成に與つて力があるのだそうです。勿論萬年雪丈では不完全な淺いサークしか出來ず、眞の氷河になるに至つて立派な椀狀のサークを作ることが出來るのは申す迄も有りません。サークは一の偉大な石切場になぞらへることが出來ます。氷雪體は强力な石切器械であります。其の切り出した石は堆石として氷河の末端に堆積する。

サーク壁の斷崖はサックリ割つたやうな巖壁で、大斧鑿小斧鑿など云ふものに似て居て、此れは岩石の種類などには餘り關係ない。此の斷崖は氷雪蝕の進むに伴つて外部に擴大して行き、遂には隣り

同志のものが切り合ふやうになり、尾根の兩側に背中合せになつて居たものも接觸するやうになると、斷崖と斷崖との挾む刃のやうな薄い巖の尾根、即獨語で Grat とか、佛語又英語でも云ふ Arête など云ふ種類のギサギザした一種の鎌尾根であります。アルプの寫眞など見れば幾らも見付かる所のものです。三つ又は四つのサークに挾まれた峰は、遂にサーク壁に取りかこまれて、勢ひ、鋭く尖らざるを得ないでせう。アルプの何々シュピッツェとか、何々ホルンとか、ダン何とか、エグイユ何々とか云ふ名の付いた山の多くは此の種類のものだと云ふことで有ります。但今迄は小さなサークが此のやうな所謂壯年のサークを作つた場合を申しましたが、アルプ邊のは多く大規模な複雜なサークの集合ですし、萬年雪の量にしても、サーク内に滿ち滿ちて居て、やゝともすれば溢れて中間のアレートを雪で埋め、尖つた巖峰は大海の中に孤聳する岩礁のやうに氷雪の上に抽き出してゐるのがペルネルオーベルランド邊りの巨人達の容貌であります。斯樣な狀態はカウカサスからヒマラア、天山、カラコルムと云ふやうな大山系中の崇嶽に於て高調に達して、驚くべき岩の塔、雪のドームを建立するやうになる。此等の氷雪の彫琢を受けつゝある山嶽は、建造中の宮殿に比すべきもので、氷の斧雪の鉋は日夜巖峰を削つて行き、岩壁の面から落下する岩片は氷河の車に積まれて完全に運び去られ、全山洗ふが如く一岩塵も留めない有樣であります。

翻つて本邦のアルプス的な高嶽を觀察致しませう。何と云つても一番に指を屈し無くてはならないのは、槍ケ嶽と穗高嶽の連峰でせう。日本のマッテルホルンと云はれた槍ケ嶽のオベリスクは眞にマッテルホルンのやうに周圍の氷河の氷雪蝕によつて生じた尖峰で無いにしろ、大體に於て曾て氷雪裡に小さなフィンステラールホルンのやうに聳えて居た時代を想像することが出來ます。穗高の危峰は同じく小紋岩類の堅硬な岩から構成されて大高度を有して居ましたから、故大關氏が說かれたやうに氷期には莫大な萬年雪が積り、これに涵養された氷河は谷氷河の態を具へて居たと考へますと、其所

に働く氷雪蝕は非常に激甚なものであつたに相違なく、其の結果が今もなほ見る森嚴な巖峰を築き上げました。秋の晴れた日に諏訪あたりから眺めると、此の高峰が雪を鏤めて晶々として輝き天そゝり立つ様は、未だ見たとの無いアルプの雪の山もかくやと思はれます。前穂高の邊には屏風岩などの岩峰が大鋸歯を躍らして居るのを仰いだり、北穂高邊から槍ヶ嶽につゞく連峰の殆一枚岩（モノリス）とみるばかりな鋼のやうな巖山がヂット立つてゐるのを二ノ俣小舍あたりからみると、アルプの峰を羨まなくても宜いとさへ思ひましたが、猶善く見ると此の崇嶺の頂きにも敗壞の相は歴々と見ることが出來ます。中房邊の獵師の云ふ御幣崖の殘雪は隨分多いけれども、今は到底奥穂高北穂高の巔上から不斷に落下する岩石片を運び切れないので、淡雪のやうなザク（talus, schutthalde）が山膚を飾つて居る。ザクは譬へてみますと芝居の引幕のやうなもので、地貌變遷劇の一幕が終つたことを現すものと見られます。かつて常念岳の附近を歩いた時に道連れになつた一人の獵師が、つく〳〵と穂高の靈峰を眺めて「美しい山は穂高だよ」と嘆息したが、此の美しい彫刻も地下に埋れた昔の巨匠の手になる大理石像の如く、傷き汚れ破壞する一方であります。然しながら此所に重要な相違があります。人の手になつた藝術品は傷けられて惜まれますが、天然の彫刻は毀れて行く時にも美しい所があります。我等は槍ヶ嶽、穂高山から氷雪の鑿の匂が消えて行くのを嘆くと同時に、あの巖山の間に薄雪のやうに懸るザクの美を讃せぬわけには行きません。ラスキン先生は氷雪の彫り上げたモンブランマッシーフの針の山のやうなエギユに讃美の聲を惜まなかつたし畫にも描いたのですが、それと共に此の落石の堆積にも特有の美を認めないでは居ませんでした。そして此の直線的な單調の美感を描いたのはターナー一人であると聞いてゐます。

次に立山、藥師嶽黒嶽を觀察致しませう。此等の山々は其の高さや位置も殆ど似た所にある丈、岩石は花崗岩類、石英粗面岩などと少しつゞ違つては居ても、其間に何所か共通の形貌のあるのを認めま

す。立山には東面に大殘雪があつて其れが奇麗に列んでゐる數箇のカールの底に湛えて居ます。カールとカールとの間に別山、眞砂大汝雄山などの峰頭が波頭のやうに秀でて居ます。此所では雄山大汝の東面が巖山の狀を保存して居て、片麻狀花崗岩が白銀色に輝いてゐますが、あの雄山直下の大雪田の萬年雪でさへも、矢張り風化の供給する岩石片の總てを運び切れないと見えて、雪の解けた後にはザクの夥しく堆積してゐるのを見ます。眞砂別山の附近では風化の威力がずつと加つてサークの壁など云つても決してシエラネヴァダやスコットランド邊の立派なサークを圍むやうな斷崖ではなく、矢張りグレーデッドスロープで單に椀形を保存してゐるに過ぎません。勿論サークの底に氷河に磨かれた岩盤が有つたり、其の間に小湖を湛えてるなど云ふ形象は思ひも寄りません。又サーク間に鋭いアレートがあるわけでも無く、峰は最早や丸味を帶びかかつてゐる。然しながら雄山附近丈は流石に舊時の面影を留めて巉岩が鋭く競ひ立つて居る。かつては西面にある一つのサークとの間に狹いアレートを作つたのだらうと思はせます。然し西の側は最早や平滑なゴーロ山になりかかつて到底東面の偉觀は有りません。

藥師嶽も、其の東面には盛んなサーク列を見、其の中に滿ちた白雪と共に此の山を美しく見せる。立山にしても藥師にしても此のサーク群を取り去ると其の景觀は餘程落莫としたものになりはしないかと思はれます。第一にあのすばらしい雪の居場所が無くなります。たとへ雪を度外視しても第一浮彫の面白味が消え失せるでせう。藥師ヶ嶽にしてもサーク壁の巖の部分は少なくなつて絶頂の直下の大カール面などは全くザクに蔽はれて居る。要するに日本のサークは追々とペンク先生の所謂カールリンクから、通常の壯年山嶽のルントリンクに變形して行く途中を示して居ますから、到底外國の峨々とした巖山や岩壁に圍まれた、出來たてのサークと同一に論ずる事は出來ません。黑岳のカール群も矢張り東面にあつて同じく殘雪が澤山ある。此所でもサークの壁は比較的岩山に富んでゐて壯觀を呈して

居ますし、特に或る二つのサークの間には尖鋭な岩の墻が一寸アレート狀をなして存在して居る所などは他所に見られない美觀であります。

此れ等三山の樣子を通覽しますと、符節を合したやうにカール群は東面に多く、殘雪も從つて東面に多い。勿論雪量が東面に多かつたのがカール群を多からしめた原因に相違ないのでありますが、此の現象は獨此れ等三山ばかりでなく、なほ赤石嶽西河內魚無河內嶽の東面にも同樣ですし、木曾駒ケ岳にしても其のサークは東側ばかりにありまして、普遍的な事實とみられます。日本に於て普遍的なばかりでなく世界を通じても亦同樣だそうでありまして、ペンク敎授の所謂半カール（ハルブ）リンクなるものは到る所にみられます。南北兩面を比較すれば、無論のこと日射の强い南側の雪が餘計に解けるから當然有るべきですが、東西兩面では、西風の爲に吹雪を起して雪を東方の斜面に吹き落して了ふ結果、此の差違が起つたのだそうです。今日飛驒山系の諸嶽は勿論、赤石山系に於ても、斯樣な殘雪量の相違は登山家の齊しく知る所であり、これが何となく殘雪の立派な東側を山の表面と考へたいやうな氣を起させる。獨りサークと殘雪の分布に此の差があるばかりでなく岩の多寡、傾斜の大小までが東西兩面にクッキリと分れて居るのが極めて普通であります。能く人の知る所では白馬嶽の頂が其の著しい例かと思ふ。信州側の目の眩むやうな絶壁であるのに引きかへて、越中側は古生層の岩片が拍子木をならべたやうに一面に地に敷く滑かな斜面でツクモグサだのウルップサウだのゝ花が平和さうに咲いてゐる。越中の方面からみた白馬嶽には到底東麓からみたやうな雄偉な感じはありません。杓子岳にせよ鑓ケ嶽にせよ信州北城村近くから仰ぐ時は物珍いばかりの景色で、前者の東方頂上部には削つたやうな岩石の襞が急斜してゐるけれど、西面は樂々と歩行の出來る砂礫の斜面に過ぎないし、後者の前面も蓮の蕾のやうな形の岩山を天空にささげて居ますが、越中側は白髪山と云ふ越中獵師の稱呼に背かぬ小紋岩の眞白な禿げ山ではあるが、矢張り岩片の衣に蔽はれたグレーデッドスロープに過ぎな

いのであります。斯の如き兩面の不同はなほ立山にも雄山に於てみられ、黒嶽藥師嶽共に西側は主として滑かな斜面で尾根の所で急に東面の急崖に臨んでゐます。大天井嶽と常念嶽との間の横尾通（ヨコオドリ）の邊又燕嶽との間の屏風嶽と云はれて居る邊にも、其東方は岩壁では無いにしても急傾斜で殘雪が多く、丁度山の頂きは安曇の平野を覗きこむでゐるやうに見えます。其他この傾向はなほ諸所に見られることゝ思ひますが、此れは何と説明したら宜いでせうか。

全體尾根の一方が他の面よりも急傾斜を有して居るとか、山骨を現してゐるとか云ふとは次の様な場合に起ります。第一には一方の斜面の谷々が他の斜面の谷よりも急斜してゐる時、第二には斷層による山嶽で斷層壁の方面は著しき急傾斜を示すのが常であります。後に詳しく申度いと思つて居ますが飛驒山系は大體一のブロックマウンテインですから第二の原因も或は間接に働て居ませうし、第一の原因は黒部川方面の劍ヶ岳の谷々と早月川方面の谷々との間などに起るべきで居て其實反つて其影響は有りません。高瀬川方面の常念山脈の谷と中房方面の谷々との間には此關係があるかも知れませんが、大部分は第三の原因即前記の積雪量の差違と氷雪蝕との支配で此れを解釋出來るかと思ひます。

最後に孤立して存在するサークが方々にあります。有名なのは野口五郎嶽の南に釜狀の大きなのが一つ、此れは珍らしく西北に面して居て、矢張り其の壁は滑かにはなつて居ますが底に池がある、恐く堆石に堰かれたのではないかと思はれます。木曾駒ヶ岳の農ヶ池なども同じ種類のものと聞いてゐます。駒ヶ岳の寶劍岳は一つのサークの壁上にある巖峰で、其のサークは赤穗の邊の天龍の谷から仰ぎますと大きな牡丹の花でもみるやうな形に、岩壁に圍まれ立派に見える。サークは一度見たならば忘れこのない特異の地貌で、而も非常な遠距離からよく認識することが出來るそうです。仙丈嶽のは秩父の山から見られたと冠氏の記事が本誌に見えましたが、デーヴィス先生は天山山系中に於て數十里の遠方から屢この地貌を望み得たことを特筆して居ます。或る一つの峰の一方にサークが出來て、元と

圓頂を示して居た山體を、一方より破壞して行く時に出來た例として、黑部五郎嶽即中俣嶽の形狀は正に此の場合に相當するものと考へられます。

あの圓頂の名の如きゴーロ山には、東北に向つて開いてゐる大きなサークが山體深く喰ひ込んで、其の壁は岩山にもなつてゐるし殘雪も多く壯絶な景色を作つてゐます。針の木嶽の尖峰も矢張り略同樣な歷史を有して居るものと考へられます。東に向いて出來た「まやくぼ」のサークは元あつた、高かつた山の胴中を掘鑿して、今みる所まで頂きを退却させて行つたやうに思はれます。此所でもサーク壁は大半岩片に埋まつて、今見る所の椀形の窪も最初出來た當時のサークの凹みに比すれば著しく淺く穩かな形に變じてしまつて居るに違ない。

一番後に氷蝕の地形として申上げるのは、斷面がU字形をしてゐると云はれる氷河洞(と假に譯します)即英語で云へば glacial trough 獨逸語で云ふ gletscherrrog であります。サークを作るやうな小氷河も其の氷雪の量を增して所謂氷河舌 (gletscherzunge) の部分が發達して來ると、谷氷河に移つて行き、サークの形も細長くなつて來る。氷河洞の濫觴ともみるべきはかゝるものであります。氷河の氷は水流と違つて極めて遲鈍な流體である代りには、比較にならぬ程の容積を以て谷底を流れ下るのですから、水流が輕快に流走する時、惰性で左右に蛇行して屈曲を大きくするやうなことなく、若し屈曲して居た谷底を氷河の遲々とした而も重い流れが通るやうになると、左右から突出して居る山脚は氷蝕作用の爲めに間も無く截斷され、氷河は直線狀の流路を取る樣になる。斯樣な氷河が氣候溫暖になつた爲めに解けて了つたと致しますと、後には底の濶い岩石の谷が殘り、侵蝕の差違から出來た凹所には美しい湖水が出來る、瑞西の湖の主なるものや、蘇格蘭などの小湖は此の種類のものと聞きます。斯くして生じた氷河洞の兩側は數百米も高く壁立した斷崖で一直線に谷の奥までガランと見通せるやうな特種の形をして居る。アルプスあたりの地形圖を見ると至る所に此の地貌を見ることが出來

ます。次に氷河の支流と本流との表面は河の場合と同じく、プレーフェアの原理に從つて同じ水準で出合つたとしても、其の底は本流に深く支流に淺きことは勿論でありまして、其の差は數百米に及ぶことも有りますから、一度氷が解けて了ふと、支流の底は本流の氷河洞の緣に高く開口することになります。氷蝕谷が氷河洞に臨むても同樣で、此れ等の懸谷（Hanging valley）は氷蝕を受けた地方に於ける普通の地貌であります。此れを風景の上からみれば、瑞西のラウテルブルンネンの谷に歐洲第一の瀑布ときくシュタウブバッハの如く、又米國ヨセミテの瀑布の如く、銀河九天より落つる壯觀を呈しますし、實利の上からみれば水力電氣を利用して工業を營むに都合よく、瑞西の人々が誇稱する白石炭を供給します。斯の如き現象はアルプスは勿論ヒマラア、天山、アルタイ、ロッキー、シエラネヴアダ等凡そ氷期に於ける氷河の發達の著しかつた地方に見る所のものですが、惜しいことには日本では餘り見ることが出來ず、たゞ故大關氏の研究された穗高岳の二三の谷即岳川谷横尾谷等が氷河洞の形狀を具へ、其他槍ヶ岳山下の槍澤黑岳東麓の東澤、立山では別山の東の眞砂澤又木曾駒ヶ岳の黑川上流などの一部に此の如き地貌が認められると云ふことであります。

山嶽の彫刻　此から話題を更へまして森林、草野に蔽はれてゐる山々の形を窺つて見たいと思ひます。日本の本州から四國九州で云ふならば、二千米から二千四五百米以下の一番多く存在する、陸軍で云ふ中連山地若くは岡阜地なるものであります。此れ等の山岳を構成してゐる岩石は、或は水成岩の累層が盛んな褶曲作用を受けたのも有りませうし、或は地下深所に結晶凝固した花崗岩閃綠岩のやうな火成岩のことも有る、或は秩父古生層の粘板岩、硬砂岩、ラヂオラリア板岩、硅岩石灰岩のやうな成層岩の急斜した累層で成り立つかと思へば、第三紀層の頁岩、凝灰岩砂岩等の軟弱な地層が緩傾斜してゐることもあり、或は片麻岩のやうな舊い變性岩の塊であり、或は噴出岩の層、火山擲出物の重りあつた舊火山體であるかも知れない。又此等の諸岩層は火成岩の岩脈岩床などを挾入してゐるこ

ともありませうし、あらゆる簡單なものから複雜な形を考へることが出來ますが、此等の諸種の組織（structure）は勿論地貌を左右すること少くありませんが、猶ほ營力（process）及時代（stage）の二つを以て地貌の要素と致します。何んな高山大嶽でも諸種の營力に攻撃されると、遂には各時代に特有な相を現じつゝ、次第に遷流して行つて遂には究極の形になつて了ふ。然しこの形が再び隆起して前と同じやうな變化を繰り返す。此の變化を地理の輪廻と申します。營力の如何によつて河蝕輪廻、氷蝕、乾燥、海蝕等の各種が有りますが、此所で必要なのは最初のもので、究極の形は準平原―即ち殆ど平原（Peneplain）と申す起伏の小さい穩な波のやうな、海面から高くない單調無味な地貌であります。如何なる雲表に聳え氷雪を戴いて居たやうな大山嶽も、十分な時間さへ與へられるならば此の最後の低原に墮し終るのを免れないことは、近世地理學者の確信する所であり、早くはティンダル先生がアルプス紀行の中にユングフラウの秀峰を仰いだ時の感想に托して此の事實を流麗な筆つきで書いてゐます。

地形學者の云ふ幼年の山嶽と云ふのは、斯様な準平原面が地盤の隆起で或る高さまで持ち來され、其所に働く侵蝕作用が未だ元の準平原面の小部分にしか働かない狀態であります。順序から云ひますと一番最初の形は海の中から浮びでた新造の陸地表面で無くてはならないのですが、現在の諸山嶽は大抵其後幾回もの輪廻を經て來て、一度ならず準平原の狀態に在つたものと認められますので、準平原を以て振り出しと致すのが便利であります。準平原は勿論幾何學的の平面では無く、其中の堅い岩石は諸所に丘陵として突起して居ます。之を殘丘とも譯すモナドノックと云ひます。斯の如き幼年の山嶽を彫刻して行く河は矢張り幼年の態を具へて居て、瀑布、奔湍に富んで侵蝕力は頗る大きく、前途には未だ爲すべき事が甚だ多いと云ひたげに働きます。其れが侵蝕の進むにつれて準平原面の平坦な地表は最早や山頂の所々に斷片として殘つて居るばかり、其の平な頂と平らな山頂との間は、狹い低

い尾根で連絡されて居る。此の狀態は早壯年の時代であります。

墺國の大山系カルパーテンが斯う云ふ時代の特徴を著しく發揮してゐて、準平原面は高い所に高臺として、雲の平や五色ヶ原のやうな高原として横はつて居る。雲霧の中を彷徨してゐた登山者は、霧が晴れてみると、何時か自分が脚下數千尺の急谷に臨む高臺の端に立つて居たことに驚くことがあると、ド、マルトンヌ教授が書いて居る。更に高大な山嶽でゐながら其の頂にこんな平があり、從つて弦のやうに眞直な輪廓を示してゐる、勿論所々鋸齒狀に缺けて居ますが、丁度屏風のやうに急に聳えてゐる山は、天山山系中の山脈に多く見る所だと、カーネギーの土耳其丹探險隊中にあつたデーヴィス先生が書いて居ります。それは勿論準平原面の殘りですから、此の平面の下の地層は決して水平な水成岩層では無く、或は錯綜した褶曲或は結晶質の火成岩で出來て居ます。即天山山系の大部分は曾て一度準平原に削り落されて平坦になつたものが、再びあの高さまで昂起して大山系となつて居る。最高點ハンテングリの達し難い石灰岩の孤峰、其他長二十里もある大氷河を流す群峰は當時のモナドノックとして、今は屋上更に屋を架したやうに天を摩して居るものと認められて居る。

扨て我國にはかゝる幼年乃至早壯年時の山嶽は何所にあるでせうか。最も典型的に此の地貌を表して居るのは北上山系で有ると云はれる。地質調査所の山根技師の明快な記述に依ると、此山系の一部は意外の高所に漠々とした高原が横つてゐて、其れが古生層地の準平原であると云ふ。其上この準平原上に往古のモナドノックが、閃綠岩、硅岩等諸種の堅硬な岩石で構成されて居る。早池峰は橄欖岩で出來てゐる一のモナドノックが高く聳えて居るものださうで有ります。其から紀伊山系の中には大臺ヶ原山などが、名の如く古生層山嶽上の準平原の遺物だと脇水敎授が云はれました。高野山も其の一つだと云ふとです。赤石山系の東北端、諏訪湖から富士見を經て韮崎に至る大斷層壁に臨んで、釜無山の附近の山の頂が奇妙に扁平になつて居て早壯年時の山嶽を思はせますし、木曾山脈の南には恵那

山に近き神坂峠、大昔の木曾の御坂のすぐ北に富士見臺など云ふ頭の濶く平な山がありますが、此れも小藤博士の云はれる美濃飛騨高原の準平原の殘物かも知れません。兎に角山嶽の發達の途中には此んな頂の平な形の山があることは次に申すやうな壯年の山嶽ばかり見なれた我々には珍らしく思はれました。

侵蝕の彫刻が更に進むと最早や總ての峰は尖り尾根は狹い馬の脊の形になり、谷々は枝のやうに分れて全山嶽の間を縫ひ、起伏は最大に達して、峰は高く聳え、谷は深く刻み、削剝作用は最大速度に行はれるやうになると、山の輪廓は所謂山形なる波狀をなして、連山波濤の如くなど云ふ形容が當つて來ます。流水の彫刻は此所に於て完成したものと見ることが出來る。此れが私共の頭に一番よく浸み込んで居る、我々の生活に一番密接な關係のある山の大部分であつて、術語を用ゐるならば壯年的に解析された山嶽（maturely dissected mountains）なるものは此であります。通常起伏があまり大きくない限りは、其の地方地方に特有な森林は此の彫刻を彩色したやうに、熱帶の樹林、或は暖帶的な椎櫧などの常綠闊葉樹林或はブナ、ナラなどの落葉闊葉樹林又は針葉樹林などが鬱蒼として山谷に茂ります。常綠闊葉樹林は九州の邊鄙な所にでも行かなければ一般に滅亡して草山が之に取つて代つて居るのは人間の生活が濫伐を敢てせしめた爲だと林學者は教へます。兎に角秩父山系、丹澤、御坂、紀伊山系又四國山系、越後山系等、主なる群山は皆な此の形式の山嶽ですし、飛騨、赤石等の高山でも上部は起伏が著しく大きい丈て裾の方は漸次に中連山地になつて壯年山嶽の特色を發揮して居ます。岩石の支配は、今や山腹が岩屑に殆ど完全に被覆され土壤さへも生じて來ると、極めて微々たるものになつて、山相をみて岩石を察することなどは思ひも寄らないことになります。然しながら猶ほ組織の如何は何にか隱然たる力を有してゐるに相違なく、谷の分布の粗密即ち山の襞の細大などにも關係がありませう。此の襞の模樣は Texture, Gliederung と申しますが、山の起伏の大小從つて傾斜

の緩急に關します。高山を見渡しますと、其の大小の山脚（spurs）は急峻に直線的に谷底を目がけて引き落されて居るし、細かい谷や澤はあまり眼につかず、すべてが大規模に雄大に見える、つまり襞が粗大なやうに見えますが、起伏が低く傾斜が緩になるに從つて、山脚はうね〳〵と迂餘曲折し、谷や澤が細かく其間を刻んで居る。丁度急な川が奔放な流れ方をするのに、緩流は蛇行するのに似て居ます。丁度尚大起伏の山嶽の彫刻は名匠の様な放膽な鑿のあとを見るやうなものだし、低い山谷の細かい彫刻は小器用に刻んだ細工物のやうな感じがします。壯年の山嶽の間を流れる谷は同じく壯年の狀態にある。瀧もなひ早瀬もない、所々に河原のあるやうな graded river かと云ふに其うばかりも行きません。中位の起伏の山嶽では、殊に大きな川は其うなつて居るでせうが、高峻な壯年山嶽間の河では未だ幼年の態を存して居る所が少なくありません。殊に枝流や谷の上流には「タキ」になつて居て通れないなど云ふ所が少くない。此の際には岩石の影響も餘程ありますので一つの地方の谷でも一様には行きません。同じ花崗岩の常念山脈の中でも烏川の谷の様に良く grade された安々と大石の河原を傳つて昇降出來る谷も有るかと思へば、葛の湯の傍の瀧の澤のやうに飛瀑の連續のやうなものも有ります。大井川などは其の中流からはポッポッ河原が谷底に見られる位の餘裕を示して、桃島、槌島など、島の名を附せられて居るし、旧代の村から下流は蛇行すること甚しく、やゝ悠々とした様子を示して居ますが、之に反して黒部の谷はあの大きな河であるに關らず未だ幼年の姿を存して激しい侵蝕の舞臺になつて居ます。猿飛の峽流なども其の一つであります。猿飛と云へば、耶馬溪の鹿飛にしろ、槍ヶ嶽の蒲田にむく右股でしたか左股だかの熊飛にしても皆幼年の狀態を思はせる面白い名稱だと思はれる。黒部の枝谷である劔澤、内藏助澤又棒小屋澤にしても東谷と地圖に誌された澤にしても、其合流點に瀑を造つて不協和結合（Discordant junction）を爲して居るのにも驚かれます。云ふまでもなく河流の幼年時代の特徴の一つとして、本流の侵融に支流の其れが歩調を合せて行くことが出來ない結果で

有ります。此れなどは日本で外には類例の無い地貌でありますが、なほ黒部の本流自身さへ、あの大流が立山の直下で一箇所瀑布をなしてゐることが地形圖に示されて居ますが、未だ何等の記事も寫眞も不幸にして見る事が出來ない。信州獵師の所謂廊下なる黒部別山下の大岩壁下の黒部川は如何に壯觀を極めて居るか想像致されます。

壯年の絶頂を通り越すと、山の起伏は減ずる一方となり、峰は岩屑の衣が厚くなつて丸味を帶び、全體の傾斜は緩となり、谷は打ち開けて、概して溫和な形の晩壯年の山嶽所謂 subdued mountains と化します。日本にも此の種の山が有るのでせうが、適例を擧げ兼ねます。布團着て寢たる姿など云はれやうとする形であつて、襞は粗大となつて尾根は鈍くなる。四國あたりの何々丸などと名づけられる山何々森（盛の意？）など云はれる山は此の種のものでしやうか御敎示を願ひたく思ひます。米國南カロリナの Blue Ridge などは此の好例とせられ、何々 dome の名を冠する峰が多いと申します。

以上略記したやうな、サブデューードフォームを有する低い山は、軟弱な岩石の、最初から餘り高位置まで隆起しなかつた第三紀層の地方などには一番多くあるを期待することが出來ます。東海道の戸塚程ヶ谷の邊などから大磯國府津邊の丘陵地に此の形が見られます。岡の間の緩かな谷底は「ヤツ」など云はれる濕地で昔は蘆荻が生ひ茂つたのでせうが、今は多く水田になつて小さな村々が散在して居ます。遠州の掛川の南の小笠郡あたりの第三紀層地も大體似た地形です。

この晩壯年時から先きは、起伏は追々小さくなるばかり、遂に地貌は老年期に入つて、總ての削剝作用が不活潑になり、準平原に近づいて來る。其れなら準平原は何處にあると云はれますと、少し困ることには大抵の準平原は再び隆起して、第二の輪廻に入つて幼年の地貌になつて居るので、原の低い位置にあるものは大變少いと云ふことです。準平原の言葉や思想を學術界に知らせたデーヴィス先生でさへ、眞物の準平原は餘程後年に西部シベリアのセミパラティンスク附近の曠野に發見して、多

年の空想を實現したやうに感じたなどと書いて居ます。此の準平原なる平坦な一見無趣味な荒原も、其の地質構造から曾て巍々として聳えて居た、大山嶽の末路であると考へられると、無限の興味を感じないわけには居りません。

地壘山嶽　今迄長々と述べ立てた山嶽の形貌は、皆外部の營力の彫刻に依るものでした。ティンダル先生がユングフラウを眺めて考へたやうに此れは皆な太陽の勢力がなした仕事に外ならない。岩石の破壞も、氷河の琢磨も、流水の侵蝕も。然し此れからの彫刻の材料になる所のものは、地球自身の内部に潜む力が様々な形に働いて作る。火山は其の一つですが、此は後に特別に申したう御座います。地表の廣域にわたる隆起即 Warping なるものは、多くの山嶽の原相を作るものと信じられます、アルプスやヒマラアなどの長大な褶曲山嶽では、花崗岩であらうが石灰岩であらうが、有ゆる堅岩を、まるで飴かなにかのやうに、揉み潰し、引き延ばして、恐しい程の烈しい褶曲を作つてゐる所謂造山作用は、主に地下の深所高温强壓の所で遂行されたに相違なく、其れが直接に現在のアルプやヒマラアの原相を作つたとは信じられないのであります。此より申す所の作用は、ワーピーングに依る隆起と共に、疑もなく多くの山嶽の原相を作つた作用で有つて、一口に云へば地殻が幾つにも分裂した塊片（ブロック）となつて、丁度湖や海の氷が割れて上になつたり下になつたりするやうに、又街路の敷き石が破損して來て飛び出たり引つ込んだりするやうになる、其の飛び出した地殻の一片が地壘山嶽となる道理であります。この塊片と塊片とを界するものは斷層であつて、一方の地は他に對して或は滑り上る、或はずり下る、或は双方が反對の方向に各上下へと運動するかも知れない。此の如き斷層の小さなのは濃美地震を起し、桑港地震を起し、又臺灣の嘉義地震の原因となつた。勿論此等の場合、依て生じた斷層崖（Fault scarp）は僅々數米に過ぎない。ですから數百米又は其以上の斷層崖は一朝一夕に生じたものではない。若し此れが一度に行はれたりしたらば人類は滅亡して仕舞ふかも知れません。

二つの略平行した斷層間の低地を地溝（グラーベン）（Graben）と云ひ、高く飛び出した一種の地壘山嶽はホルスト（Horst）と云ひます。地溝に水が溜れば湖水になる。バイカル湖、死海などは有名な例だし、ラインの中流は大きな地溝の底を流れると云ひます。日本で云へば信州諏訪湖は明に地溝の中に湛へられた湖水だと信じます。能登の邑知（オチ）潟などは日本では類の無い立派な地溝で七尾線は其の中の低地を通つてゐる、潟は元一時海峽であつたのが埋まつて行つた殘物であります。かつて獨逸の軍艦が月夜に此所を海峽と間違へて座礁したと云ふ、呑氣な軍艦も有つたものですが、其位著しい地貌を呈してゐます。一般には一つの塊片は傾いて所謂 Tilted block をなし、一方だけに急な斷層面を示して居る。先きに外國の例を擧げますと、前に申した天山山系は無數の塊片に分離して隆起した立派な地壘山嶽であると申します。合衆國の Wahoatch Mountains など云ふ Great Basin 地方の山嶽には、多くの地壘山嶽があつてデーヴィス先生の研究は主として此所でなされました。勿論大きな斷層壁の急斜面は長い間に繰り返された多くの斷層崖の和として、徐々と高く生長して行つたものでありますから、其間には侵蝕作用が働いて急峻な山や澤を形成しないわけには行かない。一番新らく生じた斷層崖だけが、山脚の先端に略三角形の小平面を作つて一直線に列んでゐることがあります。斷層壁下には盛んな扇狀地（扇（Fan））が發達して居る。斷層壁と反對の山腹はずつと緩傾斜を呈して居ます。此の如き狀況も侵蝕が進むに從つて、漸次不明瞭にはなつて來ます。米國の大山系シェラネヴァダは斯の如く解析された地壘山嶽の由であります。飛驒赤石の兩山系の成立は全くシェラネヴァダに比すべきもので、一方は主として火成岩で構成され一方は整然たる水成岩層で構造こそ違ひますが、同じく其の東方は本州を中央で横斷した大斷層線、矢部博士の所謂絲魚川靜岡地構線に臨むで、高大な斷層壁をなして居るが、已に彫刻が著しく進んでゐるから其特徴は顯著では無い。然し諏訪湖の地溝に臨む杖突峠眞志野峠の附近には比較的新期の斷層の形跡が十分で、高遠方面に注ぐ谷々の底は峠の所まで其まゝ開けて

緩くつづき其所でプツリと切れてゐて、諏訪方面の急斜面に臨んでゐる。三角形の末端面（Terminal facets）さへ數箇を指摘することが出來ます。飛驒山系の東面が斷層壁の彫刻されたものであるとは非常に大きく見ると氣が付きますが、細部の地貌に何の位現れて居るか私はまだよく知りません。然し高瀬川、梓川、其他烏川でも中房川でも皆一樣に安曇の平に扇を堆積させてゐること、安曇の平野が元大湖であつたと云ふ傳說、青木湖等の存在は何等かの事實を暗示して居ます。

日本には地壘山嶽の數が思の外に多い、戸隱山の東面は疑もなく立派な斷層壁で、此の急斜面に急速に働く侵蝕がたださへ岩石の露れ易い火山集塊岩を攻擊して突兀とした奇峰を作つたのでせう。木曾川の中流、中津町の西方一帶中央線に平行して北面する一連の嶂壁は屏風山の名を以て呼ばれ、此又一の著しい地壘山嶽らしい。久留米市の南方にも水縄屏風山と稱せられる斷層地形が見られる。畿內の地方は小川博士も言はれる通り、鈴鹿、葛城、養老、比良、六甲等の諸山脈が縱橫に交錯して起つた斷層の結果として崛起して居ます。養老山脈の緣邊は濃美平野に向つて急聳し、最新の斷層崖の樣子などが大垣あたりの汽車の窓からも手に取るやうに見られます。六甲山は神戸市に臨んで二三の斷層崖を以て、階段狀斷層（ステップフォルト）をなして、落ち込んでゐるらしく思はれます。但し斷層崖の狀況は著しく破壞されて居ます。有馬、寶塚などの溫泉鑛泉が斷層の裂罅から噴き出して居ることは、比企敎授の注意された所であります。近江の琵琶湖は大體に於て比良山脈の東邊の大斷層壁によつて堰き留められた爲に生じたものと認められます。此れを小規模に行つたやうなのが丹波龜岡町の東北方に續く斷層壁で、曾ては湖水を湛へたと思はれる龜岡の平野から出る大堰川は、屈曲した流路を取つて、塊片を開鑿する幼年の谷として保津川の奇勝を作つて居ます。

云ひ落したのは諏訪の地溝で、赤石山系の東北部をプツリと斷つた斷層壁のことは申しましたが、東の壁は霧が峰の裾野を切り落して居ます、但斷層壁は大變に侵蝕されて居て西方のものよりは古い顏付

きをして居ます。

火山の形貌　今迄述べ來つた所で大略でありますが、日本に於て普通見られる火山以外のものを通覽しました、次に此等に劣らず重要な火山の地貌に一瞥を與へたいと思ひます。我國に於て昔の人が何時の間にか決めた名山なるものの多くが、火山である事は不思議な位ですが、此には樣々な原因も有りませうが、第一に火山は平野の上にも、海濱の近くにも、又群山の中にあれば一段高く孤聳して居て、街道筋なり都會などから見て、特に秀麗な感じを起させた事、之に反して我々が今珍重して措かない中央の大山系などは、昔時の文明からは餘りに遠ざかり過ぎて居るし、群雄割據の狀をなして特に眼立ない事も一つの原因でしたらう。又普通火山にみる頂近くの急な裾野を廣々と繞らせた八面玲瓏の單純な形態美が、昔の人の美感を直ぐに誘發したのに反して、高山の景象は餘りに複雜で、且つ恐ろしく、火山の崇高端嚴にして柔和な形狀ほどの美意識を起させなかつたのも一因だつたかも知れません。妙な譬ですが不協和と昔は思はれた調音が今用ゐられる樣になつたり、古代の人が反對色などの配合を愛でたりしたのに似通つて居るやうなものとも云へませう。然し今の時代にも矢張り富士の高嶺は普通りに壯嚴に仰がれます。富士見邊りからみた此の靈峰の天に迫つて居る樣は「鍾得秀靈氣、築成東海灣、天工盡于此、不復出名山」など云ふ句を何物よりも切實に思ひ出させる。

我々が火山と云ふ名の下に直に思ひ浮ぶのは富士形の山であります。薩摩富士の開聞岳蝦夷富士のマクカリヌプリなど、何々富士の名を得た山の多くは、富士山に於て絶美の域に達して居るやうに、頂上部の削つたやうに急峻な、その山腹がずつと下まで殆ど直線的に引き落されると、やがて優美な曲線を作つて、次第に緩く裾野の原を作つて、安定な感じを與へる。其頂には比較的に小さい火口があつて、淺間や霧島のやうに煙を揚げて居る活火山もあるし、霧島の大浪池などのやうに明淨な火口湖を湛へてゐるのもあります。霧島火山群の火口は序に申しますと、韓國嶽にせよ新燃にせよ、一般に

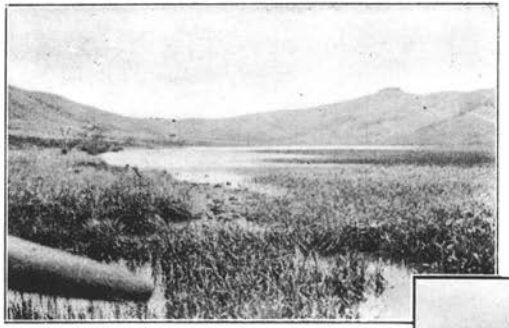
此の式の火山としては大いやうであります。火口壁に赭色や黒色の氣味の惡い縞を作つて露はれてゐる累層を見ても、此の種の火山が液狀に融けた鎔岩を流し、又火山礫、灰、彈などの擲出物を飛して幾千萬年の間に積み上げられたものだと云ふことが直に分る。此の故に成層火山と前には云ひました。シュナイダー氏の分類ではコニーデの名を附して居ます。以上は極めて簡單なコニーデ火山體の特徴を擧げたのですが、富士山でさへ斯んな單調な構造はして居ません、もつと複雜な構造から成つてゐます。即多數の側火山が中腹以下に噴き出して、大室山其他の小圓錐が近よつてみると木立の中に小凹凸を作つてゐる。其等は略ぼ四方に輻射狀の裂罅線の上に噴き出たことは、シチリアの大エトナを始め、諸所のコニーデ火山體に見る所ですが、なほ其上富士山では富士火山帶の方向即北微西から南微東の方に小側火山が密集して居る事や、噴出物も此の兩方面に多くして富士山の裾野は嚴密に圓錐狀では無く、少し楕圓狀にいびつになつてゐること、寶永の側火口は矢張り此の線の方向の裂罅に沿ふ、三箇の火口の珠數狀に繋がつたものなることなどを知る事が出來ます。一番完全なコニーデと思はれる開聞岳も其の上部は其實舊火口を殆んど埋め盡して新に出來た鎔岩體であの通りの急峻な圓錐を示すのだと云ひますし、まして其他の火山と來たら手の着けやうのない紛糾した構造を示してゐるのもあります。淺間山などは西から東にと噴出の中心がだん〳〵移つて行つて二つの舊火口壁は牙山などの三日月形な峭壁となつて殘つて居る。此れなどは未だ簡單な方で、櫻島のやうに三つもの火山體が、双子のやうに癒合して縱に見れば富士形のコニーデのやうですし、横の鹿兒島から見るとやゝ屏風のやうに幅廣くなつて居る。御嶽などの大火山になりますとよく寫眞にある通り一見山脈のやうに見えるのは矢張りこの横向の姿で、勿論頂上部の構造は遙に混み入つて居ますが、北方槍ケ嶽の方からみれば、少しく富士形になつて見える。乘鞍嶽の大火山體などは幾つもの噴出點がゴタ〳〵に寄り合つて更に不規則になつて了つて居ます。

コニーデ火山の上部が爆發で噴き飛されるか、重みに堪へずメリ込んで陷入して仕舞ふかすると、途方もなく大きなカルデラ（Caldera）と云ふ凹みになる。カルデラの湖水が溜つたのが風光明媚な十和田田澤の諸湖、北海道では支笏湖とか洞爺湖とか云ふものです。最近に知れた日本では比類の無い立派なカルデラ湖は、千島列島中温禰古丹の幽仙湖と名づけられた湖水で、此所を測量した人達の話を聞きましても地形圖で見ましても、實に典型的なもので、四周は急峻なカルデラ壁が殆ど眞圓形に湖面を圍繞して居て、有名な北米オレゴン州の Crater Lake に比しても遜色が無いかと思はれます。後者は米人の誇示する所で、Mt. Mazama と假に名づけた舊火山體は其谷々が氷期の氷河に削磨された狀まで歷然と留めたまゝ、其の上部がカルデラ湖になつて了つて、幽邃な風光を現じて居るのだそうです。温禰古丹と並んで南北の双璧と見られるのは、朝鮮白頭山の龍王潭一名天池であります。此れ等は十和田湖や田澤湖の様に其の幽寂な景色が人を畏怖せしめ、動もすれば神怪な傳說神話を産み出します。然し龍王潭のやうに廣い湖面が長く其まゝになつてゐる事は寧ろ稀で、オレゴンのクレーターレークでも後から噴出した火山が小さな島になつて居るし、洞爺湖にも中島があるし、幽仙湖に至つては高峻な火山錐が遙にカルデラ壁の上に聳へてゐる。始めて此所を測量した時には遠くから見て一つの火山だと思つて登つて見ると、意外にも環狀の湖水を足下に發見して驚いたと云ふ事です。遂に湖水の一方が決潰して水が乾固して了へば、現在の阿蘇の大火山の火口原にみるやうな地貌になる。阿蘇箱根を始めとして所謂二重火山なるものは餘りに人口に膾炙して居るから此所には申しますまい。其他磐梯山の破裂のやうに山躰の一部を破壞して麓に泥土岩塊を散亂させ、河水を堰き止めて湖水を造つたり、火山體の横腹に硫氣の瓦斯を噴き出す硫氣孔（Solfatara）を作つて盛に岩石を分解して粘土とする爲に、其處が藥研のやうな形に深く崩壞侵蝕されて行く狀は御嶽の地獄谷、八ヶ嶽北箕冠岳、箱根で云へば大地獄や早雲地獄のやうに、大きく口を開いて赭色、灰白色に彩られ、一種凄慘な觀を呈

します。

斯様な火山形は勿論未來永劫に不變根の名の如く不變なものでは無く、地球の眼からみたならば瞬間の命しか保たない。噴火が止んで增築の作用が終りになると、此れ等の天壇にも遠慮會釋なく削剝の手が下されます。其の順序は一般山嶽の彫刻と大同小異で、多くの場合急峻な頂上部が先づ破壞され侵蝕され、裾野には幼年の谷が輻射狀に走る。富士や淺間や霧島などの火山の裾には雨裂と陸軍でよぶ極めて幼稚な溝があつて、雨水を流す涸れ川ですが、岩木山となると幼年の谷が火山錐を切り刻んで、瀧などが所々鎔岩層の堅い所に出來る。男體山の四方に眞直に放射する「雁ぎ」の形式も此のコニーデ火山體の彫刻の序幕であります。日光の赤薙女貌火山になると、其の上部は大半彫刻されて、あの通り山骨を露すほどの急谷を造り、飛瀑を掛けて居ますが、裾野の部分は未だ保存されて居ます。八ヶ嶽にしても、裾野はあんなに見事に展開して、一帶の高原をなして居ますが、頂上の部分はさん〳〵に削剝を受けて赤嶽などの赭巖が嶮岨な地貌を作つて居ます。遂に輻射谷も次第に發達し、支流の數も增して來ると、通常の山嶽の場合と同樣に總ての原相であるべき火山表面は消滅して、細く派出する尾根の系統、密に入りこむ谷の系統が壯年的に彫刻されたコニーデ火山體を作つて、元の火口は何處にあつたのやら、側火山は幾つあつたのやら、地質學的岩石の分布を調べても仲々判らなくなる。然し斯樣な解析された火山でも、大きな谷々は大體四方八方に向つてゐるし、元の最高點の附近は矢張り終りまで高いのであります。箱根の外輪山、愛鷹山、少し早壯年で原表面が上の方に殘つては居ますが、天城の伴次郎嶽や、信州四阿山などは此の時代にある舊火山體に外ならず、うつかり登りますと其の火山だつたかさへ氣が付かない位に通常の壯年山嶽に似て居る。

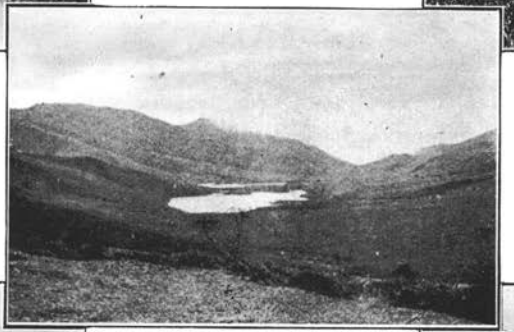
もつと彫刻が進んだならば晩壯年的に起伏が少になり、谷は緩く濶くなり、尾根は鈍く丸くなつて溫和な形になつて來るでありませう。フランスのカンタル火山などはトンネルを作つて其の中央を汽



1

2

3



4

5

1. 野反池東北岸より辨天山遠望。 2. ネンバ坂より南望。 3. 辨天山の鞍部より北に野反池を望む。 4. 野反池南端より北望。
5. :同上。(日高信六郎氏撮影)

車が通れる程低く削剝されて了つて居ると云ふ。日本で云ふならば九州國東半島を作つてゐる二子火山（文珠嶽）が其の好例で、元々隨分偉大な火山體だつたと想像されますが、今は見る影もなく低くなつて了ひ、其の放射狀の谷を溯つて大きな道が易々と中央部の峠を越えて反對側の谷に行つて居る。序に申しますが帝國圖を見ても地形圖を見ても直ぐ目に着くのは、此の晩壯年的に切解された火山體が瀨戸內一帶の沈降に伴つて沈下した爲に、海水が多くの谷の中に侵入して、溺れ谷をなし入江を作つて居ますから、海岸が花瓣の形になつて居ることであります。晩壯年時には火山の基底をなしてゐる火山集塊岩が削剝を受けるやうになりますので、妙義式の奇峰が其所此所に散在するやうになる。愛鷹山などもやがて此くの如き突兀とした地貌を現す時が今に來るのだらうと思はれます。

更に削剝の程度が進むと、鎔岩層擲出物層すべての火山噴出物が皆な取り去られて、單に放射狀に基盤の岩石を貫く岩脈だけが塀のやうに山脊をなすかも知れず、又火山の管を滿してゐた鎔岩の部分が周圍の岩石より堅くて、突起して岩頸（Volcanic necks）として突起して居るやうな場合もありませう。但これは基盤の地が準平原狀に削剝された場合の話であります。晩壯年の形などは乘鞍岳のやうに、元々高い山脈の上に出來た火山體では出來やう筈は有りません。何故ならば壯年的に切開されると間も無く、火山體は全部削剝されて了つて、基盤の古生層が現れて引きつゞき侵蝕を受けるやうになつて來ますから。之は既に乘鞍の麓に神津博士の調査の結果をみても分る通り、着々行はれてゐる事實です。

今迄見て來た火山の形態は、日本ばかりでなく世界を通じても一番多く存在してゐる所のものであつて、一番よく眼に着くものですが此れは單に火山の種類の中の只一種に過ぎない。日本などで此に次いで夥しく諸所にあるのが、トロイデ火山體であります。此の種類のものでは鎔岩が硅酸に富んで居て色は淡くて白ぼく、融けてもあまり流動性が大きくありません。從つて鎔岩流は遠くに流出せず

に一箇所に累積する傾向がある。若し一回の噴出と致すと、盛り上つて鐘狀の鎔岩山を作る。やがて其の頂が扁平にひしやげて鍋を伏せたやうになる事もあります。何れにしても鎔岩塊が磊砢として其の表面を蔽つて居ます。やがて急峻な側面には岩塊が轉落して、やゝ緩傾斜の裾の部分を作りますが、一般の礫碉とした狀態は可成長く、樹木草野の間にみえて居るのが常であります。此んなトロイデは其内部には鎔岩流動の縞目はあつても、無論山全體が一箇の堅い鎔岩塊で、頂上には火口の様なものも有る道理なく、前には塊狀火山とか乳房山（マメロン）とか呼びなされた所のもので有ります。頂上に火口こそ無けれ、何うかすると中央部が後に多少落ち込んで窪みを作つてゐることもありますし、小さな斷層を生じたりします。現に近年出來た此の種の火山體は檜前火山の火口内に噴出した圓頂丘（ドーム）が其れであります。有珠嶽火山の大有珠小有珠は殆ど似た所の鎔岩塊が鐘狀に突起して居るのですが、之れは固結しかゝつた鎔岩が火山管の中から押し上げられてせり出した形跡があるさうであります。此の著しい例は西印度マルチニク島のモンプレーの大噴火に、オベリスクのやうな岩柱が煙の中から二百米も高く突出して人を驚かせた。

斯の如き鐘狀、鍋狀の無火口火山體は方々にあります。輕井澤附近には離れ山があつて未だ多少岩石が露出して居る。信州上田附近の棧敷山なども立派な例です。鳥海山上には鍋ケ森など云ふ、名の如き形の小火山體がある。開聞岳の頂上部を尖らせたのも此の火山體が火口の上に載つた爲だと云ひます。伊豆伊東の邊でみると天城火山群中に矢筈山其他の兀兀したのや釜のやうな火山體が二つ三つ見える。箱根双子山になると上双子、下双子共に今迄言つたやうな簡單なトロイデとは少し違ふが大體其の特徴を發揮して居ます。伊豆神津島の天井山などは全山殆ど未だ眞白な流紋岩塊を露して急に聳え、絶頂は先づ平らな高臺ですが、岩塊が積み累つて、所々白砂の原があり、六百米ほどの高さから海原を見下した景色は中々壯快です。

今のやうな鎔岩の溢出が度々重れば、其して多少は流れて固まつたとすれば、やゝ複雑な矢張り急峻な略鐘狀な大きなトロイデ火山體が出來るわけです。火山力が一つ所に多少永續するか度々現れば火口も絕頂に出來て宜いわけで有ります。斯の如きものの而も活火山としての珍らしい好例が手近にある。其れは燒岳（硫黃嶽）であります。此の火山の形は故大下藤次郎氏が神河內の記事を本誌にかかれた時分に、桔梗の莟のやうなと云はれたが、如何にも妙にゴツ〳〵盛り上つて居ます。私は十年程以前に初めて此の山を見て、其の一見無細工なのに失望したことが有ります。此は頗る滑稽な過だつたので、此の富士形の曲線美の無い所に、燒岳の價値が存して居るのに氣が付かなかつたのであります。現在の噴火口壁にも窺はれる通り、富士や淺間乃至大島三原山などに見る噴出物の累層などは一つも無く、全體が厚い緻密な火山岩で構成されて居る。

伯耆の大山、出雲の三瓶山などが亦巨大なるトロイデ火山體と云はれる。大山の形には頗る特異なものがあつて、第一に其の裾野から山の主體は急激に擬寶珠のやうに盛り上つて居る。其の頂上部は元々扁平になつてやゝ高臺狀を爲してゐたに相違ない、今は此の急峻な火山體に削剝作用が迅速に働いて眞白な大崩壞を作つて居ますから、此の形は大部破壞されかかつて居ります。三瓶火山にしても裾野から急に鍋狀に盛り上つてゐる狀は同樣であります。少し小形なのには尙ほ石見津和野町近くの靑野山があります。

九州別府附近の由布嶽、鶴見岳、更に內地に入つて九重山及其附近の山、此等が皆其の輪廓が多少ゴツゴツして居て、眞の圓錐形では無く、傾斜は麓から頂まで頗る急峻であつて、岩石の性質から云つても當然トロイデ火山體と見るべきものであります。但此等は燒岳と同じく火口を頂上に有して居ます。北海道の恵山などが矢張り大きなトロイデ火山だと聞きました。

トロイデ火山體とは全然反對の性質を具へたのが、アスピーテ火山體であります。即鎔岩は極端に

流動性に富み、遠く流出します。爆發的な噴火は割合に少いから、火山灰砂のやうな擲出物の層は稀て、鎔岩層ばかりが層々相累つて居る。其の結果として火山體の形は著しく扁平緩傾斜で、二度三度乃至七八度の傾きしか無い。其の中心には前二種の火山の火口は主として爆發て生じた形であるのに、此の類の火口は陥沒に依つて生じ段々になつて落ち込んでゐるのが多い。布哇のキラウエア火口にしてもマウナロアの火口にしても、前に本誌に記事が出て居た通り、此の特徴を好く具へた大火山の火口であります。其最も底にキラウエアでは有名な鎔岩湖（ラヴァレーク）があつて熱灼された岩液が絶えず沸騰して居ります。其他に氷洲に此のやうな平たい圓錐の舊火山體が氷雪を戴いて聳えると云ふよりは横はつてゐる。シュナイダー氏に從ふと、此の種の火山體は火山活動の烈しかつた第三紀時分には全世界に遍く見られたけれども、其後活動がやゝ衰微して、今はやゝ爆發的なコニーデ火山の時代であると云ふ。從つてアスピコニーデ火山とて、アスピーテの平い圓錐上に急なコニーデ火山の載つて居るのが諸所にある由であります。エトナの大火山も其の一つだと云ふ。所で日本には此の式の火山が何所に有るでせう。私は唯一つ天城火山群中に其の好例を知つて居るばかりで有ります。其れは伊東の南方に先原と稱せられる、一寸見ると何でもない高原のやうですが、其實非常に平たい圓錐で、最高點は四百米計の標高を有して居ます。但其の頂上の火口は小さな低いトロイデの爲に閉塞されて見えない。牝の附近は火山の標本陳列所のやうで、伊東の溜吹の上の山あたりで見ますと、只今の先原アスピーテの上には大室山の奇麗な小コニーデが座つて居るし、北の方には二つばかりの鍋狀又は矢筈山のやうな急峻なトロイデがあるし、遠笠山なども高く多少アスピーテ風の緩かな圓錐を示して居て、見れば見る程興味が湧いて來る。火山に趣味を持たるゝ方に御勸めします。八甲田山がアスピーテだと云はれますが、成程割に緩かな斜面を見ます。諏訪附近の霧ケ峰は本誌に武田博士の記事がありますが、地形圖でみると矢張りアスピーテ風であります。然し此等は餘程侵蝕を受けて居ります。羽後の月山が頂上

の火口は見えないが、アスピーテの高い所まで登えたのが、下方から侵蝕されたのらしく、急峻な谷と上部の緩傾斜の圓錐との境界は頗る劃然として居て、アスピーテ表面は僅に山頂附近に高原狀をなして殘つて居るばかりであります。更に此の地貌の顯著なのが、岩菅山、苗場山であります。アスピーテの緩斜面と思はれるものは、丁度早壯年の山嶽の上に殘つて居る準平原狀にテーブル狀の平な山頂をなして高所に殘つて居ます。純粹のアスピーテとは云はれませんが、不完全に發達したものと云へば云はれるのは、立山彌陀ヶ原や五色ヶ原又雲の平等の鏠岩臺地の地貌で、今は各侵蝕を受けて、前の二つは湯川の谷に臨む急坂を以て切斷され、彌陀ヶ原の西方を蠶食して行く稱名川の谷の急崖に稱名瀧の瀑布を挂けてゐます。雲の平は元々黑部五郎又藥師ヶ岳の下まで擴つてゐた鏠岩臺だつたのですが、黑部川の上流が之を切斷したものと思はれます。

アスピーテ火山體の解析も大體コニーデ火山に於けると同じ樣ですが、丁度一般山嶽の幼年早壯年時のやうに、下部から切開されて行くやうに思はれる。其の壯年的に解析を受けたのはフイヂー群島、タイチ島あたりに幾つも見られる所のもので、前申したやうに玄武岩の岩壁や尖峰が熱帶樹林の茂る山の頂に聳立して居ることが少くありません。此の形狀は我領土になつてゐるカロリン群島中のポナペ、クサイ、トルク島などにも見られる所であります。序に申しますが此等の解析されたアスピーテ火山島が海中に沈んで行くに從つて、周圍には入江を作つて海水が谷に灣入し、低い峰は小島となり、島の周圍には珊瑚礁の輪を繞らせる。遂に全く中央の島が海中に沒し去ればマーシァル群島の島々のやうな環礁になつて低い珊瑚島の白砂の上に椰子の木が海風に靡くのを見るやうになる。

ホマーテ火山體は前二種とは正反對に、鏠岩層を雜へずに火山灰火山砂礫等の擲出物ばかりが積堆して圓錐形をなしたもの、即ち菟斯の爆發力が强大だつたのが其の主因ですから、從つて火口は高さに比して著しく大きい。此の種類のものには一寸考へても大火山をなすものは無さそうです。それは其

程長い間爆發性な噴火ばかりやつて居るものは考へ難く、多くは火山發育の初期の形體として各地に見るばかりであります。伊太利ナーポリ附近に噴出したモンテヌオーヴォは、名の如く新な山で、有史時代に突然起つた噴火の結果出來た擂鉢形の小山で、大きな火口が其中にある。其れ以來少しも活動せずに、伊太利特有の傘のやうな形の松の並木が平和そうに其の上に生へてゐるのを見ます。日本では櫻島の東麓鍋山は黄色の浮石層で出來たホマーテの半壞したものだそうですが、先年の噴火で更に幾つもの新火口に破られ、一部は鎔岩流に埋められました。五島列島中の福江島には一種の玄武岩の噴出物で出きたホマーテが箕の岳鬼ケ岳など云ふ山を作り、大きな火口が一方に傾いて口を開いてゐる。伊豆七島中新島向山には三百米ほどの高さの環狀火山體が半分殘つて居ます。其の東方は波で破壞されて、海面上に二百米の眞白な絶壁を作り、輕石、火山灰砂などの累層が整然と現れてゐる。神津島天井山には五百米の高さに火口壁の一部を殘す同樣の圓錐體が上の方の斜面は雪白色の砂礫が、未だ所々に躑躅の矮木が散點してゐるばかりで、白色磁器のやうな山腹は白島と名づけられて遠い海上からも鮮かに見える。兩方共に一千年程以前の大噴火で出來たらしい。此の流紋岩類で出來た火山も珍らしいものですが、景色から云つても殊に神津島の天井山から黑潮の流れる淼々とした大海原の中に、大島利島新島などの島々の碁布してゐるのを見渡した景色は、瀨戸内の小島の纖細な景色などと違つて、高山の間にみたやうなのに似た雄偉なものであります。書き序でに、豆南諸島の大島にしても御藏島にしても海の上に出てゐる部分は七八百米に過ぎないけれども、此等は陸上にあつたならば八ケ嶽乘鞍などに負けない堂々たる大火山であつたでせう。大島の火口の夜の火光の色、廣い火口原の荒寥とした砂原、安永年間に流出した鎔岩流の日本には少い、布哇あたりに見るやうな餅狀の表面などは火山を知らうとするには是非共一見の價値があります。三宅島の椎などが綠に茂つて一見安穩にみえる雄山の頂上にも、黑々とした火山礫や火山彈が散亂してゐたり、明治七年の噴火のあとの燒け場

など云ふ所に放たれた牛の群が悠々とハンの木の芽を食べてゐる景色を私は好む。御藏島などは高峻な山谷を具へた、壯年的に切開され海蝕された古火山體で、周圍には二三百米から五百米にも及ぼうと云ふ、途方もない斷崖が、丁度親不知の崖のやうに取り巻いて幾つもの澤の谷水は瀑布になつて此の海岸に懸つてゐる。其して全島の急谷峻嶺は一年中蒼々としてゐる暖帶樹林に蔽はれる。八丈島の西山の八丈富士と云はれる立派なコニーデ火山にユヅリハの林などの間を上つて鎔岩流が海に入つて白波が碎けて居るのを脚下に見るのも壯觀ですし、靑ケ島は大きなカルデラ輪の底と裾とに村落があつて海蝕は殆ごの火山を火口丈を殘して壞してゐます。鳥島の爆發の後には眞黑な砂礫が烈日にギラギラ輝いて、白煙が頂から縷々として上つてゐる。小笠原に行くと熱帶樹林も隱せない光つた岩山が意外に鋭く立つてゐて、殊に兄島などは穗高の巖峰のやうなのが海の上に聳えてゐて波浪の侵蝕の激しさを示してゐる。そう云へばロッツワイフ（筒岩）など云はれる鳥島の南の岩礁などは火山島の破滅の最後の形として、二百米位の孤岩が槍ケ嶽のやうに大洋の眞中にヌッと立つて居ます。小笠原よりもつと南の火山列島中の南硫黃島の無人島などは、周圍は二里にも足りぬ小島で居ながら九百米も高くピラミッド形に突き立つてゐる。北硫黃島も小し大きい高で七百米位の山巓まで、所々凄じい絶壁をあらはして、二島共に大低其頂を白雲に包んで居る。洋上の離れ島に働く波浪の侵蝕は意外な壯觀を作つて居ます。

硫黃島は之に反して、平たい百米位の高さしかない、近來海底から隆起した島で、階段のやうに島をめぐる無數の崖と山上の凝灰岩に生へてゐる珊瑚は之を證據立てる。島の中央には大きな硫氣孔があつて白烟を上げてゐるし、其他方々に地熱の作用が現れてゐます。南の半分は砂漠のやうな火山礫の砂原で、其の尖端にパイプの口のやうな形のパイプ山の火口が二百米程聳えてゐます。タコノキの林を潛りオホタニワタリの露を拂つて此の山に攀ぢのぼる事も出來る。火山の種々な形を味はふには此

等の島巡りは都合の良いものと思はれます。

大分話が横道に入りましたが、火山は大陸の内部にこそ少なけれ、世界の各地を通じて、北はアイスランドの氷帽を冠つた火山や、アラスカのランゲル火山のやうに氷雪の上に烟を騰げて居るものから、熱帶地方にはフィリッピン、ジャバ、ボルネオなどの綠の森に包まれた火山錐、更に南極大陸のエレブス火山のやうに氷雪の裡に「燃ゆる火を雪もてけち降る雪を火もてけちつゝ」あるものもあります。高く聳えれば、亞弗利加のキリマヌジェロ、ケニア、キボの諸山のやうに、麓には熱帶の奇樹珍草の茂り合つてゐるのに頂は氷河を流してゐるやうになり、南亞米利加のコトパキシ、チンボラゾ、ポポカテペトル其他アンデス山系の大山脈の頂上部にしても、アルプよりも氷河の大きいカウカサスの最高峰にしても、新舊の火山體だと云ひますし、米國の名山マウントシャスタ、マウントレーニアなどの氷雪を戴いた大嶽も頂上部の削剝された、八ヶ嶽を大きくしたやうな舊火山だと云ひますし、高山にして且つ火山なるものの多いのも日本ばかりではないやうに思はれます。日本の例で云へば、氷雪に削られた火山錐は何所に見出されるでせうか。利尻島の形體はマウントシャスタの雛型のやうに見えますが、詳細のことは知りません。千島列島中阿頼度島などは、海上二千米も聳えて居る有數の大コニーデでありまして、立派な富士形をなして白雪を戴いて居ますが、其の半以上は岩石が裸出して地勢嶮悪を極め、到底攀ぢ上れないさうで有ります。然し氷雪の彫刻を受けたか何うかは分りません。聞く所によればサーク狀の地形は見られないと云ひます。

地形圖　最後地圖に就て一言致したいと思ひます。我々が山嶽のやうな立體を見るに當つて、多くの場合は此を側面から眺めて其のプロファイルを知つて居る場合が一番多い。富士山を見れば其の圓錐形の立體と感ずるより先きに、先づ扇形の輪廓に心を捉へられます。壯年の山嶽の浮彫を知るより先に、屏風のやうな感じが先きに來ます。親しく峰を攀ぢ谷を傳つて見るか、又は山の襞に蔭影が出來

るやうな日ざしの時分に、立體的な感じが出て來る。此の二つの感じを圖に現はせば、丁度高い山から比較的低い山嶽を見下すか、又は飛行機からでも撮つた寫眞のやうなバーヅアイヴュ的なものが一番適當でありますが、實用の上から精確と云ふ點即方位距離高さ等を最も明瞭に表すには、何うしても平面に投影したる平面圖、即現今我等の使用してゐる地圖が一番理想的だと云ふことになります。昔の地圖に、富士山は圓い平面圖に描かれたものは稀で矢張り富士形に描かれて居る、其外の山々も皆バーヅアイヴュに書かれて居るのは、實景と云ふこと、分り易さと云ふことから無理も有りませんでしたが、其外の河流海岸などは間も無く平面圖になつても、山嶽だけは未だ斜に見たやうにかいてあるのは少し滑稽に思はれます。

所で平面圖でありますが、我々人間は大空を翔る鳥と違つて、平面としての山嶽溪谷を見なれませんから、何うも矢張り少し斜に見た時の方が立體の感じが良くします。此の兩方を自由に見せるのは何と云つても凹凸（レリーフ）地圖又模型によるより外は無い。實際我々は如何ほど好い地形圖で山嶽の形狀を豫想して居ても、矢張りレリーフを見た時ほどの立體感は到底得られない。水平曲線で造つた地形圖が一番理想的であるとしても、此れを見て直に立體の感じを得るには餘程混み入つた心理的作用が必要であります。曲線の密な所は急、粗な所は緩な斜面と云ふ事實は、何れ程敏活に考へられても、未だ實際の傾斜の大小を視感が認識する銳敏さとは比べものにならない。暈滃を線又は色に依て傾斜の大小に應じて濃淡をなすやうに施すとか、又陰影を表すやうに丁度二十萬分一帝國圖に見るやうに塗るとかして、立體の感じは餘程增して來ますが、なほ凹凸を顚倒するイルユジョンが時によつて起ることがある。曲線ばかりの場合には猶更起り易い。然し少しなれた人には、水平曲線の圖が或る程度まで立體の感じを與へることは確です。殊に傾斜が急で、曲線の間隔が密になればなる程、又等距離と呼びなされてゐるコントルインターヴァルが小さければ小さい程、よく表れることは勿論であります。

二萬分一の箱根附近から伊豆天城火山群あたりの丁寧に製圖された地形圖は、暈滃を施したかと見へる程に立派に地形が分ります。飛驒赤石などの山嶽の地形圖、もつと低くても九州の市房山などのやうに五萬分一の梯尺でも立派に山嶽の彫刻が分る所もあれば、阿蘇外輪山の東側のやうな緩斜面の細かい起伏になると、ずつと立體の感じが減じて來ます。此れは畫でも寫眞でも同じてありますが、立體的に見やうとするには片目を塞いで見ると好く見へます。

山嶽地の地形圖に就て云へば、幼年から早壯年の山嶽では急な谷の兩側、谷の奥の急斜面と、山頂附近の平坦な準平原面との境界は水平曲線の粗密で劃然と界せられて居なければならない。火山錐の彫刻の初期にしても同樣であります。此模樣は日本の五萬分一地形圖などにも仲々明瞭に表されて居ます。起伏の大きな壯年の山嶽では尾根は概して鋭くなつて居ますから、若し其まゝ此れを圖上に寫したならば、日本の山嶽の高いものでは曲線が急に屈曲して居なくてはならない筈ですが、地形圖では山背を表す所謂凸線を明瞭ならしむる爲に、多少之の曲りに丸みを付けて有ります。從つて山稜は幾分か鈍く表されざるを得ない。小藤敎授はこれは獨逸のやうな中山性山嶽地に富む地形圖を眞似たからではないか、日本では瑞西式で無くてはならないと語られました。此の意見には飛驒赤石等の高山の地形圖を見る人々の贊成な事と思はれます。第二に岩石の露出した山嶽の表示ですが、全體側面から見ては著しく目立つ鋭峰でも之を平面に投影して了へば一向つまらなくなり勝ちて、マツターホルンの尖峰でもただ少し角ばつた島のやうに氷河の中に描かれるに過ぎない。岩山を現すのは然し流石に瑞西の地形圖などは巧妙だと思はせます。蔭影を利用して巧みに稜々とした巖峰の感じを與へて居る。之に比すると日本では頽岩及露岩と云ふ二つの記號でやつて行きまして、露岩は鎔岩流のなどにも使用されるのですから、立山劒嶽や白馬嶽やなどのやうな岩山などになると、何うも其の感じがうまく出ません。白馬嶽では露岩の記號を多く使ひ過ぎてあるし、穗高山などは頽岩て多く表して有り

ますが何所か物足りません。此の外に箇人差が多くなつて來て、霞澤嶽などは大變な岩山のやうに成つて居るが、肝腎の釵ヶ嶽などは意外に岩石が表されて居ません。日本は火山に富んで居るせいか、火山の地貌は概して良く表現されて居て、櫻島噴火後に作られた二萬五千分一地形圖などは、世界に向つて誇ることの出來る位に鎔岩流の模樣などが良く出て居ますが、高山嶽の地貌は何うも不滿足なるを免れない。之の原因には事業の完成の遲速、即時日の問題も關係しますし、一方には記號上の約束から來る制限も有つて、あながち技巧一つの問題では無いでせうから何れ他日改良される事と思はれます。カールの地形にしても五郎嶽の南の大カールなどは良く表れて居ますが、外のものは餘り明瞭とは云へません。此れなどは手心一つで更にうまく行くものと考へられます。三色版の五萬分一地形圖の方が無論一色刷よりは見るに便利であることは申すまでも有りません。

今迄長々と書いて來ましたが、地形學の種々な理屈からも、山岳の偉大な、悠久な感じは可なりに味はれることを申し度いと思つたのですが、叙述の方法が下手ですから或は其の目的は達せられなかつたかも知れませんが、兎に角吾人の智識慾は山岳のやうな自然に對しても其の解釋を求めますから、其の要求に應じて簡略に今までの學説を紹介致しました。なほ詳しいことは次の書物を御覽になつたら宜からうと思ひます。

通俗的なものでは、Hobbs; Earth Features and their Meaning があります。此れは六百頁ほどのもので種々雜多な地上の現象風景が面白く書いてありますが、氷河や斷層に關しては氏自身の意見が長々と出て居ます。此の種のものでは第一番のものと思はれます。J. Geikie; Earth Sculpture. 此れは英國の地質學者の筆になつた可成有名な本ですが、少し地質構造に重きを置き過ぎた感があります。Mountains, their Origin and Decay. 此れも同氏によつて著され、寫眞など中々立派て有りますが、未だ少し地形學の本當の面白味が出て居ないやうな氣がします。Lord Aveburry; Scenary of Switzerland.

流石にラボック氏で、地質學を面白く説き、アルプの地質構造などを巧妙に説いて居ますが、地形は未だ少し物足りぬ所があります。W.M. Davis; Elementary Physical Geography. 四六版三百頁ほどの小冊子で、地文の教科書ですから平易に説いて有りますが、何しろ地形學に新時期を作つた人の著ですから地形の骨子を知るには適當のものです。Gründzüge der Physiographie. 此れは前書と同じ大きさですが、字數は遙に多く、地形の所もずつと詳しく書かれて居ます。此外米國で出た Salisbury; Tarr 等の Physiography が有りまして、寫眞等が仲々立派なのが澤山挿入されて居ますが、內容は其割に豐富ではありません。E. Huntington; the Pulse of Asia. 此の書物は地形學の教科書では有りませんが、地形學者の書いた天山、阿頼、カラコルム等パミール高原附近の地貌と之に應ずる人間の生活を書いたもので、良書として推擧することが出來ます。W.M. Davis. Die Erklaerende Beschreibung der Landformen. デーヴィス先生がハーヴァートから伯林大學に交換教授として講演したものを、獨逸で翻譯出版したもので、菊版五百餘頁の何所をみても盡きない興味を見出します。最近の地形學の思想は此の書に代表されると云つて宜い。說明にはデーヴィス氏得意のブロックダイアグラムとスケッチを澤山對照するやうにして有つて、寫眞などよりも遙かに明瞭に且つ迅速に地形の成立、變化を了解する事が出來ます。今の所では此れ以上の良書は存在しません。（終）

雜錄

○神戸岩と御前山

今から一と昔以上前のことだ、未だ信憑す可き地圖のない時分、自分達が輯製二十萬と地質調査所の地圖を唯一の案内として、近郊の山地を初め八ヶ岳とか駒ヶ岳などへ出かけた頃、ある年御岳大岳あたりを歩いて、其の西隣に大岳よりも高そうな一座の山があるのを見つけ、それが御前山といふ山であるとを聞かされたことがあつた。成程地質調査所の地圖を見ると其の名はあるが登路などは無論記してないのみならず、標高さへ大岳よりも低く出て居る。歸京してから晴天の日に西を望むと、これはどうしたことか御前山が大岳の上を越して東京の市街をのぞいてゐるではないか。五萬分の「五日市」が出るまではそれが折々議論の種となつたが(「山岳」第三年第二號九五頁參照)、それと同時に御前山の登山もあまり企てられなかつた様である。登路は御岳で聞く處によると、大岳山から尾根傳に行かれる、尤も路は餘程ひどいといふことである。その頃の山地旅行には大抵梅澤君と山川君とが同行されたもので、自分は兩君の驥尾に附するの光榮を有して居た。明治三十九年の秋十一月の末のことだ、自分は梅澤君及び河田杰君と共に高尾から陣場ヶ峰の方に枯薄を推分けながら尾根傳ひに遊びに行たことがある。其の時山川君も中途から參加される筈であつたのだが、終日姿を見せなかつたのは、其の折丁度一人拔駈の功名をして、大岳から御前への縱走を斷行されたのであつた。其時の紀行は發表されなかつたので、詳細の事を知るを得ないが、今日ではとても縱走は覺束ないと思はれる程ひどい藪となつてゐる大岳御前間の尾根も、其當時は甚しき困難も無かつたものか、同君の記錄によると、廿二日午前六時三十分御岳の宿を出發し、御前の頂上に著いたのは午後一時であつたといふ。同君はそれから檜原府の小澤(ヲザハ)に下つて、秋川に沿うて五日市に出

られたのであつた。其の翌々年以後に梅澤君は小澤から二回も御前に登られたそうだが、自分は一人取殘されて御前の麓は素通りにしても未だ山腹へさへ上る機會がない。去年一月の十七日には三國山から武甲界の尾根をこえて檜原の本宿へ來た序もあるので（前號所載「北相の一角」參照）思ひ切つて御前山に敬意を表しに行くことに決する。其の順序として自分はまづ沸澤の瀑を見物し、神戸（カント）川の中流に有名な戸岩を訪ね、終に御前山頂に達してから復秋川の沿岸に下ることゝなつた。

沸澤の瀑

十八日。隣室に泊た別の「鋏砲打」の一組は早朝から起きて、荐に朝食の準備如何を偵察して居たが、彌々出來上つたといふ報告が聞えたので自分も起ることにする。夜は夙に明けたのだが、山陰の爲に日が射さないのでいやにうす暗い。先に起きただけに「鋏砲打」の方は仕度も早く出來て、七時半頃にはもう犬をつれて出かける。これも一行五六名で土地の獵師が二人許參加してゐるらしい所謂官林の方へても入込むのか、南秋川に沿うて霜に白い路を行くのが見える。自分の出發はずつと遲れて八時二十五分になつた。

今日は先づ神戸川を溯る豫定であるのだが、宿で沸澤の瀑見物をすゝめられたので、音無しく沸澤に向ふことにする。

橋本屋を出て西北に小坂を上ると本宿の主部で、右側には鎭守の春日神社がある。路傍に置かれた水槽には筧で引かれた清水が溢れて、今宿を出た許だが一掬したくなる。人家を離れて道が下り氣味となると右と左とに岐れる。自分は此處で左に切れる。道は少し爪先上りで、やがて影田橋とかいふ弱々しい橋で弗澤（ホツサハ）を渡るといよ〳〵時坂（トツサカ）に掛ることになる。此處で左方桑畑の間に通ずる細徑を辿ると、彼の檜原本宿で用水として引く水源の弗澤に入り込むのである。徑は明にふめてあるが、朝霜に凍つてゐるからネイルドブーツで大理石の上を歩く樣な氣がする。流れの左岸に沿うて行くとやがて徑が兩岐して、左のは急に川床に下つてから對岸の島の樣に突出た林の中へ入つて行く。自分はどこまでも左岸に沿ふて進むと終には

岩石のゴツ〳〵した川縁に出てしまつた。用水は此の邊から木樋を以て右岸に沿うて引いてある。細徑は川を渡つてずん〳〵右岸の林中に入るが、自分はどこまでも流れについて荊棘を排し岩角を捉へて進むと、間もなくそこには弗澤の瀑が現はれる。瀑は二段になつて懸り、下段のものだけでも六丈五尺あるといふが、目測大約三丈と見た。水量は少いが形狀は優雅で、それに丁度岩壁から滲み出す水は凍く氷柱となり、瀑の飛沫は雲形に凍つて岩壁にへばり著き、瀑布に一入の趣を添へて居た。春期新綠に混つてツヽジでも開いたならば其の景更に妙だらうと思はざるを得ない。瀑壺は大して廣くはないが相當の深さがあつて、清冽玻璃の如き水を湛えてゐる。

　踵をかへした時はもう八時四十五分であつた。歸路は下り氣味なので却つて滑り易くて足元の注意を要する。桑畑の所まで來ると、正面には高黒山が見えて、その右側の岩壁から銀の様な氷の瀑が懸垂してゐるのが目につく。本道に合して左に折れて一寸下ると、西川橋といふ長大な木橋で北秋川を渡る。左右の山足は稍開けて畑には桑が植えてある。茅倉（カヤクラ）橋を渡つて少し行くと千足へ來る。

　これも三十九年の秋のことであるが、梅澤君と深澤（フカサハ）から御岳に登つて、歸路は大岳から南に八割（ヤワリ）へ下つたことがあつた。此處は檜原村大字三都郷の小字で、此の外には尚白倉、中里、千足等の小字がある、そしてその千足は千束ではなくて千足と書くのだと敎はつた、ハハー百足以上だなと思つたとがあつた。何しろ其の頃頼りにした地圖にはこんな小名は藥にしたくもありはしない。登山に不便不都合の多かつたとは驚く可き程だが、其反比例に山岳愛好心は中々盛なものであつた。あの時代に比較すると今では山へ登るにしろ計畫を立てるにしろ幾十層倍も樂になつた譯である。これも昭代の御蔭であるが、其の割合に近來の登山家の一部が山に對する態度には不可解の點が見える。登山は一種の運動か又は冒險事業とでも心得て居るかして、困難とか危險とかが伴はなければ價値がないと考へる様な傾向があるのは、寔に不

思議な現象である。そうかと思ふと、物を辨へない外國人の墓に倣つてか、俚人が兎に角地藏佛と崇め又は大日如來を勸請して置く鳳凰山の巨巖に上づて得意がる人が輩出するそうだ。假令最高點に達するといふとが登山の意義なりとした處で、何にも地藏佛の頭へまで上らなくともよさそうに思はれる。又地藏佛と名は付けられた處で高が花崗岩の大塊に過ぎない、之を尊崇するなどは迷信だといふのなら、佛寺に詣で神社に額づくのは皆迷信と謂はねばなるまい。いや私は教會へ行きますと名乘り出る人があるなら Holy Trinity を信ずるのも同樣ですと申上げるより外致方はない。岩の塊だとてそれだけの因緣がなければ鳳凰山頂に獨坐してゐるものではない。佛菩薩であらうと大己貴命であらうと、何れも偉大なる自然力の manifestation に外ならぬ、一神教だとてひどく宣教師などが自慢する基督教でさへ「子」とか「聖靈」とかいふ manifestation を崇めさせる、而もそれを信じなければ宗教の根本が成立たなくなるだらう。人間は萬物の靈長であるから岩の片などを尊むのは恥辱だと思ふ人があるかも知れないが、人間だつて石だつて同じ自然の手に成つたもので謂はゞ兄弟分ではないか、何も自分一人偉いと思ふにも當らない。大風が一吹ふけばケシ飛んでしまうような人間よりは、泰然自若としてゐる岩の方が偉いのかも知れない。下等植物だなどゝひどく輕蔑する細菌の爲に、六尺豐の有髯男子がコロリと斃される。いやもう人間なんて哀れなものだ。そこで大に細菌學を研究しその結果を應用して細菌撲滅病源退治と出かけるが、病源菌なるものがいつでも必ず病源だかどうだかわかるものぢやあない。加之醫者が盛つてくれる藥がいつでも利くとは限つてゐず、死體解剖の後に至つて初めて死因がわかるなどゝ來ると、日本でよくやる樣に滅茶々々に破壞した飛行機の墜落原因を調査する樣なもので、あまり效能はないようだ。病氣によつては醫者などはどう屁理屈をこねるか知らないが、或點迄は精神上から治るものだ、それをも迷信といふなら科學も哲學も皆迷信になりさうだ。橫道へ這入つてこんな理屈をならべても何の效もあるまいが、

之を要するに鳳凰山の地藏佛の頭へ上るのは藝もないとだ、それよりは三錢出して鎌倉大佛の內陣へでも這入つた方が遙にましだと思ふ。さういふとひどく迷信家でゞもありさうに取られると困るから御斷して置くが、自分は決して御賽錢を上げたから特別の御利益があると思つたり、本願寺樣の風呂の水を有難く頂戴する樣な徒ではない。神主でも坊さんでも誰でも話せる人は大好になるが、鼻の下建立の專門家や日曜日に商賣をする人達は御免に御座候だ。

再び本道に戻つて千足を通ると、高黑山の東裏から出る千足澤が北秋川に注いでゐる。その上流には綾瀑と天狗瀑といふ二名瀑があると教はつたが、此處で此の上道草をするのも時間の都合上工合が惡いので、瀑は何れ此の次といふことにして前進を續ける。千足からは道が西に向ふので正面に御前山の頭と其の左に湯久保山（又神戸ノ入り）が雄大に見える。幕沼へ來ると大岳登山口の石碑があつて、文字に入れた朱の色は鮮明である。小木橋で幕沼川を渡つて直其の右岸の白倉へ著いたのは九時二十五分であつた。此處で對岸に不動澤に懸る一丈有餘の不動瀑が一寸目を牽く。白倉から十五分も行くと大澤の部落で、大澤橋といふ木橋が目の下の北秋川に架してある。此處で往還は右岸に渡るのだが、支道は右に小坂を上つて川の左岸に沿うて行くことになる。分岐點には新しい木標があつて「右神戸、氷川近道」と記してある。

神戸岩

大澤の分岐點を右に切れて杉の植ゑてある坂路を爪先上りに辿ると、直眼前には神戸川と北秋川との合流點が現はれる。此の山の鼻をまはる所は一寸感じがよい。兩側の山が差出てゝ谷口を推しせばめ、言はゞ此の谷の門戸をなしてゐる所を過ると、谷は直に開けて右岸には人家が見える。その傍から山をこえて小澤に通ずる捷徑がある樣だ。やがて神戸の部落に來ると、左側に小木標があつて鐘乳洞入口三丁餘と記してある。此の邊は例の秩父古生層の石灰岩で、昔から數個の鐘乳洞が知られてゐる。先年國民新聞で大分書き立てたので、利に走る山民は路を修理し示道標を建てゝ都人士

を呼ばうとしたが、幸か不幸かこれは村の財源にはならなかつた。洞は何れも狹いもので、甸匐して入るものといふ。其の中でも法穴（ハフアナ）といふのは最有名で、郡村誌檜原村の條には左の記事がある。

法穴。丑ノ方字神戸（舊字穴坂）清水橋ヲ距ル三町餘神戸川ノ南岸ニ巖山聳峙スル凡七十丈許其中腹ニ洞窟ヲ開キ洞口辰ノ方ニ向ヒ高七尺幅四尺許炬ヲ照シテ西方ニ入ル三間許ニシテ南ニ向ヒ三四間上リ又西ニ入ル四間許ニシテ窮ル其間高低廣狹アレドモ高サハ概ネ三四間幅四五尺ナリ又中程ヨリ南ニ向テ岐洞アリ高クシテ登リ難シ洞中ニ立身觀音ノ石像ヲ安ス其傍ノ一段高キ處ニ古碑アリ下ニ享德元年十月日ト刻ス里人ノ說ニ昔時窟中ニ木食ノ行者住ミケリ是其墓碑ナリト云。

享德元年と云へば西曆一千四百五十二年に當るが、その以前已に此の穴が知られて居たとは面白いことである。自分は濕でゞもあるのならば二丁位な道草は敢てする餘裕があつたが、穴へ入るのは餘り好かないので、これも割愛することにした。

橋を渡つて神戸川の右岸に出る所に右からヤゴシ澤が合流する。其の直北の尾根を登れば路は惡いが大岳に達するといふから、これは「山岳」第八年第一號にある梅澤君の「御前山塊」の記事に補足する價値があるかとも思はれる。此の二三丁上手で神戸の部落は終ることになるが、左手に大岳山の神官の住宅が嚴に見えて居る。朝の日は暖い光を此の山間の小平地に投げかけて、風のない今日は春の樣に溫かい。氣の早い頰白が枯木立の中で「一筆啓上」を謳つて居るが、荷を負つてゐる自分は春どころではなくて夏の樣に暑い。水之戸（ミヅノト）澤から引いた村の用水が杉林の中の蘚蒸した小溝を流れて行く所で一と息入れて對岸を眺めると、そこにはこれも大岳から出るスベリ澤が神戸川に注いで居る。十時十分いよ〳〵神戸川の本流赤井澤と水之戸澤との合流點に來た。此處にも標木があつて「左水之戸澤、右戸岩、氷川近道」と記してあるので、案內無でも迷ふ憂は更にない。水之戸澤には梯子の樣な橋が掛つて居るので徒涉の難もなく、細い徑を赤井澤の右岸について進むと

直にその河床に下りて之を左岸に渡る。水之戸澤に比して水量は極めて僅で、景も亦平々凡々たるものである。左岸の杉の植林を少し行くと再び右岸に移るが、流れは四五寸しか深さがないので河床の石の上を行く。此の調子では大雨の後でも徒渉するに大した困難はあるまいと思はれる程である。此の邊から路は漸く岸上の小高い所を通るが、間もなく正面に現れたのは豫て其の名を聞及ぶ戸岩であつて、其の壯絶奇絶なことは今迄の流れの平凡なのに倦きてゐる眼には一層の喜を感ぜずには居られない。水之戸澤の合流點から十五分程かかつた。岩は神戸川の兩岸に對峙して各々高さ二十丈許り、其の間は甚だ狹まつて二間に足らない所もある。恐らく石灰岩の大塊であらうが、凹凸ある表面には灌木や草などが大分生じてゐる。其の西側に立つものは所々に大小不齊の黃色の斑紋を有してゐる。これは明に岩石の色澤ではなくて其上に生ずる何か微細な隱花植物に起因するものに相違ない。双眼鏡の度を荐に合せて見ても顯微鏡の代用はしないので、標品を手にし得るまでは明言するには躊躇するが、地衣の一種に非ずんば恐らくは綠藻の一種で氣中生活をする Trentepohlia ではあるまいかと考へられる。此の類は日本に二三種もあつて、岩石や樹皮上に著生してゐるもので、概見は綿の如く又絨の如く、體内に一種の色素（ヘマトクロームだと考へられて居る）を多量に含むが爲に、綠藻であり乍ら綠色ではない。岩と岩との間は小規模の澤をなすので、到底川床を傳ふなどいふことは出來ないが、幸にも丈夫な橋があつて東岸の岩に移れる樣に成て居る。此處に何を祀つたものか小石祠があつたが、多分龍神でもあろうと思ふ。澤は此處で屈曲するが爲に東側の岩は川に面して半ば隧道の樣に刳れて居て、其處には棧道がしつらへてある。流れは甚しく壑つて、脚の長い人ならば一跨に出來そうに思へる。しかし西側の岩には一寸足掛りはなさそうだ。岩戸の奥行は數間にすぎないが、若し是が二三十間も續いて居たならば、之をヘッて見やうなどといふ特志家の二三人は出るだろうと想像する。そして彼處をへつらない奴は馬鹿だとも言はうも

のなら、猫も杓子も出掛けて神戸村大繁昌といふのだが惜いものだ。しかし現在のまゝでも東京や横濱からわざ〳〵見に行く價値は十分にある。岩の間を通つて再び川原に出て振返ると、右岸の岩の北裏にはイハナンテンが澤山生へてゐて、其の紅色に染つた光澤のある葉が實に美しい。戸岩から上流は再平凡な澤となつて、低い瀑位はあるが何等の奇も變もない。それでも新編武藏風土記稿檜原村神戸組の條を見ると、此の邊にはシノハチ長滝（ナガトロ）など云ふ所があるといふから、今次に其の全文を抄出して掲げることゝしよう。

神戸岩

村ノ西北半里許ニアリソノ邊ハ最險岨ノ地ニテ峻シキ山間ニ左右ヨリ峙チシ岩ナリ北ノ山ニ添タル岩ハ水底ヨリ頂ニ至ル高サ凡三十丈許幅ハ九尺程ナリ又東南ノ方ヨリ出タル岩ハ較卑ク廿五丈許幅三十五六丈厚サハ各五六丈許山上ヨリ望メバ其高サモ對スルニ似タリ形狀實ニ神戸トモ謂ツベシ岩間ヲ東流セル谿川ハ幅二間深サ二尺許水源ハ乾ノ方赤井澤ヨリ流レ出テ水路曲折コゝニ至テ凡一里許ナリ此岩戸ヨリ十五六間モ上流ニ五尺ホドノ飛流アリ其下ニ圓淵アリシノハチト名ク深キコト測リ知ラズト云ソコヨリ僅ニ過テ四尺許ノ飛流アリ廣サ十歩許ノ淵ヲナセリ長滝（ナガトロ）ト呼ベリ其下流ニ又一尺許流レ落ル所アリ其下十五六歩ノ所ヲ雨乞淵ト號ス即チ南ノ岩戸内ナリソノ岩ニ水ヨリ七尺許モ高處ニ護摩壇ト稱シ八間ニ五尺アマリ平坦削ナセル如ノ所アリソノ傍四尺許高所ニ南面ノ岩穴アツテソコニハ龍神ヲ石宮ニ祀レリト云古弘法大師護摩修法ノ所ナレバソノ名アリト云傳ヘリ此邊岩茸多ク生ズ又陟釐アリテ是ヲ採モノ親ク物語レリ人タヤスク近視スルコトアタハズ只山上ヨリ此ヲノゾムノミナリ。

又稍重複の嫌はあるが序を以て郡村誌檜原村にある戸岩の記載をも次に掲げることゝする。

神戸岩（カント）　又戸岩トモ云　丑ノ方字神戸ナル神戸川ノ中流東西兩岸ニアリ峻山深谿ノ間兩岸ノ山脚ヨリ巨巖屹然並立シテ其狀門戸ノ如ク東巖最高クシ

テ水底ヨリ岩頭ニ至ルマデ高三十丈幅九丈餘西巖ハ稍低ク高廿五丈許幅三十餘丈兩巖ノ間空闊九丈許赤井澤ノ溪泉之ニ注ギ奔湍白雪ヲ噴ク奇景言可ラズ西嵓ノ北側水面ヨリ高七尺許ノ所ニ長八間幅五寸許平坦アリ土人之ヲ弘法大師ノ護摩壇ト稱ス其上四尺許ニ岩洞アリ小禿祠ヲ安シ靈神ヲ祀ル護摩壇ノ前ヲ雨乞淵ト呼ベリ此邊川苔岩茸ヲ産ス。

此の兩文中多少相違の點はあるが、自分が記述するよりも詳密であるから(假令精確でなくとも)後來の遊子の參考となることだらうと思ふ。又同じく風土記稿によると、神戸川の下流には平岩淵といふ名勝もあるといふから、これも次に抄出して置かう。

神戸川ノ下流ニアリ水中平盤ノ巨巖ニテ水ノ落口ニ凸岩アリソノ下流ニ淵アリヨリテ平岩ノ名ヲヨベリト云。

これはどの邊にあるのか自分は一向に氣がつかなかつた。

戸岩より上流は良く修理された路があつて、初めは再三流れを右左に反覆して渡るが、終は大體地圖に示されてある通り左岸を行くことになる。山の斜面は所々開墾されて、桑が植付てあるのを見ると路のよいのも肯かれる。聞く所によると昔は戸岩の下には路はなかつたので、これ以上山にわけ入るには皆戸岩の上を越えたのだそうだが、今から三十年許り前に、小河内の藤左衞門なる人が此山奥の山林から木を切り出した時に、戸岩の下に棧道をかけたのが初りで、其の後は村の者が修理を加へて通行に便にして居るのだそうだ。岩から二十分許上流に上つて見たが、餘りの暑さに岩蔭を覓めて休憩する。上衣も何もすつかり脫いで、冷水で顏を洗つて蘇生の思をしたが、寒中の歩行がこれ程暑いものとは思はなかつた。時間は少し早いが荷を下した序に辨當を食べることにして、日影に半時間許休んだ爲めにやつと涼しくなつたから、十一時十五分いよ〳〵出發とする。

本來御前山に登るには檜原村の字小澤(コザハ)から所謂御前尾根を上るのが本道で、神戸川の谷からならば、水之戸澤を溯つて所謂中尾根に取付くのが順

路とは聞いたが、赤井澤の川沿の道の立派なのに釣込まれたのと、此の澤を上りつめた鞍部から尾根傳ひに上つて見たい慾望もあつた。山川君は大岳から中途の此の鞍部まで來て後半を斷念されたといふから、自分が今度梅澤君の放棄された分を引受ければ二人で一人前といふことになる。尤も此の登路が荒廢してゐて困難の多いことは已に梅澤君が書かれてあるが（「山岳」第八年第一號一四八頁）、自分は自然此の惡い役を引受けなければならない破目になつてしまつた。

赤井澤に沿うて彼是二十分も進むと、右側に御大典紀念林と大書した標木があつて、傍には椎の木などの暗綠色が落葉樹や草本の山あひに異彩を放つてゐる。其の邊に山の神が祀つてあつて、山の神の澤といふ小澤がある。すると間もなく路傍に衣類が疊んで置いてあるので、不思議に思ひながら進むと、復も半纏樣なものが木の陰にある。やがて左から御前山の中尾根の東面から流出すクロノヲ澤が赤井澤に合流する。此尾根の北側には殘雪が大分あつて、ひどく高山らしい景色なのに心臟の鼓動が高まる。

クロノヲ澤を後にして少し上ると、十六七と十三四の少年が路傍で辨當を使つてゐるのを發見した。近づいて話しかけると氷川から山を越えて來たものだといふので、戸岩でも見物に來たかと思つて聞くとスゲを採りに來たのだといふ。見ると傍には此の邊に多いカンスゲが澤山束にしてある。此の葉を綯つて草鞋の緖にすると大層丈夫なのだそうだが、隨分手の痛い仕事だろうと思ふ。それはどうでもとしてカンスゲの葉がこんな役に立とうとは今迄一向に知らないことであつた。由來日本人は天然物殊に草木を利用するに長けてゐるようだ。山間に行くと想像にも及ばない草木の芽を食たり、スキゼンジノリ、カハノリ、カハモヅクの如きぬら〳〵べろ〳〵したものまで食ふ。ワラビ、ゼンマイは勿論上等な方だ。手酷しいのになるとカモガハノリと號してあまり潔かならぬ所に生ずるノストックをさへ食ふ。又纖維植物なども隨分よく研究してゐて、スガモやアマモの

強靭なのを利用したり、ゼンマイの綿を取て絲に紡ぐなどは、一寸外國人の考へつかないことだろう。其の外染料植物なども意外なものを使用してゐる。中學校で博物學を出來るだけ教へない樣にして居てさへ、これ程利用厚生の道に熱心なのだから、此の上理科學が盛になろうものなら、今後廿年を出でずして日本國内には何等の原料品がなくなつてしまうかも知れない。其の上利得心一點張の成金連に少し甘そな話でも持かけられると、成金風を羨しそうに傍觀して居た學者先生達は、直樣科學應用だなどいふ旗幟を推立てゝ金儲のたねを捜しまはつて成金屋さんに忠誠ぶる。幸にして休戰になつて、成金連が片端から沒落して行くからよい樣なものの、左もないと中には慾に轉んで神聖な教職を惜氣もなく擲捨てたり、學者の本領を夢の如くに忘れたりする者も出て來て、宜敷徳義を超越した成金の手先に使はれたり、自動車に乘ることを鬼の首でも取た樣に考へる不心得者が輩出して、國家の爲には由々敷大事になる。或は長々しい肩書を看板に、方角違の會社に雇はれたりして、本職の方はそつち除になりかかつたといふ噂さへ聞たが、若しそれが果して事實なりとすれば、寔に世道人心の爲に痛嘆に堪えないことである。

少年に別て三五歩上ると右側に拵へた炭竈から二人の炭燒が丁度火の塊の樣な木の枝を掻出してゐる。かうして澤山もない此の雜木は皆炭に燒かれてしまうのである。路は大分細まるが毎日炭燒が神戸から通ふのでよく踏めてゐる。右を仰ぐと大岳から天地山の方へ連る尾根の一部が見えて、崩解した岩が青白く物凄い。左はイボヤシキといふ山のヒラだが、右からは二つ三つ小澤が出て、其の一つは此崩解の方に入込むのらしい。夏から秋にかけて通つたなら、大抵な大男でも雜草の中に埋れてしまひそうな路を上つて行くと、路は二岐して、小溝の向には大きな小屋が見える。右の方を四五間上ると炭竈があつて、折よく木を背負つて山から下て來た炭燒に逢ふ。見るとクロモジの幹が大分あるが、こんな物まで炭にするのだそうな。路を尋ねると此の奥は井戸入りといふ澤で、

氷川への道は小舍の後を行くのだといふ。引かへして小舍の前に出て中を覗いて見ると、多少の炊事道具や風呂桶等はあるが、人の宿つて居る形跡はない。小舍は奥行二間許、間口六七間もあつて、完全に床が張られてある。元來は此の附近に植林した時に建てられたものだが、近年山の持主が代つてから更に植林する爲に增築したのだといふ。

小舍の横手から背後に廻ると、成程路は若い檜や杉の中に通じてゐる。少し行くと林が途切れて、左には本流が細く流れてゐる。炭燒の入らない故か路は大分荒廢して、河床を傳つたり虎杖の枯枝を捉へて匍上る所もある。澤がまた二岐するが敎へられた通り今度は右に入る。少し行くとまた二つに岐れて、其處には二尺許の杭に「右氷川近道」と書いたのが立て居る。その「近道」といふのがこれで三度目なのだからちと恐入る。路が益々荒廢して來るだけに山らしい感じも出て、石の間から顔を出した蕗の薹を踏にじりながら、漸々傾斜の益して來る谷を上る。それでも足元には水が流れて居るので、喉の乾きをとめるには極めて好都合である。一と息入れ乍ら後を振返ると、山と山との間から南に茅丸と連行峰の頭が見える。散々荒寥たる谷を上つてから急に杉の植林中に入る。日陰だけに雪が大分殘つてゐるのと、路があまり屈曲せずに急な斜面を上るので寔に滑り易い。雪を口に含みながらやつとのことで杉林を出抜けると雜木のある茅戸で、足を滑らしてつかまらうとすると、赤鬼の持てゐる金棒の樣なハリギリの太い奴がヌッと立てゐる。それでもあへぎ〳〵海拔約一千米突の大田和の頂上に匍上つたのは零時三十分であつた。

雪の少い所へ外套を敷いて休憩する。傍には一昨年の十二月十五日の日附のある生々しい標木があつて、墨黒々と水源涵養保安林と記してある。北の方は雜木の小枝の間から秩父の山々が途切れ〳〵に見えるだけであるが、南方は打開けてゐる爲に眺望は甚よい。直眼の前には雨秋川に挾まれた淺間尾根が臥蠶の如く横はつて、其の彼方には熊倉山から陣場ケ峰迄が青い空にクッキリと浮出してゐる。近く右手には御前山から東南に派出す

る中尾根が雄大にのさばり出して、肩から上には殘雪が大分ある。西を見ると一一六四米突の鞘口山が聳立つて、其の右には肩肘を張た御前山の北裏が望まれる。東は直に上りになつて、其の上は天地山の割岩になるのだが、明な路が霜がれたスヽキの間を走つてゐる。此處から大澤川について小留浦に下る路には、五六寸もある雪がベットリと木の下に積つて、其の上には幽に人の踏んだ跡がある。自分は眺望を擅にしながら第二回の中食をやる、水はないが雪は食放題。正面に二十三時間前に登つた三國山を見ると、其の笠松がひどく懐しくなる。

梅澤君の「御前山塊」なる記文にも詳說してあるし、又五萬分の五日市號を見れば直わかることだが、重複を顧ず此の邊の地理を一とわたり說いて置くのも無用ではあるまい。大岳山から西北に引いた山脈と、御前山から東北に派出した脈とは、終に略々平行して多摩川に向つて低下する。大岳からの尾根の中程には高距一千百六十米突を超える中岩山があり（これは東京からもよく見える。大體の形狀は本誌第二年第一號八七頁のスケッチを見て戴きたい）、それから多少波狀になりながら漸々低下して天地山の割岩（地圖の所謂鋸山）を經て二岐し、主脈は約七百米突の鋸山から終に登計の愛宕山に至つて盡きることになる。御前からの脈は一一六四米突の鞘口山といふ大瘤を起し、此處で二岐して主脈は江戸小屋山（又本谷入山）を經て九龍山（九四二米突）となり、支脈は東して天地に連絡し、そこで大岳御前の兩山を結付けることになる（「山岳」第十一年第一號所載秩父通志一一頁參照）此の最低地を大田和といふことは郡村誌や武藏通志にあることだが、土地の人々には寧天地（テンヂ）と言た方が通りがよい。（嗣出）（武田久吉）

○一二山湖の名稱

一菅沼　本誌第十一年第二號四二頁に、嘉永二年（一八四九年）發行の逸見豐次郎著『增訂大日本輿地全圖』を見ると、上州利根郡山中にある菅沼の邊と思はれる所に、一湖を描いてタウラ湖とか呼んであるのが、朧氣に見えると認めて置いた。其

次號一七二頁に再度此の沼の名稱について記したこともあるが、其の當時『山岳』第五年以下の分は、盡く他の書物と共に一時英國に殘して來た爲に、鳥渡參照することが爲難かつたのと、尙自分の頭の中には、關口泰氏が本誌第七年第一號一〇二頁に、此沼に關して記されたことの記憶が浮ばなかつたのとで、遂に同氏の記文を引用して、己れの誤を訂すことが出來なかつたのは殘念である。關口氏によると、上野の古い地圖には之をツウラ沼と書いてあり、『上野國志』には津嬬良沼として、片品川の源、白根の峯、二十五淺ヶ岳の下とあるそうである。之を讀んでから彼の『增訂大日本輿地全圖』を見ると、タウラではなくて、寧ろツウラと讀むことが出來る。關口氏の引用された「地圖」といふのが、如何なるもので、且何年頃の出版物であるか記してないから不明であるが、『上野國志』は安永三年の著だといふから（『山岳』第七年第二號一〇〇頁）、德川十代將軍家治の治世で、西曆一七七四年に當る、丁度陸奥の岩木山を初めとして、草津白根や淺間山が大噴火をしたり、東北地方が大凶作であつた天明三年の十年前で、又有名な水戸の長久保赤水の『新刻日本輿地路程全圖』の出版に先立つこと四年であるから、此の沼の名が記錄されたとしては隨分古い方である。その以後のものでは、時代は遙に新しくなるが、天保十四年（西曆一八四三年）に發兌したと考へられる處の秋山永年著『富士見十三州輿地全圖』（『山岳』第七年第三號一二八頁に、高頭氏は天保壬寅の出版だと言はれてあるが、自分所持の品には、「天保癸卯春王月晴潭舟橋徵撰幷書」といふ引が、其の前年の日附の引（船越守愚撰とある）と共にあるから、之を十四年の出版と考へる次第である。此圖には『富士見十三州輿地全圖』と記してあるが、表紙の上と桐材で製つた上箱の蓋とには、『富士見十三州輿地之全圖』とある。）を見ると、これにも座禪山の西に一湖を描いて、明にツウラ沼と記してある。そして此沼から出る水は、西流して東小川を經て片品川に合流することになつてゐる。この次に來るのは前に引用した、嘉永二年版の『增訂大日本輿地全圖』である。それから六年を經て出版さ

れた涼松義知（宗旦）の『利根川圖志』を見ると（自分の藏書は第六卷で終つて居て、記事もこれで全部を盡して居る樣であるが、出版書肆の名だの發兌の年月は缺けて居るから、自序の末に「安政二年乙卯季春」とあるによつて、此年即ち西曆一八五五年と假定する）、生憎下流の方に重きを置いて、自分等が興味を持つ上流は閑却されてあるので、記事は少しもなく、卷頭の「利根川全圖」にも源流の方は大分省略してあるが、支流の一なる片科川（カタシナ）の所に、「片科川は……東小川に至て白根山座禪山下ウツラ沼の下流を幷せ……」として、ツウラを誤てウツラと書いてある。明治になつてから出版された地圖の內で、此邊を記すものとして自分の手元にある一番古いものでは、十年に出版された、宮脇通赫の『大日本分國輿地全圖』であるが、生憎と上野の部が缺けてゐるので、何とも申し難い。次は十三年十月に出版された、酒井捨彥編輯の『改正銅鐫上野國全圖』であるが、これにも以上引用した諸圖の樣に、沼は只一つしか描いてないが、一つ興味ある點は、これに「菅沼」と記してツウラ沼などいふ名は全くないことである。して見ると菅沼といふ名は少くも此時代から知られてゐたことが分るのである。此圖では沼から流出する水は、ニカマタ澤を合せ、東小川の稍下で片品川に注いで居る。

湖沼とは直接關係はないことだが、此圖を見ると、陸測五萬に笠科川とあるものに「片品川源」とあり、五萬に片品川とある太い方のものを「早セ川」と呼んである（笠科山から流れ出るものを、片品川の本流だとは、自分も嘗て戶倉で雇つた人夫から聞いたことで（『山岳』第一年第一號一三一頁）あるが、五萬を見れば勿論他の方のが本流としか思はれない。

又前に引用した諸圖になくて、此圖で初めて見られることは、東小川から日光に通ずる金精峠の路である。此路は天保八年（西曆一八三七年）に出版された『日光山志』にも載つてゐる位であるから、可成り前から存在したものであらうが、『日光山志』にも「常に人の通行なし」とある程で、行人甚稀なものであつたと考へられる。是等の點に連

關して推測すると、小川に沿うて山に分け入つた上州人が、菅沼を發見する迄には隨分の年數を經たことではあるまいか。最初大尻沼や丸沼に達して、八丁瀑を仰ぎ見た時に、それから三百米も上に、更に一湖があらうとは、よも想像しなかつたことであらう。彼の『上野國志』編著の爲め、その材料が蒐められた頃に、菅沼が里人一汎に知られて居たかどうか全く不明であるから、只臆測を逞うするの外はないが、假に大尻沼だけか、左なくも大尻沼と丸沼とが、その地理上の關係も明でなく、知られた居たに過ぎないとすると、夫を漠然丸味のあるといふ點から（測量部發行の輯製二十萬の日光圖幅には、流石に「笈沼」は略橢圓形に描いてあるが、大尻沼は丸沼よりも多く丸味を以て描かれて居る。又それよりも信用し得可き筈の、地質調査所の日光圖幅には、尙更事實に遠ざかつた形で出てゐる。）ツブラ沼（即ち圓沼）とでもなづけたのではあるまいか、そしてそれが訛傳してツウラと變じたのだとすると說明には都合が好い。自分は此の邊の山地へ入るには常に日光方面からするので、最初に目につく菅沼に重きを置く惡い癖が出るが、是等の湖沼發見の正當な經路から考へたならば、どうしても大尻沼が最初に知られ、最初に命名されたものでなくてはなるまいと思ふ。左すれば津婦良沼又はツウラ沼なる名は、語原や意味やは別としても、大尻沼か又は大尻沼及丸沼の總稱と考へる方が、是等三湖の總名とすることよりも更に合理的と思はれる。只一つ斷定し難いのは、明治十三年出版の『上野國全圖』に現はれた「菅沼」なる名稱で、これは三湖の中の何れに充てられたものか推測する材料の乏しいのに苦しむ次第である。明治の中年以前迄は可なり信用す可き地圖でも湖を三つ描かずに、只一つを現はすに止めてある。現に明治十四年四月群馬縣（廳）で出版した『上野國里程一覽』といふ圖にも、只一つの湖を描いてある。此圖は里程を主としたもので、地名は村里の外は殆んど記入してないのは遺憾である。尙是等の疑問を解決するには、參謀本部に屬する陸地測量部の前身である處の、內務省地理局地誌科から出版した『大日本國全圖』（切圖と全

圖と二樣になつて發行されたもので、切圖の方が先で、全圖は夫を纏めたものらしい）を參照したならば、多少の得る處があるかも知れないが、今手元には此の部が生憎缺けて居るし、圖書館へ行つてこんな大きな圖を机上に廣げるのは他人の迷惑となるだらうから遠慮するとして、何方か御所持の方に見て頂くことにする。津輕良又はツウラの名は現今では全く通用されないと考へる。近年出版された圖書中此の名の用ひてあるものは自分は全く知らないし、土地の人も丸沼とか大尻沼の名を呼んでゐるし、若し是等兩湖を總稱する場合には、關口氏も書いて居られる通り（第七年第一號九八頁）、瓢箪沼といふ名が通つて居る。

二尾瀨沼　手元に材料は少いが、前のものとはあまり離れてもゐないもの故鳥渡、事の序を以て數種の地圖を漁つて見た。先程も引合に出した『富士見十三州輿地全圖』には、尾瀨沼と記し、側に尾瀨沼中央國界也、尾瀨二三里ノ平地有　宗任貞任ノ古跡也」とある。此圖はこの以北を全く含まないものであるから、湖の水の下流は極小部分に止まつてゐる。所藏の古圖中、年代の明記してあるものでは、嘉永二年の『大日本輿地全圖』であるが、それよりも前に出版されたかと考へられるものが、尙他に二つある。其一は橋本玉蘭齋謙の著である『陸奥出羽國郡行程全圖附越後半國』といふもので、これには「小セスマ」（スマはヌマの誤刻であらう）といふ瓢箪形の湖があつて、その兩方から水が流出し、東の方から出る水は、大桃を經て流れ、西の方の湖から出る水は淺草、田子倉を經て、終に只見で兩者合流することになつて居る。よつて前者は檜枝岐川が尾瀨沼から出るものと臆測して描いたものらしく、後者は實際の只見川を記したものと思はれる。そして、此の只見川の流れ出す湖の側に「境目沼」と記してある。其二は「東台麓忍ケ岳市隱　三木光齊書圖」と小引に認めてあるもので、表紙には『奥羽行程掌中便覽　全』とあり、圖には『大日本國分之內　岩代　磐城　陸前　陸中　陸奥　羽前後全圖』とある。出版者の名は「人形町通松島町　東都書林　玉養堂　若林嘉兵衞　大坂屋鉾太郎　板」とある。これも前に引用した圖に

ある様に、沼は二つに分れてゐるが、くびれてゐる程度を通越して二つ別の湖となり、只其の各から流出する川によつてつながつてゐる。東の方のものは無名で、水は大桃の方に流れ、他は「小セ」と記し尚傍に境目沼とあるが、此方の水は兩端から流出し、東の方のは前の無名の湖の水と合し、兩端から出る水は田子倉に流れ、此處て兩者合一することになる。次には例の『增訂大日本輿地全圖』であるが、これには尾瀨は略圓形の一湖をなしてゐるが無名である。水は西端から二流出で、一は檜枝股、大桃を經、他は田子倉を經、終に合一する。前に引用した『利根川圖志』では、湖域外であるので多くを望むのは無理であるが、兎に角これには「尾瀨沼、中央國界」とある。明治初年に出版されたものでは、二年に官許となり、四年の三月開板した、橋本玉蘭齋謙の『大日本四神全圖』である（此圖の小引に、「六十四老夫　橋本玉蘭齋　謙誌並圖製」とある）。これには「小セ沼」と記し、排水道は一本で沼の西端から發して居る。最後に引用すべきのは、先にも揭げた『上野國全圖』で、これには「尾瀨沼」とある。要するに關口氏の考證と一致を見る譯で（『山岳』第七年第一號一〇三頁）、上州側で製した圖には尾瀨とあり、會津方面を主とした圖には小瀨とある。

三田澤湖　羽後の田澤湖は我國最深の湖として有名なものであるが、此の名が載つて居る地圖の中、古い處では先づ明治九年六月一日に出版した、關口備正編修の『府縣改正　大日本全圖』であらうか。夫よりも五年前に開板になつた『大日本四神全圖』（前出）では、之を呼ぶに「八郎小潟」の名を以てして、今いふ八郎潟をば「大方八郎潟」としてある。明治元年頃に出版されたと考へられる『大日本全圖之內　出羽全圖』を見ると（此圖には編著者の姓名も、出版年月もない、全部揃つて居れば分るのかも知れないが、出羽之圖だけでは之を知るに由もない。只嶺林藏版といふ大きな朱印が捺してあるだけである。圖は舊式なもので、加之大名の領地や石高をも記入してあるが、中に東京からの里程が記してある以上、明治前のものでないことは明であると同時に、表紙に最初の所有

者の姓と「明治紀之歳次戊辰秋九月」と墨黒々と書いてあるを以て見ると、夫以後でないことが推定出來やう)、田澤湖には「八郎潟」とあり、八郎潟には「大戸八郎潟」と記してある。明治以前のものでは、前にも引用した『奥羽行程掌中便覽』には、田澤湖には「八郎潟」とあり、八郎潟には「大方八郎潟」とあつて、前記二圖の一部分づゝに同様なのである。もつと古い處では、前にも屢々引用した逸見豊次郎の『増訂大日本輿地全圖』(嘉永二年)である。が、これには一方は「八郎潟」で、一方は「大方八郎潟」とある。これと前後して出版されたと思はれる『陸奥出羽國郡行程全圖』には、田澤湖は「八郎小潟」、八郎潟は「八郎大潟」と明記してある。是等の圖を見ると、田澤湖も八郎潟も、明治の初年頃迄は共に八郎潟なる名を持て居て、只、大小によつて區別されてあつたことは疑ふの餘地はないようである。そして其の間に何か傳説的關係でもありはしまいかと想像するが、これ以上目下詮鑿する時間がないので、此問題は專門家の手に委ねることにする。

以上の記事は、特に湖名を詮議する目的を以て圖書を渉獵して得た譯ではなくて、他の目的で古圖を調べた際に見當たことを、何かの參考にもと書付けたのみであるから、詮鑿不充分の廉を以て御小言を頂戴することだけは、平に御免を蒙ります。

(武田久吉)

○コンバの意義

本誌第七年第一號二八頁に、鵜殿氏がオホコンバに大木場の文字を當てられたのを見て、英國から通信の一節に、コンバとは小場の意かと書いて送つたのが、第七年第三號一七八頁に載つて居る。其の後鵜殿氏は第八年二號一八二頁で、類似の地點を信州ではコバと稱することから推して、恐らく工場を約めてコバともいひ、之を甲州でコンバと稱するのであらう、從つてオホコンバは大工場と解すれば、よく實情を示し得らるゝだらうと第二説を提供されて居る。しかし鵜殿氏の第二説も、自分の想像説も、謂はゞ當て推量なので、何れも確な根據や理由があるのではない。

偖大正八年の夏自分は東山梨の方に旅行して、またも例のコンバと名のつく地點に出會つたので、里人について其の意味を尋ねた處が、自分の憶測も鵜殿氏の第二說も共に落第で、實際は鵜殿氏が直覺的に宛てられた木場が正當なものであると判明した。今土人の說く處を紹介すると、山中で木材を截る時、之を運び出すにしろ、直に製材するにしろ、一端適當な平坦地に引出して、此處で相當な加工を施す必要がある、然るに左樣な平坦地はそうザラにあるものではないので、伐木地に多少の變動があつても、木材を引出してからは大抵一定の地に持來つて仕事する、そしてかゝる所をば何々木場（コンバ）と何づくるのだといふ。それが可なり廣い地であれば、大木場と名がつくだらうし、略三角形であれば、三角木場の名がある次第である。

これでコンバの意義は大體明瞭となつて、吾々は木場の文字を平然用ひ得る譯である。モ一つ序を以て訂正して置き度いのは、第七年第三號一七八夏に、「ビワのコンバ」なる名が出て居るが、あれは琵琶窪の木場を以て正しとするもので、琵琶の木場と記したのは誤りである。其の位置は、竹宇の前宮から一時間半も上つた所で、オホカメノキ、ミヅナラ、ヤマハンノキ、ブナ、モミヂ、イモノキ、シロヤシホ、アヲタゴ、ヤマウルシ、リヤウブ、ヒトツバカヘデ、サハシバ等が生ずる闊葉喬木帶中で、十三四年前には此處から右に下ると楠鑛山といふに通ずる小徑があつた。駒ヶ岳路は左を取て、岩石の崩解した崖を過ぎり、小坂を上ると笹の平にかゝることになる。（武田）

○四阿山上州方面の登路

附　旅舍の事

信州小縣郡同上高井郡及上州吾妻（アガツマ）郡とに跨がる四阿山（アヅマヤ）一名吾妻山の登路に關しては、已に本誌第六年第二號四一頁にも記してある如く、上州方面よりは嬬戀村田代より鳥居峠に出で（其の間五十丁許）、此處より大略國境に沿うて上るものなるが（一丁毎に石碑ありて迷ふ患なしと聞く）、此外尙田代より直接同山の東南面に上り、終に鳥居峠

よりの路に合するものもありて、地理に通ぜる嚮導者を得ばこれによること不可能にあらざるが如し。友人某君は干俣（ホシマタ）より登ることの可能なる由を聞込まれ、昨夏之を計畫されたりしも遂に天候其の他の爲に遂行せられざりきといふ。予は昨年初秋の頃上州萬座溫泉にて聞く處によれば、秋期干俣の婦女子等は、寒露梅（即ちコケモモの果實）採集の爲め、よく四阿山に上り、未だ日高くして歸る者あり、故に同地より四阿山に登るは容易なる可しと。乃ち萬座より南に山徑を下ること四里にして干俣に到り、登路の有無を質したるに、同地より寒露梅採取の爲め上るは山頂に非ずして山腹に過ぎず、又山頂に達す可き路は殆んど之なく、加之同村より四阿山に登りたる事は、明治二十五年雨乞の爲に村民一同新に路を拓きて上りたる以來、絶えて無之由なれば、同村よりの登山は殆んど見込なきものゝ如し。勿論晩春雪消えて間もなき頃、枯草を踏躙り、根曲竹を推分けて上らば或は不可能には非ざらんも、山頂附近の森林は容易に通過し得るや否や不明なり。尙これに連關して記すも無用ならぬことゝ思はるゝは、干俣より峰坂をこえて信州米子（ヨナゴ）不動に達する樵路なり。此路は嘗て峰坂峠道として開鑿されしことありしも、後廢道に歸し、今は只稀に通行する者あるのみなれば、荒廢甚しく、殊に根曲竹及雜草繁茂したれば、夏日の通行は不少困難なりといふ。路は干俣と其の北の井戸尻との中間より西北に折れ、牡牛牧場に到り、その墻に沿うて一直線に登るものにして、上部は舊鐵索路の痕跡を辿るものなるが故に、甚しく急峻なりといふ。恐らくは地圖に示す浦倉山の南方なる二、一〇〇米の鞍部に上りつくものならんか。嶺上より米子に下るには、硫黄會社の薪切の路によるものにて、迷路なしと聞けど眞僞は知らず。

最後に記し置く可きは干俣、田代附近の旅舍なり。此邊にて最繁華なるは長野街道の一要驛なる大笹にして、郵便局ありて、干俣、田代、鹿澤を初め、萬座等の郵便物の集配を司り、旅舍も兩三軒有之といふ。次は田代にして現今旅舍二軒あり、「山十」を良とし清水屋（？）之に次ぐと聞けど、養

蠶時には「山十」は營業を中止すること往々あり。干俣には山下(ゲ)龜十郎なる者ありて、本年より營業を開始したるも、これも養蠶時には蠶の食物以外何等の貯なければ、宿泊は愚か飲食物をも得ること絶對に不可能なり。嬬戀村は現今主として農業及び養蠶によりて生計をなし、且牛馬を住宅に飼養するが故に、一般に不潔甚しくして蠅虻の類多く、又養蠶時には是等の牛馬を山野の所謂牧場に放養するが故に、到る處に蠅虻の類夥しく、爲に夏秋の候の跋涉をして極めて不快ならしむ。尚同村西南隅に位置する山岳登攀の根據地として、從來鹿澤溫泉を第一に推したるが、一昨々年同溫泉全燒後未だ恢復の運に至らず、又溫泉旅舍の大部分は北方の山麓に移轉し、目下田代を距る約十五丁の地に新築中なり、只紅葉館のみは舊地に殘留するも、宿泊滯在に堪ふるの設備を全うするは少くも一兩年後なる可く、現在の狀態にては之を宿泊地として考慮に入るゝ能はざるものとす。

事態此の如きが故に、若し鳥居峠より登山せんとする場合にも、特に田代に赴くの不便を避け、信州長村(オサ)の大日向を以て出發點とせば、登山に要する時間及勞力に於ては大差なきを得んか。

（武田）

○万田山卑考

陸地測量部發行の輯製二十萬分一『日光』圖幅（こゝに引用する處のものは明治二十年輯製同二十七年修正同三十一年再修）を見ると、兩毛國境の北部で、白根山や金精峠（同圖の金盛峠）の北に當つて、「万田山」といふ一座の山が記してある。しかし此名は明治二十一年に印行された地質調査所の『日光圖幅』や、測量部實測の五萬分一の地形圖にも載て居ず、又高頭氏の『日本山嶽志』にも掲げてないから、實際存在しない山岳かとも思はれるし、又それと同時に何か他の山の異稱でゞもあらうかとも考へられたので、二三の古圖や書物を引出して摸索して見た。何分臆測圖同樣な地圖を比較して、山岳の位置や名稱を考究する仕事であるから、餘り的確な結論に到著し得ない憾はあるが、結果は先づ次の樣なものである。

「万田山」といふ山は恐らく存在しないことゝ思はれる。此名は多分ある山の名稱の一部分なのであろう。

右の如き結論に到達した經路は左の如きものである。即ち『富士見十三州輿地全圖』(天保十四年)を見ると、此の邊の所で而も兩毛の境上に、「東間田山」、「中眞田山」及び「北万田山」といふ三座がある。是等の山岳は『增訂大日本輿地全圖』(嘉永二年)には、夫々「ヒガシマ田山」、「中マ田山」及び「北万田山」と出て居るし、『利根川圖志』(安政二年)にも「東間田山」、「中眞田山」、及び「北万田山」と記してある。處が、『明治改正大日本輿地全圖』(明治四年)といふ小形の地圖を見ると上記三山の何れかは知らないが、「眞田山」といふのが只一つ載つてゐる。これによつて考へると、「万田」も「眞田」も共にマタと讀む可きもので、且つ上記三山の何れかに該當するものであらう、然し勿論單に文字に拘泥して、「万田山」は、「北万田山」、「眞田山」は「中眞田山」の略稱とすることは、あまりに附會に過ぎると稽へる。

偖然らば、「東間田山」、「中眞田山」、及び「北万田山」といふ三つの山岳は果して此邊に存在するものかどうかといふ疑問を、曲りなりにでも何とか解決して見たいのである。處が生憎と自分は上毛東北隅の山地に深入りした經驗も持たず、又あの邊の地理に精通した人に出會つたこともないので、推測するとしても見當がつきにくいが、陸測五萬の『燧岳』圖幅を見ると、兩毛及び岩代三國界の黑岩山の西面から流れ出す片品川の上流に、「中ノ岐澤」といふ名がある。此澤は只に此圖のみでなく、地質調査所の二十萬分一『日光圖幅』にも見らるゝが、此場合では三國の界に座する山は、輯製二十萬と同じく赤安山で、黑岩山は其の東に、岩野兩州の境に描かれてある。嘗て此の附近を歩いた時、案內として雇傭した獵師は、三國界の山を三國山と呼び、且つ之を赤安山と異なる樣に言て居たと記憶するが、『會津風土記』(寬文六年)には三國の界に赤安山を置いてある。何れにせよ、片品川の上流に中ノ岐澤なるものがあることは爭ふ可からざることで、この川の源に當つて「中眞田

山」が座す可きは至當のことゝ考へられる。勿論此名が只一座の山を指すものか、或は廣い意味で用ひられたものか、自分は斷案を下すことが出來ないのは遺憾である。次に、然らば東岐澤及び北岐澤なるものが、片品川の上流にあるかどうかを考へて見ると、古圖では山岳には前記の如き名のあるものが記されてはあるが、溪流は極主なるものに止めてあるから、中岐、北岐、東岐の三流の關係は愚か、かゝる名さへも見當らないのである。故に是等の流を陸測五萬の地形圖上に物色して見ると、「中ノ岐澤」と記してある文字の「澤」字の稍右に當て北から此澤に注ぐ一流がある。これが恐らくは北岐澤で、從つて其の奥に「北万田山」があるのであらう。東岐澤は何れかといふと、恐らくは地圖上に記された鬼怒沼山や毘沙門山あたりから流出す澤で、これが三國界から起る處の中ノ岐澤に合し、更に其下流で北岐澤に合する譯で、地形圖にある樣に、全體の澤が中ノ岐澤と呼ばれるのではあるまいと愚考する。

元來兩毛岩三國界附近の山岳は、ドングリの背較べと謂た工合で、似寄つた峯が、其處にも此處にも顔を出して居る上、山其者は針葉樹の密林か深い根曲竹で蔽はれ、高山ではなくて皆深山であるが爲に、山頂には特徴が少なく又眺望が絶無なる場合が多い、夫故同一の峯に種々の名が與へられたり、又は名はあつても其峰の位置が不明か又は言ふ人によつて異る場合が少くなからうと想像する。されば此邊の地理や地名の研究はどうしても其土地に行てやらなければ十分に出來難い譯であるから、地名の省略を以て有名な陸測五萬の地圖を對手にして、此問題に餘り深入りすることは、差當り中止することにしよう。

序ながら言て置きたいのは、五萬の『燧岳』號に、片品川の一支流のネバ澤を「根羽澤」と記してあるが、あれは類例から推しても、粘澤でなくてはなるまいと考へる。實際此澤の上流には粘土質の岩石のあること、拙文『尾瀬記行』(『山岳』第一年第一號所載)に記した通りである。あの時吾々は五萬の地圖にある四郎嶽の東肩にある鞍部あたりを越えたのだらうと考へるが、深い根曲竹の藪の中

を通つたのであるから、何處を歩いたかは地圖を手にしながら歩いても正確にわかるものではない。

（武田）

○伊豆の大室山

湘南の海岸に立つて、晴天の日に、伊豆半島を望むと、天城山脈の盟主伴次郎伴三郎の裾がゆるく東にひいて、今や黒潮の餘波に洗ひ去られんとする所に、ポツンと一つ大皷鋲にしてはチト大きすぎる小室山が、何やら意味あり氣に控へる其の右に、是はまた摺鉢を伏せたと形容してもよさそうな大室山が、一千九百十四尺といふ標高には似もやらず、關東平原を目の下に見て屹立する筑波には及びもないが、もの〳〵しげに立たずまふ有樣、如何にも異彩を放つて見える。

單式火山の模形として寔に工合のよい圓錐體故何れの方面から見ても大體八面玲瓏的であるが、頂上の噴火口が少し斜に東北に向つて開いた爲めに、東北壁は西南の壁よりも彼是百二十尺も低くなつて居るのは、シンメトリーを少し害ふ嫌はあるが、最高點からの眺望をさへぎらない殊功は捨て難い。其外には東北面の中腹以下に瘤があつて、而も其の頭には眞黒な巨巖が、鬼が石投でもした跡の樣にゴロ〳〵して居る處は、下田街道の先原から眺めると、何やら恐ろし氣に見えるが、兎に角麓から頂上まで一樣に、スヽキを主とした雜草で蔽はれて居る、おとなしい山である。

伊東の一部からは頭しか見えないが、此所から山麓迄は最早二里に餘ること僅であるから、大室登山の根據地としては、伊東を第一に推すべく、第二は伊東の南三里餘の八幡野であるが、山頂まで一里許りといふ特點はあるが、此所には溫泉といふ天惠はない、但し旅舍は若松屋といふ心持のよい家がある。第三は大室山の西南麓にある池といふ部落で、此所からは最高點まで一時間を出でずして達することが出來るが、旅舍は恐らく存在しないと思はれる。高頭兄の日本山岳志には「北麓字十足より登る」としてあるが、十足の部落は宿泊には適せぬ事と考へる。（尙序ながら言つて置くが、山岳志の《摘譯》には「熱海より登るには全

一日を要す」とあるが、自分の持つて居るハンドブック、フォーア、ジャパン第八版には「伊東より登るには一日を要す」とある。熱海からでは伊東へ往復するにさへ一日はかゝるだらう。伊東から大室山へは半日では一寸六かしいが、一日仕事としては樂な運動で、全一日を要することはない）。

大室山は可なり正しい圓錐形をなして居るが爲め、一に伊豆不二と呼ぶそうであるが、其の關係からか、淺間神社を祀つてある。祭禮は六月八日とも十五日とも聞いたが、新暦と教へて呉れた人もあり、舊暦だと言つた人もあるから、毎年登山でもして居る人に出逢はなかつた自分は、殘念ながら正確なことを知るを得なかつた。社は小室村、對島村の總鎭守だといふが、山に一番近い池で管理して居るらしい。

豫てから大室山の整然たる山容を望んで、一種のアトラクションを感じて居たのと、博物之友第六十四號に大橋良一君が掲げられた「大室山と小室山」なる記事に少なからぬ感興を唆られて居た事は、一昨々秋伊豆半島を歷遊した折、遂に其の頂に立つて眺望を恣にするを得せしめる動機となつた。

伊東に滯在して居た自分が、陸地測量部發行の五萬分之一地形圖「玖須美」を懷にし、辨當をリュックサックの底におし込んで、宿を出たのは十一月の下旬二十五日の事であつた。東京出發の直二三日前に求めた地圖ではあるが、生憎と明治十九年測圖同二十九年第一回修正、同三十年製版明治三十一年十二月二十日印刷同十二月二十五日發行といふ古めかしいもので、これが人間なら去年の春が徵兵檢査といふ代物故、開墾が盛で道路の開鑿や變更の頻に行はれる伊豆の旅には、案内としては無論不合格であるが、相談相手としても甚しく心細いものであつた。それでも玖須美の町を過ぎ、だら〳〵坂を上つて下田街道へ出るまではさしたる困難もなく、祐隆以來伊東家累代の第宅であつたといふ眺望の廣い平地に出た。今は畑地で近年伊東土産の一に數へられるオランダイチゴが培養してある。道は畠の間をウネ〳〵と概して南へ向つて通じて居る。やがて畠を離れ、千頭坂と

かいふ赤土の急な坂にかゝると、霜どけにすべる路を旅裝束の老若が見るからにヒヤ〳〵する馬力に前後して上つて行く。

伊東から半里もあらうか、川奈路が下田街道から左に岐れる所に、十數株の老松に對して茶店がある。其の裏を流れる小溝が名高い逆川で、此の茶店こそは其の昔賴朝が伊東に流寓して居た頃、八重姫に始めて遭遇した所とかで、名物松の露戀の甘酒を販いで居るが、主婦の無愛想なること小河内の鶴屋のそれなどは到底及ばぬ程なので、折角の風流(?)な甘酒に渴いた喉を潤さうとする人も稀な樣である。尙此の家に日蓮上人の曼陀羅を藏して居るが、古色は掬す可きも眞僞は自分の知る處ではない。

逆川から二十丁程も行くと、荻及び十足へ岐れる細徑がある。此の細徑によつて西南に向ふと、一里許りで十足の部落に出るが、其の途中吉田村の大池の西岸を過るので、景色もよいから一ト息入れるには適當な地點と思はれる。道路は池の水面から數十尺も高い崖の上を通るから、池へは細い徑を傳うて下らねばならぬが、岸に近く小島數個あつて樹木を生じ、其の一には辨天の小祠さへ建立してある。池は中々の廣さがあり、且景も捨て難いから、せめて沿岸に路をつけるか舟の一二艘もあらば、伊東から半日の遊山には恰好の地であるが、只吉田村の用水として山間に捨てゝ顧みないのは惜い樣な氣がする。

大池を訪ふのも此の日の目的の一つであつたので、此所で大分時間を費し、辨當を平らげてから出發したのは一時をすぎて居た。大池の西岸を廻つてから暫くは左に池水を下瞰しながら、雜樹の間を石のゴロ〳〵する路をつまさき登りに上つてから、やがて十足をさしてダラ〳〵降りに下つて行くと、二十分許りで、荻から十足を經て池に出る本道に會し、路も無理ながら荷車の通る位になる。十足を過ぎて暫くは畠の間を通るが、間もなく左右雜木の生ずる路を進むことになると、進むに從つて傾斜が加はり、赤土の坂はともすると辷り易い。此の邊の路は幸にして地圖と大差がないので、例の古地圖も折々は役に立つこともある。

やがて木立を出はなれて左方目をさへぎるものがなくなると、大室山が眼前に大章となつてつっ立つて居る。俗にいふ坊主山故敢て登路によるまでもなく、何れの方面からも上下出來るが、地圖通りの路を登つて見たいと思つた自分は、此の街道が池の方へ下りかゝつた所で、大室山の眞西に當つて登り口を見出した。四周の景には似もやらず巨大な闊葉常綠樹などがこんもりと立つて、木製の一の鳥居とも呼ぶ可きものさへ存在するのは嬉しかつた。然し木立は二三十歩にして盡きて、身は忽ちスヽキの一面に生じて居る所に出る。最初の内は登路が地圖にある通り眞直について居て、少しの屈曲もない。暫く上ると二の鳥居とでも言ふのであらうか、石の鳥居の破壞したものが横たはつて居て、何やら悲慘の感を抱かせる。霜に枯れたスヽキに交つてサルトリイバラが兎角に足にからみつく間を、小徑は今や多少屈曲しつゝ上るのであるが、リンダウやヤマラッキャウの紫花がいとゞ哀れに見える。漸く上るとマツムシサウも大分目につくが、中には花の色が常のものより濃く、栽培して見るに堪ゆると思はるゝものもある。中腹以上にはよく庭園に植ゑて花を賞するヒアフギも自生して居て、果實は破れて漆黑色の種を吐いて居る。

一の鳥居から十五分間許りで一二本のオホヤシヤブシと、マツの枯木のある山頂の一角に着いたが、一寸した平地に何であらうか五基の石佛が安置してある。信仰で登山する人達は賽の河原とか何とか名を付て居るのだらうが、自分は無意味に此所を通過して、東南を指して舊火口の緣を上ると五分時で、絶頂三角標石に着いた。荷物を肩からはづして一ト息入れる。先づ目に入るのは東南の洋上に浮ぶ大島で、折から西日を受けて森は黑く岩は金色に輝いて居る、大島につゞいて南に新島、利島……と七島の手近なものが、波の彼方に靄に包まれて立つ態の面白さ。南を見れば伴次郎原や稻取の岬が半島の輪廓を限り、それにつゞいて眸を西に廻らせば伴次郎岳や遠笠山の連山がおひかぶさる樣に見える、その暗い陰に矢筈山の奇峰が、一ト跨ぎで達せられさうに近い。西北柏峠の

彼方には、富嶽が半身以上を乘出して、淺いながら膚には雪を著けて居る。北には伊東の町の一部や、今朝訪ふた吉田の大池が鏡の樣に光つて見える。西南麓には池の小邑と、其の名の起つた池が今は整然たる田園に化して、予の訪問の不必要なのを示して居る。

山頂の大觀を恣にした自分は、三角標點の所を出發して東に噴火口壁を廻り初めた。最高點からダラ〳〵下りに小徑を辿ると、丁度火口壁の東南隅に當る所に、今度は九基の石佛が列べてある。此所をすぎて歩を北に進めると、晩秋の冷たい風が遠慮なく襲うて來るが、平常でも風當りが強いと見えて、六百米突にも足りない此の山頂で、草は宛然高山の頂に於けるが如く、何れも甚しく短矮である。路を左にとつて、火口の内壁に下ると風の劇しく吹あてない所には、オホヤシャブシの巨木が生じ、其の下にはサルトリイバラの蔓が長く延びて、用もないのに衣服にからみつく。

火口の内部の東北壁に、オホヤシャブシの老樹や、岩石の多少露出して居る箇所があつて、此所に淺間神社が鎭座するのである。社は石造で、其の側に六疊敷程の籠屋がある處を以て見ると、參籠者の數も僅少ではないらしい。火口底を窺ふと所々に巨石の散在する外一面にスヽキなどの草が繁り、何等の奇も怪も興もないらしい。殊に此の附近何處も水が湧出しそうな樣子のないのは、失望を禁ずることは出來ない、然し伊東から麥酒でも携帶して、此の山頂に午睡を貪つたなら、可なり愉快であらうと思はれる。

神社に餘り執着のない自分は、再び火口壁の緣に上つて、風陰のスヽキの間に體を横へて、枯野の景に眺め入つた。身のまはりにはスヽキ、ヤハズハギ、ヲトコヨモギ、ヲカヲグルマ、マツムシサウ、ノアザミ、オトギリサウ、ミツバノツチグリ、リウナウギク、タムラサウ、カウゾリナ、スミレ、ウツボグサ、テリハノイバラ等が生じて居る。冷い西風は是等の草の枯葉を渡つて、時折襟元から背中へ吹込んで行く。

二里餘りの路を日の暮れぬ内に伊東まで戻らねばならぬ身故、何時までも山頂で眺望を貪つて居

る譯にも行かないので、三時二十分といふに出發し、火口壁の緣を西に廻つて初めの石佛の所へ出た、これから登路を二ノ鳥居まで下つて、それからは街道を見あてに右にそれて路のない山腹を下り切つて一休した。ウメバチサウの小さな殘花が七八個訪ふ蟲もなく哀れてある。

三時三十五分山麓を出發して、舊路を十足に歸る。靜かな雜木林の間を一人辿る快味は、兎角に歩調をゆるくするが、それでも下り路に時も入らず、四時には十足の部落に入つて、筧の水に渴を醫した。十足から伊東へは荻を通過する方が順路と聞いたので、石の多い坂路を北へ北へと下つて行くと、暮色は漸く迫つて、木枯がサッと雜木の梢を鳴して過ぎて行く。迷ひ路もなくて荻の部落に達したのが四時二十分。村はづれから往還を鎌田へ出やうとした自分は、フト開墾路に迷ひ込んでしまつた、徑は小溪に沿うて靜な山間を辿つて行く、思ふに五萬分一の地圖に荻から點線を以て東北に向ふ樣に記してあるものに違ひない。鞍部に上りついてから、雜木林の中に下ると、路は止度なく降つて、遂には畠の間を谷底まで下り込んでしまつた。小川がある。暮れて行くかすかな日に地圖をすかして見れば、吉田の大池の下流が、廻り廻つて西流するものと思はるゝので、其の右岸は瓶山の續きに當る筈故、對岸の丘上に登つて見ると、下田街道に略並行して吉田から岡に通ずる路の走つて居るのに出遭つた。乃ち左に折れて幅の廣い道を下り氣味に進むと、遂に上の坂とか呼ぶ急坂を下り、やがて久須美の音無神社の側に出たのは、未だ五時半にはなつて居なかつた。

大室山は前述の如く案內を要せずして容易に登攀し得る丘陵的の山であるに係はらず、眺望も伊東附近で第一流に推すことを得る程故、浴客の散策的登山には寔に適當な場所である。尙途上吉田村の大池を訪ふも宜しからうが、大池に到るには前記の路の他、下田街道を進んで、吉田の村に入らうとする四五丁程手前に、大池道と記した道しるべから右折すれば、迷はずに達せらるゝことゝ思ふ。歸途は十足、荻を經て、鎌田に出る往還によるなり、又は自分と同一の路を取るもよからう

と思ふ。途中逆川以外に飲食店はないから、辨當其他は携帶するを得策とする。（武田）

○登山案内者

駒ヶ岳登山者強力組合

駒ヶ岳登山者強力組合規約

第一條　本組合は駒ヶ岳登山者強力組合と稱す

第二條　本組合は菅原村居住者中より加入したる者を以て組織す

第三條　本組合は駒ヶ岳登山者の需めに應じ携帶品の運搬及登山者のために隨伴又は案内を爲すを以て目的とす

第四條　本組合に世話人四名を置き登山者の爲めに便宜を計り組合の取締をなす

第五條　前條の世話人は組合員中より推選す

第六條　本組合の事務を處理する爲め菅原村臺ヶ原及竹宇に各一ケ所の事務所を置く

第七條　本組合員は第三條の目的を圓滿に遂行する爲め左記事項を遵守するものとす

一、登山者出發より下山を終る迄の間登山者の身邊を護衞し過失を生ぜしめざる樣注意する事

二、登山者に對しては特に懇切を旨とする事

三、登山者中途發病又は疲勞の爲め歩行に堪へ難き場合は相當看護の道を講じ無事下山せしむる事

四、登山者より委托を受けたる携帶品は破損又は遺失する事無き樣特に丁寧に取扱を爲す事

五、登山者より一定の料金の外何等の名義を以てするを不問金品の授與を請求し又は受領せざるものとす

第八條　本組合員は登山者の需に應じ強力を勤むる時は別記賃金の支拂を受くるものとす

第九條　本組合員中第七條の各項に違反し又は不都合の行爲ありたる時は世話人に於て戒飭を加へ尙改めざる時は組合の決議により除名す可きものとす

第十條　本組合規約は所轄警察官署に届出承認を經實行するものとす

第十一條　本組合規約は組合員總會の決議により

世話人の同意を得て之れを改正する事を得
第十二條　本組合規約は大正七年九月十五日より之れを實行す

別記料金

一、菅原村臺ヶ原より駒ヶ岳登山一日日當金一圓七十錢
一、同上より駒ヶ岳、白根、鳳凰、千丈岳等の登山一日日當金一圓八十錢
一、菅原村竹宇より駒ヶ岳登山一日日當金一圓五十錢
一、同上より駒ヶ岳、白根、鳳凰、千丈岳等登山一日日當金一圓八十錢
但臺ヶ原、竹宇共特に下山の時間を指定して急を要するものは日當一日金二圓
一、携帶品無く單に同伴するものにありては三人迄は普通日當三人以上一人を增す毎に金十錢を貰ひ受け十人を以て限度とす
一、携帶品は强力一人に付五貫匁以内とし普通日當を貰ひ受く
一、前各項の場合は食料草鞋等は總て需用者の賄を受くるものとす

大正七年九月十七日

駒ヶ岳登山者强力組合

組合加入者

菅原村臺ヶ原

古屋義知　山岸喜作　功力吾市
大久保幸平　入戸野作造　坂本關雄
長田駒平

同　村竹宇

伊藤喜圓　古屋留吉　井上百太郎
井上才一郎　古屋貞利　井上利三郎

同　郡日野春驛前

向井彌一郎

甲斐柳澤の旅舍と人夫

本誌前號一二八頁以下に、會員影山寅造氏の報告を基として、赤石山系北部の登山旅行出發點としての甲斐柳澤の近況を報道したりしが、同地に於ける新設旅舍及び人夫の員數に關して、更に同氏より左の如き報告を得たれば、次に掲げて前號所載の記事を補ふことゝす。

一、新設旅舍は桝屋と號し、約三十名の客を收

容し得べし。

一、人夫は春吉林八不在ならねば、登山人夫として十五名乃至二十名を集むることを得べし

右は勿論マクスィマムの場合なれば、標準としては多くも其の半を超えざる様打算する覺悟を要す可く、多人數の登山旅行は出來得る限り回避するを以て得策とすること論を俟たず。（武田久吉）

○山岳圖書批評

白馬嶽登山案内

高山館編

大正八年七月一日の發行で、白馬ヶ岳に關する最近の著述である。三六版本文一百四十七頁、五號活字九行二十八字詰、卷頭には「白馬岳登山地圖」と銘打つて、縮尺十萬分之一とことはつてある石版三度刷の概念圖を添へ、本文中には十二葉の網版を挿んである。表紙は白紙に小形の石版畫を刷込み、日本アルプス白馬嶽登山案内　白馬山麓高山館編と題してある。包紙は厚手の洋紙にコロタイプて有名なキヌガササウの群落が美しく刷出だされ、餘白に同様な表題と白馬岳麓高山館編と赤色で記されてある處、書肆の店頭に雜書と共に曝されても、直に顧客の目に入る品てあらう。扉紙も赤刷て、表題を中央に、右には白馬嶽麓北城小學校内高山館編とし、左に東京梅津書店と明記してあるが、其の次に來る白馬山麓高山館主中山明實氏の序を拜見すると、筆者は馬場姓華洲と號する人だといふことである。次に六頁に亘る目次と例の概念圖があつて、其の次には、文句は同一だが、今度は黑刷の扉紙がある。

本書は案内を主とする小冊子故、先白馬ヶ岳の遠望から說き起し、次て山名の起源に及び、寫眞を添へて、これが代馬の意より白馬に轉じ、近來は非常識な人々にはハクバとさへ呼ばれることを慨して居る。「山岳」第六年第三號一六八頁を讀んだ人には珍らしいことでもあるまいが、近來己れの登らんとする山の名稱さへ知らないて、潮の如く推寄せる人達には慥に再讀三讀の値がある。登山の順路として、先づ本道ともいふ可き、四ッ屋から細野に出て、白馬尻から大雪溪を登る路につい

て述べてあるが、高山館所在地と思はれる四ツ屋を四谷と記して平然たるは、白馬の名稱を云々した後としては殊に皮肉に感ぜられる。それはさて置き四ツ屋に達する道を、單に大町を經て行く所謂糸魚川街道のみでなく、長野から達す可き道程をも記してあるのは親切といへやう。

筆は漸く進んで、本書の主要部である處の登山路の精細な記事がある。二股から中山、長走を經て白馬尻にかかつて登る普通の登路を、寫眞を挿んで說明してあるが、記事の乾燥に陷るを防がうとの考からか、大分藝術的(?)描寫を試み、追上(オヒアゲ)澤を過ぎて大雪溪に出た所の如きは「凡俗の身も此境に容りて此幽邃に觸れてはモーゼを偲びミナイ山(シナイ山の誤?)を懷ひクリストを慕ふてジヨルダン河の地を念ふ。尊き哉自然、嚴なるかなネーチユア」と言た調子で、讀者をして恍惚たらしめないでは置かないといふ氣構である。かうなると苦しい思をして山に登るよりも、凉しい所へ寢ころんで此の本を讀んで居た方が得る處がありそうだ。雪溪を登り切つて葱平に辿りつくと、紅黄白紫の高山植物が妍を競ふところが述べてあるが「何と云つても天下にこんな清々しい壯大な華園はあるまい確に神苑であるエデンの園である、健兒一度此野に遊ばゞ何と云ふらん、パラダイス〳〵」となると、讀者もすつかり魅せられてしまつて、印を結んで、死後昇天ハライソ〳〵とでも和し度くなる。

頂上の小屋の寫眞を見ると、大層立派な建物らしい、こんな家が山頂に出來る樣に成ては、白馬ケ岳もわざ〳〵登つて見る價値がなくなつてしまひそうだ。此の地點の氣溫は最高七十九度最低三十九度水溫二度とあるが、これは大正六年七月十九日の測定によつたものだそうで、華氏と攝氏と混用してあるらしい、而も只一回の測定の結果だけでは敢て揭げる價値はなささうだ。

白馬ケ岳の登路は單に上述のもののみでなく、尙越中の祖母谷溫泉から登る路も記してあるが、此の方は著者の實査になつたものではないと見えて、案內記としては精密の度に於て甚しく不足してゐる樣に思はれる。尙序に蓮華溫泉からの登路

を詳記したならば、己れのみに厚いといふ非難を免れ得たであろうに。

白馬案内は只山頂に達するのみで滿足せず、更に山稜を南に縱走して大黒鑛山に至る概略をも記してあるが、夫よりも寧ろ乘鞍方面の案内を記して呉れた方が讀者の或者は幾層倍も喜ぶことであろう。

白馬岳の登路を紹介し、大黒鑛山迄の縱走を記した後、鑓ヶ岳登山といふ一章が設けてあるが、二股の登路細野の登路も、共に鑓の溫泉迄で終つてゐるのは、妙に感ぜざるを得ない。

第四章の溫泉といふ所では、鑓や蓮華の湯は申すに及ばず、祖母谷鐘釣を初めとして、黒薙、二見の溫泉にまで及でゐる。泉質や效用の條が確なものに據てあるのならば、無用なものではあるまい。

第五章として氷河に關する一章を設けてあるのは、白馬ヶ岳の案内記として當然の用意である。それも慥に自說を發表しないで、地學雜誌に載せられた山崎直方博士の一文から拔鈔して揭げたのは、却て無難であろう。しかし氷河の擦痕のあるといはるゝ岩の寫眞(四五頁)解說に「氷河痕を殘せると云はれし大磐石の六月初旬僅に消え殘れる有樣」とあるが、これでは「綴方」で甲の上は一寸とれそうもない。

第六章の生物目錄は全く無用の長物。第七章はあつてもなくてもよかろうと思ふ。

本書は白馬ヶ岳專問の書物である以上、まだ〳〵書く可きことは多かろう。山麓に七年間も住居し、而も「數十回の登山と探險とを重ねた」著者の筆としては大に物足らなく思はれるし、加之材料の取捨、配列、文章の推敲に今幾段かの考慮を要するものであることは申す迄もない。筆を擱くに當つて、前途多い本書の健全な發達を希望する。

(H T)

雜報

○立山頂上の氣象觀測

中央氣象臺にては高層氣象調査の外、高山に於ける氣象調査を行へり、調査の必要を感じ、今夏越中立山山上に於ける氣象調査を行へり、調査隊は築地技師外四名、外に東京府立第三中學校教諭正木助次郎氏及氣象臺大阪臨時出張所より所員一名參加し、伏木測候所長大森虎之助氏の助力を仰ぎ、前後十日間山上に止まり氣象調査を行へり、隊員は七日夜上野驛を發して富山縣下滑川を經、八日正午立山輕便鐵道の終點五百石驛に到着し、先發二名の隊員及大森氏に合するを得、徒歩五里常願寺川に沿ひて蘆峅寺に至り、翌九日は登山の準備と山麓の觀測とに費し、十日早朝登山々上室堂に泊す、社務所及器械寮の好意によりて、約二間四方の場所を專用することを得、其内に晴雨計を据付けたり、十一日は早朝山頂に至り、縣社雄山神社前に於て第一回山上氣候調査として、通風寒暖計を以て氣溫を測定するに、午前十一時四十分に於て攝氏十一度四（華氏五十三度）を得たり。

十二日初めて百葉箱を室堂附近に据付け終り、自記寒暑計自記濕度計、自記風力計を其内に安置し、氣候調査を行ひ、爾來十九日の朝まで其觀測を繼續せり、十三日以後は主として山風谷風と雲の生因、空中のイオン數變化、雪渓、山上の湖沼、稱名川上流水溫及び山上附近の地貌及び地質に關する調査等に從事し、（中略）十九日に至り一先づ調査を中止し、尙雨中湖沼の測量に從事し、二十日微雨中を下山し、途中立山溫泉場に到り、同場氣溫自記觀測の成績を得、湯川沿岸の地質及び山崩れを調査しつゝ蘆峅寺に到り一泊し（中略）、廿二日歸京せり、山風谷風の調査及雲の調査は相聯關せるものにして、大阪臨時出張員は測風用として、氣球をも飛揚せしを以て、略ゝ山上風向の變化を知り得たり、又雪渓に關しては其生因溫度融解の狀態附近氣溫變化等を調査せり、湖沼に關しては水位變化及面積の測量等を行ひ、其平均水深を推し、地質地貌は主として正木氏の擔當する所にして、略大要を知り得たれども未だ發表の期に非ず、イオン數の調査は雷雨の生因に關し最も重要なるものにして、五百石、蘆峅寺及室堂に於て行へり、今山上山麓に於ける氣溫及び附近各測候所の氣溫を表記すれば次の如し。

	最高平均	最低平均		最高平均	最低平均
室　堂	五九・九	四九・六	立山溫泉	八二・四	五九・九
蘆峅寺	八〇・九	六七・九	筑波山	七二・五	六一・九
伏　木	八一・六	七〇・八	高　山	八二・四	六六・五
松　木	八一・六	六四・五	長　野	八三・一	六六・五
東　京	八一・五	六八・五	大　阪	八八・八	七三・五

因に一行に先だちて下山したる大森伏木測候所長の談に依れば、上層氣流の觀測用として山崎技手が大阪の氣象臺出張所より携帶したる數十個の風船には『此風船は中央氣象臺立山觀測隊の揚げたのだから拾ふた者は其日時と場所と氏名を書いて東京の中

央氣象臺へ報告してくれれば相當の謝禮をする』旨を書附けたる札を附して隨時飛揚したるものたりといふ。（八年八月二十八日北陸タイムス）

○北アルプスの湖沼調査

田中阿歌麿子の談

湖沼學の權威田中阿歌麿子爵は、數日前北アルプスの南端乘鞍嶽から北の端白馬嶽迄縱走を試み、其間に在る湖沼の探險調査を終へて、歸京の途木崎湖畔の夏期大學に立寄り、湖沼理學に關する講演を試みたが、尙子爵はアルプス縱走の感想并に湖沼探險の成績に就て記者に語る、『小谷溫泉の附近に釜池と云ふのがあるが、夫れは山崩れの結果出來たもので面積の割合に深い、十八米突もある、此池の特質は水面が攝氏二十度もあつて水族は六度である、其周圍は鬱若たる深林で、魚類の餌料も極めて豐富だから、鱒を飼養したら妙であらう、乘鞍頂上の大池も調べたが、舟筏の準備が無かつたので充分の事が能きなかつた、最後に白馬山附近の長池へ行つた、之れは半雪溶で他に類を見ざる奇觀で、池中に白雪の塊が浮漂して散在して居る景は、宛然鷗が遊んで居るやうであつた、要するに學術的には相當得る所はあつたが、夫れを經濟的に應用する方法に就ては、何分水溫が低いのと交通が不便なとて、之れと云ふ方法も樹たなかつた』云々。（木崎湖畔にて森生）（大正八年八月二十八日新愛知）

○石室十ヶ所位置決定

本縣に於て臨時縣會の決議を經て、今回新に築造せんとする高山の山室の位置は、十ヶ處を

一、白馬頂（上より下り八丁在來の位置）
二、鑓ヶ岳（頂上より下一里岳の湯）
三、大黒岳（八方降路）
四、二ノ俣（中房より槍ヶ岳への通路大天井の南）
五、槍ヶ岳（坊主の小屋附近）
六、乘鞍岳（頂上附近）
七、赤石岳（大小路より東下り十町駿洲地籍）
八、東駒ヶ岳（頂上より西に下る十丁）
九、岩菅山（頂上附近）
十、八ッ岳（赤岳頂上の北側）

と決定し、九日學務課より山の處在町村若くは教育會特志團體に對し、特選受負の形式に依りて助力せられんことの通牒を郡長に發したるが、該山室を築造せんとする地籍は、大部分國有地なるが故に石材木材は主務省より特別の拂下げを受けんと目下交涉を重ねつゝあるが、山室の大きさは內面大は四間に二間四尺、小は三間に二間四尺にて、四面石積となし、屋根其間隙はセメントを塡充し、屋根は木造にて厚さ一寸板葺とし、クレオソートを塗布し別に便所をも附設する計畫なるが、大は約五十人小は約四十人を容るに足る可く、內部の裝置は中央四尺通りを土間とし、兩側六尺の板張りとなすものにて、今年の登山期迄には竣工すべしと。

（大正八年六月廿日信濃毎日）

○阿蘇山噴火

阿蘇山は昨今に至り鳴動益甚だしく、降灰頗る盛んにして、九日以來は鳴動十五分間位の間歇的となり、十六日夜は最も甚だしく、夜間は遠方より火の柱天に沖するを認めたるが、夫れと關係あるにや、熊本市は五月に入りて以來既に三回の地震あり、十八日午後七時四十五分弱震ありたり。（十九日、熊本電報）（大正八年五月二十日東京日日新聞）

○伊豆大島三原山噴火

去る十八日夜半突然轟然たる大音響と共に三原山上より火柱天に沖し、附近の泉津村野增村元村一帶に亘る地響に住民の夢を驚かし爾來斷續的に噴火と震動を繼續し居たるが、去る二十七、八日頃に至り一層猛烈となり、一分間七八回の爆發を見るに至りたれば二十八日同島島司は巡査數名と共に現狀の視察に赴けるに、噴火口は舊噴火口と同く大森山の左方に當り、十一間四方位の大きさにして、當時一分間十三回の噴火を爲し、熔岩は二丁餘も高く昇騰して黑煙と共に天に沖し、物凄き事限りなく、爾來少しも歇む事なく勢益々猛烈なれども、幸ひに人畜には死傷なし、住民は戰々兢々たり。（大正八年八月一日東京朝日新聞）

○燒ケ岳噴火

信州燒ケ岳の肩の邊より一日朝新しく噴火せり。（島々特電）

信濃飛騨國境の燒ケ嶽に新噴火ありと知れたるは一日朝にて、上高地より見れば舊噴煙の場所より北西に當り、蒲田峠に近き地點なり、上高地にては遠雷の如き音響を聞き、松本よりは二日常より太き噴煙を望み得たり、同地一帶は雪降り積り、其中に黑煙濛々と立ち、頗る奇觀壯觀なり。（松本特電）（大正八年十一月四日東京朝日新聞）

○砲兵中尉行方不明となる

野砲兵第八聯隊砲兵中尉小林善三郎氏（二十六）は、去る八月十三日八甲登山を企て行方不明となり目下捜索中である。同人は茨城縣水戸の出身にて、家族に對しては八甲登山をするとの書面を殘して家を出でたが、同日青森に來り地圖を繙き歩兵第五聯隊の前を通過し、同聯隊が昨年八甲田雪中強行軍を試みた際凍死者を出した其記念の爲め立てたる後藤伍長の銅像前まで來た事は判つて居るが、其以後の行動は全く不明である。（青森）（八年九月三日新愛知）

○富士山の初雪

九月二十五日富士山七合目以上に大降雪あり、之れ本年の初雪なり。（御殿場特電。大正八年九月二十六日讀賣新聞）

○雪來る

日本アルプス穗高嶽には十二日朝始めて雪降りたり、昨年よりも十三日間早し、上高地は本年五月十六日春の最終の降雪ありて、積もる事六七寸、それより春の季候となり、夏らしき季候はなく、

八月中旬には最早冷氣を覺へ、秋の季候となり、本月八日には初霜あり、十一日の雨は頗る冷たく、十三日朝穗高嶽一面に白く見へたるが、此雪は十一日夜に降りたるものなり、昨今上高地の溫度は四十度内外にして、森林は紅葉を催したり。（大正八年九月十四日信濃毎日）

○會員通信

△拜啓。小生儀同行六人に强力四名都合十一人にて、七月三十日大町出發、雨天の爲大澤小舍に二泊、八月一日晴、針木の雪溪を攀ぢ針木岳に登り、峠より針ノ木澤を下りて午後四時半牛小舍澤露營。二日晴、平ノ小屋の稍上流にて黑部川を徒涉し、五色ケ原に至りて一泊。翌三日晴、鬼、龍王、淨土を越え、一ノ越に露營四日午前五時出發、六時雄山に賽して眺望を恣にし、八時小生は案內者一名を伴ひ一行と別れて大汝、富士ノ折立、眞砂を越え、別山の頂に露營す、午後四時頃より暴風雨に遭ひ、翌日に至るも歇まず滯在。六日晴、午前五時發、輕裝別山尾根續きを縱走、八時劒岳絕頂に至り記念撮を築く約二米突（四等三角點なき稍高き西峯）三千米突となし、九時長次郎澤を下り劒澤を上り、正午野營地に歸りて中食、午後一時半出發別山乘越より稍東南の谷を下り、室堂を廻り七時立山溫泉着一泊。七日午前七時發、上瀧を過ぎ午後五時富山着、八日無事歸宅致し候。此行針ノ木岳、五色ケ原、淨土山、雄山、劒岳孰も好晴にして四圍の眺望可良に有之候（八月九日鵜殿正雄）

△拜啓　十二日大町發、高瀨水俣入天上を溯り、右俣雪溪より東鎧尾根に取付き、槍、穗高縱走を了へ、昨十九日午後六時當上高地五千尺に下り申候。同行者は會員齋藤新一郎氏、人夫大町の北澤清志、鹽入喜代正、二人共槍穗高に無經驗なるを伴ひ候。久振りの山歩きに逕惡く不良の天候に苦しめられ候も、豫定の縱走を無事了へしこと近來の歡びに御座候。（八月二十日上高地五千尺にて百瀨慎太郎）

△小生今回夏休みを利用し、北海道の夏の自然を心行く許り味はんと、去月中旬當湖畔に參り候。兼て聞き及びし北海道の大陸的風光は頗る氣に入り申候。（八月二日北海道阿寒湖畔にて村越匡次）

△拜呈　小生去る十日例年の如く當地に參り、十二日武田兄と同道先づ大沼を見物して發補に一泊、十三日岩宮山頂の新造石室に宿泊、然るに同日夕より風雨になり十四日はふりこめられ、目的とせる烏帽子往復を行ふこと能はず、十五日小雨中裏岩宮を窮めて下山致し候。武田兄はそれより燒額と笠に登り（以上二つは通信あり）橫手、白根を經て最早萬座、山田方面に行かれし事と思ひ候。（八月十九日信州安代山口屋方辻本滿丸）

△本日正午當地着仕候、唯今より向ふ十日間にて立山溫泉、室堂を經て、淨土雄山別山の巡禮を了へ、笹津より高原川を溯り、蒲田より小笠に上り槍穗高の壯觀を眺め、神河內に出で歸國致す豫定に御座候。（八月七日五百石にて神吉廉二）

△前略小生儀去る二日友人二名と午前五時半厳岡清水坊を發し、大平成氏の紀行を案內として鳥海登山を致し候。幸運にも前日迄の降雨やみ大雪路の大雪田にて五分間許り濃霧に會せしのみにて

午後二時無事頂上に達し申候。快晴には御座無く候も、充分登山の快を味ひ申候。歸路は旅程の都合上再び蕨岡に向ひ、午後七時無事同地に下山致し候。來年は吹浦迄汽車開通の由なれば、一層開けた山と相成べく候。（八月八日山内眞三雄）

△汽車今有名なる狩勝峠を迂曲しつゝ登り居り候、この山の續きやがて大雪山山麓を起すかと思へば、又となく懷しく覺え候。明日は晴天ならばカムシュベへと向ひ申候。（八月十五日旭川への車中にて中條常七）

△拜啓小生儀七月廿八日信州大町出發、單獨にて人夫一名を雇ひ針ノ木峠を踰え黑部川を徒渉し、平ノ小屋、五色ケ原、ザラ峠、鬼ケ岳、龍王岳、淨土山、立山を經て富山に出で、金澤より白山に登り飛騨に下山、白水の瀑布白川村の大家族遠山家を訪問し、白川街道小瀨峠を經て城端高岡に出で、栗津、山代、山中の溫泉を廻り、九日歸阪仕候（高砂要藏）

△小生只今苫小牧を距る一里半小糸魚（コイトイ）の丘陵中の小溪に假小屋住ひ致し可なり多忙な日を送り居り候。樽前山には西北方に近く聳え居り候。樽前山には六月九日人夫一人を連れ支笏湖畔王子製紙會社山林事務所より湖岸をモラツプに迂廻しクチャウヲツカナイの空澤を登り樽前山北方の高原に出で、右折フウプシノボリ直下の尾根に達し、フウプシノボリへ登山せんと致し候も嶮峻到底攀ぢ得ず、恨を呑んでフウプシ樽前二山間の一峯（中の岳、新稱）を經て、樽前火口原を一周してクチャウヲツカナイより下山、朝六時に出發して午後七時事務所に歸着致し候。（八月廿一日苫小牧にて竹内亮）

△前略　八月二日大町出發、案内は佐藤靜馬、人夫は二人、小生共四人にて、鹿島川を溯り鹿島溪畔泊、同三日鹿島川上流二股泊、四日長く急なる雪渓を上りて五龍北に泊、五日暴風雨にて滯在六日午後より八峯手前に到り泊、七日キレトの澤を下り痞尾根をつたひて東谷最奥の河原に野營、八日東谷の河原を黑部近く下り九日黑部右岸をつたひ棒小屋澤落合との中間カラ澤に泊、十日棒小屋澤落合下黑部川の畔に下り、古河合名會社の櫻井氏に面會、十一日棒小屋澤右岸の急壁を上り、棒小屋澤に下り、十二日棒小屋澤を溯り、十三日棒小屋乘越をへて大町に歸り候、黑部下廊下の物凄さはいふまでもなく候へども、危險を感じたるは寧ろ八峯より東谷への下りと棒小屋澤下部に候、棒小屋澤上部は頗る歩きよく河原も廣きに拘らず、下部約十町許は川幅三間に過ぎず兩岸の斷崖高くして空狹く、一旦入りたる以上タル越えの冒險を試みずんば進退谷まる程に候、東谷最奥の河原より仰望せる鹿島鎗八峯附近の山容も、その豪壯なる驚く許に候、八峯の險は寧ろ谷にありと存ぜられ候。此行使用せるロープは約百二十尺、其他には何等變りたる特別携帶品無之相當の所まで行くを得て幸運を喜び申候、古河の測量隊により餓鬼谷より東谷をへて棒小屋澤附近に到る切開ある事を後に知り申候、荷輕ければ鐘釣より一日に強行なし得る由、但し道は數百米乃至千米以上も高所を通り居り、黑部下廊下の景色は到底うかゞはれざるべく信ぜられ候、大町に來りし人々及大町の他の案内者も小生の成功によりて大に心を動かされたるものゝ如く、來年は恐らく谷入り流行致すべき樣豫想され候。（大町にて沼井鐵太郎）

△七月十日。大阪より汽車にて吉野に向ひ、大峰山に登り頂上龍泉寺坊泊り。十一日強力案内者中村國一を伴ひ、大普賢、國見岳行者還の峻峰を經、午後五時頃彌山行人小屋に宿す、夜月色晴明頗る寒氣を覺ゆ。十二日晴天。彌山、佛生岳、孔雀岳、釋迦ヶ岳大日岳を踰えて前鬼に下り森本坊に泊る。途中白躑躅芳香の大山レンゲ多し。十三日晴。前鬼の行場に半日を費し、午後出發して河合泊り。十四日晴、後雨。大臺ヶ原の大臺教會所に午後三時着。十五日晴。附近を見物して午後下山、相木に出て一泊。十六日晴。吉野河に沿ひて天瀧、五社峠、宮瀧を過ぎ、上市より吉野に着したるは午後三時半、直に歸阪す。（八月八日直木重一郎）

△小生伴野兄と共に去る七月十五日東京を出で、羽前朝日鑛泉にかゝり朝日岳に登山し、それより飯豐山に登り、會津に下り、更に汽車にて新津を經て小千谷に參り、栃尾又温泉にかゝり、魚沼駒ヶ岳、平ヶ岳方面に行かんと存じ候しも案内者なく、漸にして駒ヶ岳中ノ岳、八海山のみに行く事と致し、その方面の案内者を得、栃尾又を出發致し枝折峠に參り候處、大雷雨に會ひ人夫辟易し、翌日も前進の見込なく殘念ながら下山致し候、栃尾又にて案内者を得る事は困難の事と存じ候。小生は前以て照會致置候も此始末に御座候、これには栃尾又温泉宿自在館の不親切も與る所多しと存じ候。

朝日飯豐は誠に好き山と存ぜられ候、殘雪の豐富と山容の雄大は決して日本アルプスに劣る事無之と存じ候。但朝日岳は近年登山者無く、爲に藪多くして困難に御座候。熊笹は一間餘りの高さに餘り道は殆んど不明に御座候。爲に小生等は朝日鑛泉より五味澤まで一日にて行かれず途中野宿致し候。飯豐山も羽前方面即ち裏よりは道あるも藪多くして登山困難に御座候。駒ヶ岳登山に失敗し腹癒せの爲大町に參り、白澤より祖父岳に登り鹿島槍の頂上を極め冷澤を下りて大町に歸着致し候。白澤は辻本幹事の兵三郎を連れられて下られし外記錄なきも、平易の澤に御座候。本日は珍しく晴天に御座候も今年は雨多く登山者は皆困難の由に御座候。（八月六日大町にて宮川久雄）

△拜呈昨十一日白馬頂上に一泊致し候。小屋新らしく二屋を設けられ、一舍三十人を入る可く候。猶離山に縣よりり四間に二間半の石室を建設中なるを見たり。同十二日朝頂上發大池に下り更に蓮華温泉に下り候。此路大池より直下に取りたる爲、針葉樹の林中殆んど道なきの感あり。天氣良好遠望に堪へ申候。明十三日當温泉を出で再び白馬頂上に登り一泊の上、大黒岳縱走の豫定に御座候。（八月十二日蓮華温泉にて山本隆三）

△拜啓。二十一日午前八時佐々木助三郎、同仁次郎、同三次郎、同伊之助四名と小生等三名を加へすべて七名、愛本温泉を出發、黒薙温泉を經て午後五時半鐘釣温泉着致候。二十二日午前八時三十五分出發、猿飛の奇峽を賞し祖母谷温泉の廢屋を訪ね南越を上り、午後五時五十分餓鬼の田圃着、第一日の天幕を張り申候。二十三日午前八時二十分出發。大黒鑛山を眺き信州飯森越の路を登り唐松岳に達し、山稜を北走して午後六時南岳北方の鞍部に露營。二十四日午前七時二十分出發、奥不歸岳に登り天狗の小屋場にて晝食、鑓ヶ嶽を踰えて杓子嶽に向ふ途中天候急變し、終に杓子を北方に數町下りたる地點に野營。二十五日午前七時發、白馬頂上に八時十分着、雲霧迫り來りて少しも眺望なし。然るに僅に三十

分前迄は富士までも望まれたりと聞き大に殘念に存じ申候。夫より下山の途に就き、細野を過ぎて飯田に出で對山館支店に午後四時半着一泊仕候。二十六日昨夜の强雨にて大町手前の土橋墜落せし爲自働車通ぜず、止むなく徒歩大町に向ひ、午後一時對山館に着き申候。（七月二十八日坂田治三郎）

△拜呈。十三日早起蓮華温泉を出で、鑛山道を白馬頂上に上り、一泊　翌十四日風雨の爲滯在。十五日も天候怪しき爲又滯在せしが、正午頃晴れたるにより清水岳に登り候。十六日早起杓子、鑓天狗、朱殿坊、不歸谷を經て、唐松大黒迄縱走し、八方岳を越えて午後八時山木に歸着致し候。十五日午後五時に於ける快晴は本年始めてなりし由にて、能登半島も佐渡も白山連峯立山連峯も呼べば答ふ可く、展望の爽快雄大を極め申候。汽車連絡の時間上唯今大町對山館に宿し（百瀨氏は十二日穗高方面に向はれ不在）少女と共に不歸澤上りの快を追想し、幸に北アルプス約三分一を少女が縱走し得たるをほゝ笑み申候。憾むらくは白馬山嶽遊山客多く會員章を帶べるものに遭ひて挨拶すれば、そは身内の人の借り物なりしには不快を覺え申候。且や頂上に「中學生」主催野尻某が自然は少し茶目に過ぐと落書せるあり轉た其不眞面目を嘆じ申候。小生等の人夫は山木にて樅山午吉、大谷福三の二名を雇ひ候。四ツ家の者にて稍經驗有之、何れも温順の方に候。細野の人夫は山木にては兎角雇ひ入れぬらしき傾向を認め申候。そは本年山始めか昨年の山仕舞頃より、細野對四ツ家との人夫に頂上小舍の件に付爭ひありたるらしく、昨今は仲直りせりとは言へど、依然疊壁を作れるものゝ如くに候。要は頂上の石室は山木に於て全然占領し二箇所の小舍は山木に於て經營せる爲、自然細野人夫は激昂せるらしく、而して目下離山に建設中なる縣の小舍を來年より細野人夫が專用せんとせる由聞及候。山木の小舍を預かれる管理者の橫柄なるに至りては、自然を自己の所有物にせるの不快を我人共に嘆じ申候。（八月十七日大町對山館にて山本隆三）

△拜啓先月二十九日東京發途中船成金破損の影響をうけ、四時頃たゝき起されて龜山廻りを命ぜられ、さん〴〵ひどい目に遇ひました。大阪、神戸、生野、明延、明神峠、神子畑、城の崎、京都、山代尾小屋、金澤と宿りあるいて、昨日より神岡へ參りました。篠津、土、間のトロは中々絶景多く候。歸途は高山より岐阜に出んか、それともふんばつて浦田温泉迄七里行き、燒嶽を越えて上高地へ出んかと中々希望のみ澤山有之、取捨に困つて居り升。いづれ其中に附近の一三〇〇米位の小丘に登つて見物するつもりです。（八月十二日飯田光太郎）

△漸く熱鬧の巷を離れて當地に參り申候。路順は豫定の通り馬場平大天井等を經て中房へ出で可申、若時間に餘裕あらば白馬をもと思ひ居り候。（八月十七日島々清水屋にて佐々城佑）

△無て大正五年の夏を以て決行せんとして果さゞりし黒部入りも其後大略の樣子判然せし爲、本年七月下旬旅程に上り候處、端なく其事が新聞紙上に喧傳せられ、大層な騒ぎにて全く驚き申候。殊に登山熱よりも更に激しい水力電氣熱が黒部川にまで波及してゐやうとは夢にも知らず、魚見町に來て初めて之を知りたる程にて、古河合名會社の測量隊といふのが、昨年來同じく黒部川の上流に向つて探査の途に上りつゝある事も承知致し候。それはよけ

れと此古河の測量隊には、高岡新報の記者が同行し居りて、小生等の一行を迷惑にも競爭者の如く誤解し、愚にも付かぬ僞電報を數通發したるのみか、一行は此壯圖に失敗し、僅に粥を啜りて白馬岳に登り、信州に下りてお茶を濁したりなどゝ書き立てたるには呆れ申候。實は測量隊にては音澤村の佐々木助七を案内に傭ひたるも、約束通りの賃金を拂はざりし爲、助七は其案内を斷りたるに拘はらず小生等の案内者となりしを快からず思ひ居りて、此愚策を弄したるものと知られ候。地方の小新聞の記者にはありさうな事に候へども、堂々たる高岡新報の記者としては不似合の事と存じ候。餘事はさて措き、小生は中村君に同伴して、七月二十六日夜東京出發翌二十七日泊驛下車、其日は愛本溫泉に泊り、二十八日は雨の爲に同所滯在、二十九日助七の來るを待つて午前九時出發午後五時半鐘釣溫泉着、三十日黑部川の左岸を遡りて午後五時五十分仕合谷合流點に達し野營。三十一日午前八時半出發午後二時半折尾谷着。八月一日は同所滯在。二日午前六時四十分出立午後二時半アゾ原着野營。三日午前八時半出發九時半仙人谷着。食糧尙二日分を餘すも、かくて前進を繼續するは無謀なるを以て最も近き立山室堂に出づるに決し、仙人谷の合流點を見物して近藤君橫斷の跡を眺め、十一時引返して仙人谷を上り、池ノ平尾根上に野營。四日朝助七等三人と別れ長次郎外一人を伴ひて、池ノ平より劍澤に出で、之を遡りて別山乘越を踰え、夕方室堂着一泊。五日暴風雨を衝いて芦峅に下り、六日五百石に出で申候。連日天候悪はしからず、道程又豫期の如く困難にして、豫定の半を進行したるに過ぎざるも、黑部谷の如何なるものなるかは大體を知り得たるやうに感じ申候。（大正八年八月六日五百石にて木暮理太郎）

△ガイドもなしに重い荷を背にしこの山に上ることの出來たのは私のプライドである。私の元氣は少しも銷沈しない一證として自慢しても差閊あるまい。日本アルプスでは到底こゝ何十年先でも見ることの出來ないこの山上ホテルに一泊し明日下山の豫定。天氣よく霧も起らないのは何より幸である。この山も昔から隨分アクシデント多く既に今日登山の節頂上直下に Lizzie C. Bourne. Perished here. Sept. 14, 1855. Age 23 の石標を見て深く感動されました。（大、八、九、一五。六二九三呎のヲシントン山上にて、今村幸男）

△ヲシントン山上のアパラキアン、マウンテン、クラブの小屋は石造で三十四五人の寢臺があります、完全したものです。私はヲシントン山に登つた時一寸立寄りました。芳名錄に署名せよとの事でしたから「日本山岳會員今村幸男」と日本字で記しました。（大、八、九、一六、今村幸男）

△十一月一日朝燒岳は新に右肩浦田峠の頂邊より大噴烟を始め、黑烟濛々として天に冲し、時々遠雷の如き響を聞く、當地一帶に降灰、時により西方爲に全く暈りて山容を示さゞる事あり、穗高を始め四圍の山々の雪景極めて雄大、コントラスト頗る妙にして共に奇觀を呈す。（大、八、十一、二、上河內、丸山尙）

△小生十月十二日出發越後路から清水越附近を越して上州に入り候、卽越後湯澤村より土樽村に至り、蓬澤を登りて峠（一五〇〇米）に達し、白樺小屋にて苗場水越の國道に會ひて上州湯檜曾に下

り候、此間道路は細く且諸所崩壊し往來頗る困難、如之夏と雖も天候一旦不良となれば寒氣甚しく、本年も此附近にて二名の凍死者あり、又熊も時々其姿を現す由なりしも幸ひ小生等は天氣晴朗にて樂々と越し、熊の好むといふ山葡萄を吾等が反つて頂戴致し候、此處は將來六哩餘の日本最長の隧道設計きる可き所に有之候。（大、八、十一、四、佐武正一）

△過般御通報中上候燒岳新噴烟は調査の結果實は飛騨方面岩坪谷の頭の北尾根に有之候。一日のものは三條の噴烟に候處、復昨六日午後二時頃激しき鳴動と共に其の下方より新噴烟を初め出し候が先きの三條よりも太きものに候。頂上の噴烟も（大正四年の噴火也）本年は全體去年よりも盛に有之候が、近來ます〳〵盛に噴き居り、新噴烟に連れて盛に候。峠路など降灰澤山疋の葉の上などは五分位も積りたらんか、腰以下は全く灰まぶれになり申し候。（大、八、一一、七、上河内、丸山尚）

△拜啓。今夏の山岳旅行左に御通知申上候。

第一日、午前七時出發（柳澤村）。九時釣橋。十時卅分二ノ澤勘五郎跡。十一時十五分赤ナギ澤ド。午後十二時二十五分八丁横手岩小屋。十二時卅五分フナ岩。一時卅分フトメ澤。四時四十五分袋澤小舍泊リ。第二日、午前七時出發。八時四十五分ヲナシ尾根。九時四十五分廣河原峠（ヲナシ峠）。十一時五十分廣河原小舍（午後二時四十分小舍發）。六時卅分大樺池。露營。第三日、午前六時五十分發。午後二時四十分北岳。四時卅分間ノ岳下露營。第四日午前六時卅分發。八時卅分間ノ岳。十一時四十分農鳥山（午後一時四十分發）。四時四十分廣河内岳下露營。第五日、午前六時出發六時四十分廣河内岳。八時十分峠道。九時十分白河内岳。午後二時大井川（黒河内岳ヲ經テ）。七時河原露營。第六日、午前七時出發。十時二十分釣橋下。東俣西俣の落合を見再び釣橋下。午後三時二十分釣橋下露營。第七日、午前五時出發（此日惡澤上迄道を行く）。六時五十分小舍跡。七時卅分ガレに舍ふ。九時卅分大なるガレに舍て西俣に下り西俣を上る。岩小舍附近以上登れず、再び惡澤の上迄引返し道を惡澤岳に登る（午後十二時廿分）。二時十分峠道。二時十分二〇〇六三角點。六時二千八百九十米突附近露營（少し雪あり）。第八日、午前六時卅分出發。九時五十分惡澤岳、午後十二時廿分峠。一時魚無河内岳西河内岳を經て、三時卅分凹地露營。第九日、午前十時發。大雨中人夫二人を伴ひ、十二時赤石岳。午後二時天幕に歸著。第十日、午前六時四十分出發。七時五十分西河内岳。午後五時小河内岳露營。第十一日、午前五時卅分發。六時十五分雪を得て朝食を濟せ、八時四十分發。十時卅分三伏峠。午後十二時十分本谷山。五時臘見岳。六時十分雪ナデ澤露營。第十二日、六時卅分出發。十時十分小舍跡。午後一時五十分三峯。五時二十分野呂川に下り伐木小舍跡露營。第十三日、午前五時四十分出發。七時五分横川岳。八時廿五分兜倉岳。十一時五十五分仙丈岳。二時三十分北澤小舍泊。第十四日、午前五時出發。六時四十五分仙水峠。八時二十分駒津岳。十時四十五分七丈小舍（午後十二時卅分小舍發）。四時四十分柳澤着。此行第八日目頃より毎日午後は雨に見舞はれ、可なり困難仕候。案内は水石春吉に候。春吉は農鳥以後鹽見迄は通過の經驗なく、小生が計畫し春吉の努力に依て行を全し申候。（大正八年七月廿五日柳澤にて影山寅造）

會報

○事務所の移轉

本會事務所は從來橫濱市本町四丁目六十七番地高野鷹藏氏方に設置しありし處、大正八年十月十五日を以て東京市麹町區富士見町四丁目六番地に移轉したり。

會務其他に關して本會に照會せらるゝ場合には幹事個人に宛てずして本會事務所宛にて發信せらるる可く、返信を要する場合には必ず相當返信料を封入せられ度し。又住所移轉其他の通知は、一々書面を以て申出でられ度く、他會員又は幹事を介して傳言せらるゝものは一切受理せざるものとす。

本會は會員全般の團體にして、幹事が私利を計らんが爲めに經營するものに非ず、却て時間、勞力、費用を提供し、劇務の傍ら無報酬にて我が山岳界の爲に努力するものなれば、會員諸君は充分此點を了解されて、徒に幹事の手數を增加し（例へば會費滯納、無通知移轉、又は無意味なる照會の如き）爲に會務の澁滯を招き、却て一般會員の不利を來すが如きことなからしめんことを切望す。又從來會員外の個人團體等より、自己の旅行案の作製、建議、或は宿泊費、里程、通行に要する時間の如き、種々雜多の質問を事務所に寄せられたることありしも、本會事務所は會務を處理するが爲に設けあるものにして、會務以外の無限なる雜問に對して、一々丁寧なる回答を與ふる機關に非るが故に、此の如き件に對しては以來一切返信するの責に任ぜざるものとす。

從來本會所藏の圖書、幻燈機械、幻燈映畫、器具、標本等の借用を申込まるゝ個人、團體等あり、本會にては能ふ限り其の希望に應じたりしも、此の如き件及び出張講演の依頼の如きは、一々幹事會を招集して協議するの必要あるを以て、少くも當日より二ヶ月以前に申込まるゝを要す（會員が一兩種の圖書を借覽する場合は、此の限りに非ざること論ずる迄もなきことなり）。

○小集會規定の變更

大正八年九月七日の幹事會に於て、左の通り議決し第六會小集會より、實行することゝしたり。

▽一年四回、二月、六月、九月、十一月の第一、又は臨機第二、日曜日午後一時より開會。但し時宜により右の外臨時に開催することある可し。

▽會場を一定せず、毎回司會者の適當と認むる場所とす。

▽會員以外の同好者にして出席を希望する者は、會員の同伴又はその紹介を要す。

▽會場其他に應じ、毎回出席者より少額の會費を徴集す。

▽本會幹事交互司會者として事務を處理す。

右小集會々場及び演題等は其の都度出來得る限り誌上に豫告すべきも、雜誌發行日の都合によりて豫告し難き時は、東京市內の會員に限り通知す可し。市外其の他在住の會員にして通牒を希望せらるゝ向は、其旨本會事務所迄書面を以て申出で置かれ度し。

出席者は毎回出席者名簿に署名され度く、會員に非ずして出席せらるゝ方は、紹介者氏名をも併記せらるゝを要す。

○會員章の變更

本會々員章は、去る明治四十二年に制定せるものにして、最初は實費を以て會員中の希望者に頒ちたりしが、翌年以後の入會者には本會より交付することゝし、昨年迄之を實行し來りしも、規則改正の爲め、種々の理由より一旦會員章全部の整理を必要としたると、從來往々製作上の缺點よりして、如何程周到なる注意を以て衣服に綴付くるとも、登山の際等往々破損紛失する場合不少、爲に形狀變更を慫慂せらる向ありしとを以て、今回斷然變更にすることに決し、種々破損すべき原因を除去し、黑味銅を打貫きて製し、裏面凸起に穿てる孔によりて絲を用ひて衣服に綴付くる時は、容易に和服にても洋服にても佩用することを得、且つ丈夫なる絲を使用すれば從來のものゝ如く脫落すること絕對に無之樣工風したり。

意匠は、舊會員章は稍華美に流るとの非難ありしと、年を經て七寶剝落するの處あるとに由り、如斯技工を一切用ひず。又表面模樣は極めて簡單明瞭を主とし Japanese Alpine Club の頭字を取りて組合せ、裏面には日本山岳會の五字を記し、且つ一々番號を刻み之を會員原簿に登錄す。又本會は主義として會長、總裁の如き者を頂かず、且今回會員全部を平等とし、幹事選擧をも一般會員の投票によることとし、本會に對して特に功勞ある會員は名譽會員として尊敬し、特に會務にたづさはる者をば幹事と呼ぶと雖、本來會員一般の會なるの故を以て、會員の種別、役員たると否との區別を、會員章の上に設くるは、自家撞着の甚しきものなれば、從來の著色區別を撤廢して、一般平等の會員章を製作することゝしたり。新會員章は來る四月一日より舊會員章と引換に貸與致す可きに付、從來御所持のものは事務所宛に御送附あらんことを希望す。万一紀念等の意味よりして、舊會員章を引續き所有され度き會員は、次項に揭ぐる處の「再貸與」と同一の手續きによらる可きものとす。

○會員章貸與及び再貸與規定

本會新規則により各會員に會員章を貸與することゝなりたるが、右は從來の會員には舊會員章と引かへに、又新入會員には入會金と引かへに、各番號を附したるものを貸與することゝす。會員章の貸與を受けたる會員は會員章借用證に署名捺印の上之を本會事務所に送附せらる可きものとす。

會員章は本會の備品にして、之を各會員に貸與するものなるが故に、借用者の過失によりて紛失されたる時は、直に其の旨書面を以て本會に屆出でられたる上、再貸與を乞はる可きものとす。本會は一旦紛失せし會員章は之を無效とし、其の番號を廣告す。再貸與請求者は會員章製作費、記帳費、書留送料として時價に應じて一定の金額（當分金貳圓とす）を屆出と共に納付せらる可きものとす。

會員退會の際には借用の會員章を本會に返納せ

らる可きものなれ共、万一其際返納せられざる時には、再貸與の場合と同一の金額を納付せらる可きものとす。

○不在會員規定

從來本會員中海外旅行等の爲め會員籍を保有し乍ら其期間不在會員として取扱はれんことを希望され、本會にては假に其の取扱をなし來りたることありたれども、未だ一定の規定無之かりしを以て、今回幹事會に於て左の如く規定したれば、今後右取扱希望の會員は此規定に從つて手續きさる可きものとす。

會員海外旅行其他の事由によりて十二ヶ月以上不在となる場合には、本人の希望により不在會員の取扱を受くることを得。此取扱請求の場合には不在の事由、不在期間等を詳記し、取扱手數料金貳圓を添へ事務所に届出でらる可し。

不在會員は不在期間内會員章を返納するに及ばず、會費納入の義務なく、又本會出版物の頒布を受くることなく、集會に出席し又は幹事を選舉するの權利なし。

此取扱取消請求と同時に、不在中の會費を納付し、其期間の本會出版物を受領するものとす。

不在期間三ヶ年以上に及べば、右取扱の効力を失し、退會と同一の手續を取る可きものとす。但し再度入會を希望する場合には、評議員一名のみの紹介によりて入會することを得。

右は不在會員の取扱を受くることを特に希望さるゝ場合にのみ適用する規定にして、外遊の會員は必しも此の取扱を受くるを要せず、平常通りに會費を納入し、出版物送付先を變更の都度直に通知せらるれば足るものとす。但し會員住所の何國にあるを問はず、移轉先を判然通知せざるが爲に雜誌は假令發送するも配達不能等にて到著せざる事ありとも本會は其の責に任ぜず、又海外旅行中住所不明の爲め万一會費滯納の場合督促し難き時は雜誌を發送せず、後日に至りて會費を全納せらるゝとも、其の期間發行の雜誌中万一品切のものあらば其號の配本をなさゞるものとす。

○會費拂込に關する注意

本會は會費拂込の便宜を計り去る明治四十二年郵便振替貯金に加入し、其の當時『山岳』第四年第一號に會費拂込み方法を掲げ置きたるも、該號閲覧の便なき近頃入會の會員中、會費其他の金員を振替にて拂込む手續を熟知されざる爲め、往々會費の滯納を來たしたる向あり、又中には拂込方法につきわざ〳〵照會さるゝ方あるを以て、以下此の簡便安全なる拂込方法を記す可きを以て、自今之を利用して會費の滯納を避けられんことを乞ふ。

振替にて會費其他の金員を拂込まるゝ際には、任意の郵便局にて、振替貯金拂込書用紙を請求せらるれば、無料にて交付さるゝものとす。此用紙中※印を附してある部に相當事項記入の上（即ち口座番號の欄には「東京四八一九番」加入者氏名欄には「日本山岳會」）壹圓迄は金壹錢、五圓迄は金貳錢、拾圓迄は金四錢の拂込料金を添へ、之を郵便局に差出さるれば、郵便局にては即座に受領票を拂込人に交付するを以て、夫れにて手續全部を了るものとす。拂込の際特に注意を乞ひ度きは、例へば金參圓を拂込まるゝ場合、上記の拂込書に參圓と記入さるゝ時は、爲替貯金局にて口座登記料金として金壹錢を差引たるものを、本會の貯金額に組入るゝが故に、實際本會の收入は金貳圓九拾九錢となり、規則に定めある金額の收入なきこととなるが故に、拂込に際し、右口座登記料金として、必ず一回金壹錢を附加せられんことを乞ふ。

斯の如くして拂込みたる金員は、金高と拂込人住所氏名を明記してある拂込通知票によりて、拂込より兩三日以内に本會に通知さるゝものなれば、本會にては之を證として何年何月何日某會員より幾何の金額を拂込みたるかを知り、直に之を會計簿に記入して各會員の會費納付高を知るなり。上記の如く拂込通知票は何れも振替貯金課より本會に直接送附し來るを以て、拂込の會費は何年度のものなるか、又は其の他本會に通知を要する事項あらば、之を拂込通知票裏面の通信文記載欄に記入されれば、別に郵稅を支拂ふことなくして本會に通信し得るなり。故に此の方法による時は、小

爲替にて會費を拂込むよりも少額の料金と遙に簡單なる手數を以て、途中盜難の患なく金員を拂込むと同時に通信し得るものなり。（小爲替にては金壹圓迄壹錢、五圓迄四錢十圓迄六錢の料金を支拂ひたる上、之を一一郵送する手數と郵稅とを要し且つ途中盜難の懼あり）。

振替貯金にて金員拂込の場合には、前述の如く郵便局にて即座に受領票を交付するを以て、之を保存し置かるゝ時は、万一拂込通知票が本會に送達せざりし場合ありとも、拂込の證據となり、後日拂込の有無に關する問題万一に惹起することありとも、立所に解決を見るを得ん。

從來大會又は小集會の席上、現金にて幹事に手渡しさるゝ向ありしも往々拂込不明となることあり、時には幹事の私財と混ずるの懼あるを以て、現金納入は中止せられ度く、又銀行爲替は徒に手數を要する事あるが故に、是亦本會に對して斷じて使用せられざる樣希望す。

從來會費拂込毎に受領書を差出したるも、以來は誌上に揭載して領收證に代ふべきを以て、万一誤謬又は遺漏を發見されたる場合には、即座に本會事務所に照會せられ度し。

○會費の改算に就て

山岳第十三年四百二十六頁に豫告したる如く、新會則の實施に伴ひ、從來半端なりし會費を年度割のものに引直す計算に就ては、次の方針に基きて計算を行ひたり。

一、或年度の雜誌を其第一號より配布を受けたる會員には入會の年月に拘らず其年度の全額を納付せしむ。

一、或年度の雜誌を其第二號より配布を受けたる會員には、其年度の分は金壹圓參拾錢を納付せしむ。

一、或年度の雜誌を其第三號より配布を受けたる會員には、其年度の分は金六拾錢を納付せしむ。

本會の會費は元來雜誌代とは全然性質を異にするものにして、年額を以て定められたるものなる故、入會の月次によりて、其年度の額に差異を生

ずべきものには非ざるべき筈なるも、從來は半途よりにても起算をなしつゝありしを以て、其點に意を用ひて前記の如くに定めたるものにして、其金額は決して雜誌各號の値を示すものには非ず。從て、決して雜誌代とは比例せず、此點は充分に了解あらん事を希望す。

以上の方針に基く改算の結果は、大正八年十一月初旬を以て會員各位に通告したり、故に右通告を受取られざる諸君並に改算の結果に誤ありと思惟せらるゝ諸君は、其事項を明記して本會事務所宛にて質疑ありたし、但返信を求めらるゝ向は、問合せの書狀に返信料を添へらるゝを要す。

尙右を誤解され若しくは他の原因よりして不足未納額拂込に際し、餘分の金額を支拂はれたる會員あり、右餘分額は、大正九年分に繰込む事となしたるを以て其旨承知せられたし、尙大正九年度分より會費年額金參圓となるべきを以て其心組あらん事を乞ふ。

○第五回小集會記事

大正八年九月七日午後一時半より東京麹町區紀尾井町清水谷皆香園に於て武田幹事司會者として開會、席上新著の外國雜誌圖書の展覽あり、正二時より左の講演ありたり。

一、黑部川　木暮理太郎氏

木暮氏は先づ黑部川流域の地勢より同川本流支流の大略を述べ、次に昨年七月下旬より八月上旬に亘り、本會幹事中村清太郎氏と共に愛本を經て鐘釣溫泉に至り、同地にて十二分の準備を整へ、佐々木助七を嚮導とし、宇治長次郎其他人夫五名を從へ、黑部川の左岸に沿ひて溯り、野臥四夜にして仙人谷の合流點に達し、それより仙人谷を遡りて劒澤に出で、立山室堂に一泊し、翌日風雨を犯して蘆峅寺に下られたる旅行談を詳細に語られたるが、黑部峽谷の凄絶美及び沿岸並びに水中に湧出する溫泉の如き、聽衆の注意を惹けるもの多かりき。

二、多摩川相摸川の分水山脈　武田久吉氏

武田氏は大菩薩連嶺の一地點より東に派出する多摩川相摸川の分水山脈につき、多數の地圖、寫

眞、スケッチ等を示して講演されたるが、同氏の見解によれば、分水山脈は四箇の山脈より成るものにして、第一區は天狗棚山より御坊山、佐野峠を經て大室山（權現山）扇山等に連る山脈中御坊山に至る部分、第二區は三頭山より生藤山を經て臼杵山、刈寄山等に連る山脈中和田峠に至る部分、第三區は陣場ケ峰より景信山を經て高尾山に至る山脈のオホダルミ峠に至る部分、第四區は大平山より高山、榎之窪山を經、七國峠に連り、終に八王子街道に略平行して、辻の東なる高距一〇〇米の高尾山に至る山脈の中、境川（武相界）の發源地迄の部分に別つを至當なるものとし、其の主脈並に支脈の地勢山名より、歷史的に興味ある點につきて述べられたり。

來會者は本會々員冠松次郎、別所梅之助、酒井忠一、木村鎭吉、松本善二、中山益太郎、高橋鎰三郎、若林祐治郎、高田達也、矢田城太郎、三輪正雄、鈴木益三、茨木猪之吉、佐武正一、岡田美津男、川口敏郎、村高幹博、佐野七郎、北澤基幸、岡埜德之助、加山龍之助、忽滑谷安美、岩永信雄、横山光太郎、辻村伊助、宮川久雄、六鵜保、米澤竹三郎、山口成一、谷內重夫、野口誠、中村左衞門太郎、佐藤文二、青木軍二郎、中條常七、高畑棟材、中澤眞二、村越匡次、木暮理太郎、井染道夫、鶴岡松太郎、武田久吉、高野鷹藏、鳥居忠博、梅澤親光、佐藤巳之吉、別宮貞俊、中野謙、大島永明、田中薰、山本宣治の五十三氏にして、尙會員外十名の來會者あり、點燈後に至りて散會したり。

○第六回小集會記事

大正八年十一月九日午後一時より麹町區清水谷皆香園に於て辻村幹事司會者として小集會開催。新着海外諸雜誌及び寫眞展覽の後、一時半より左記の講演あり、午後六時閉會せり。

高山植物の栽培に就て　農學士　辻村伊助氏
上信國境の山旅　理學博士　武田久吉氏

來會者氏名左の如し。

戶澤英一、黑田孝雄、沼井銕太郎、堀龜雄、宮本璋、中村孝二郎、森喬、村越匡次、山本宣次、青

木軍二郎、濱名增雄、横山光太郎、高橋鐳太郎、宏直彌、酒井忠一、武井眞澄、佐藤文二、山崎武二、三宅驥一、松本善二、木暮理太郎、近藤茂吉、武田久吉、辻本伊助の二十四氏及會員外の來會者五名。

辻村農學士講話概略

近來登山者增加に伴なふ高山植物亂獲と植物保護法令に關し、稀品採集許可證下附の弊害を例示してその不徹底なるを說き、保護法の積極的なるべきこと、即ち原產地より採種繁殖して後、再び山岳に播種移植するの捷徑なるを述べ、それに關する栽培法は決して從來考へられたる如く困難に非ること、少許の例外を許せば、高山植物の大多數は容易に栽培せらるゝことをのべたり。次に發芽に關する從來の研究の不備を指摘し左の條項に就て約二時間の講演ありたり。

種子の生活力——自生地に於ける繁殖と園藝上の繁殖法——種子による繁殖法の得失——一二年生植物種子の性質——宿根生植物種子の性質——分類上より見たる植物種子の發芽難易——種子の個性による發芽難易とその原因——マイコライザ及びバクテリヤの種子に對する影響——發芽の際に於ける種子のチモーゲン及び酵素の變化——酸度の增減と發芽との關係——日光の影響——紫外線が果して發芽を促進するか——酵素に對する紫外線の影響——酵素に對するオゾーンの影響——アーク燈による發芽刺激と氏の實驗——積雪の影響——電流による刺激實驗——稀薄酸による發芽影響——硬實と發芽の關係並にその促進法——種子貯藏中に於る化學變化——土性と植物との關係——石灰好惡に關する疑問——高山植物と石灰率の關係。

武田久吉氏講演梗概

同氏は上州信州の國境が主として新火山岩より成る處の高山によりて劃され、其の中には淺間山の如き活火山あり、又國境に近き白根山（草津白根）は近年に至る迄再三爆裂したるのみならず、山頂の湯釜及山腹の萬座溫泉附近には猛烈なる硫氣孔の存するあり、或は横湯川上流に於ける地獄谷噴氣孔、太古岩の如き火山作用の遺跡あるを以

て、地質學を修むる者及火山地形學の研究者にとりては絶好の研究地なるのみならず、各地に湧出する豐富なる溫泉は、旅舍の設置を促すが故に、一般登山客の根據地として、單に宿泊のみならず沐浴にも便多きを以て、登山旅行地として絶好なるものなるも、一部の山地殊に上、信、越の境に近づくに及んで繁茂するネマガリダケは、往々登攀を不可能ならしめ、又は困難の至大なるを覺悟せざる可からざるも、一部は登降甚だ容易にして、而も興味甚だ深きものなることを述べ、次て氏が大正八年八月中旬以後、豐野より安代溫泉に至り、辻本博士の驥尾に附して、地獄谷に遊び、更に波坂を上りて澗滿瀑、琵琶池、丸沼、蓮池、大沼池を探り、發補より岩菅山に登りて山頂の新石室に二泊し、雨を犯して裏岩菅に達し、其後單身發補より燒額に登りて奥高天原に遊び、琵琶池の西を廻りて草津街道に出で、熊ノ湯より笠ヶ岳に登り、又國境を上州に越ゆるの途次、澁峠より横手山に登り、霞ヶ平に下りて白根に上り、山頂を一周の後萬座溫泉に下り、その附近を探勝の後萬座川に沿ひて干俣に下り、上ノ貝を經て田代に出で、鹿澤溫泉より湯ノ丸山に登りて新張に下り、天候不良の爲めに淺間以東を放棄して歸京されたる大要を、通路附近の風景約七十枚の寫眞を示して物語られたり、氏の經驗によれば、岩菅山頂の石室は設計の法宜しからざる爲め、最も不便不快なる建物なる由、又登山根據地として發補の天狗ノ湯、萬座の日進館は推奬に値するものにて、鹿澤溫泉は三年前燒亡後全く荒廢して未だ恢復するに至らず、宿泊地としては原始的なることを以て名ある熊ノ湯にも劣ること數等なる由なり。

○幹事改選に就て

新會則第七條により、本會は大正八年十月二十五日を以て會員各位に幹事一名の選擧を乞ひたり。右投票は大正八年十一月十日の投函を以て締切る事となしたるを以て、二週日の郵送を見込み、大正八年十一月二十六日に事務所に到着したる分を日以て締切り（其後に到着したるものなし）同午後七時より評議員會を開きて、會員によりて選

ばれたる者につき審議の結果次の七名を新幹事として就任せしむる事を決定したり。（便宜上其後に定めし幹事の分擔任務を書き添へたり）

編輯　木暮理太郎　　編輯　中村清太郎
圖書　高野鷹藏　　庶務　高頭仁兵衞
庶務　武田久吉　　編輯　田部重治
記錄兼會計　梅澤親光

右七人の他に辻村伊助、辻本滿丸、近藤茂吉、山川默、三枝守博、冠松次郎、松宮三郎、岩村圓、別所梅之助、榎谷徹藏、石崎光瑤、福田門彌、加賀正太郎、田中喜左衞門、エルウィンの諸氏は夫々得票ありて、中には前記幹事よりも、多く希望せられたる者ありしも、一身上又は家事上の都合によりて就任を固辭せられしを以て、其人々を除き順序を以て前記七名に決定したるものにして、其人數は、本會の實務を執る上に必要なるを度として定めたるものなれば、他日會務の繁多を來す等の事ありし節は、今回の得票を新幹事の任期中有效なるものと見做し、適時に評議員會の決定によりて、更に幹事の補充をなす事あるべし。

尙右の外草薙彊氏も相當の得票ありしが、同氏は日本アルコウ會の代表者として入會せるものなれば、被選擧權なきを以て除外したり。同氏以外に會員名簿に明記せる如く團體の代表者として、入會したる者あり、次回選擧の際には特に注意あらんことを希望す。尙又投票に幹事の姓名を記さずして、他人の選定に委任したるものありしも、右は無效と認めたり。

○會務報告

大正八年九月七日午前十時より東京麹町清水谷幷香園に於て幹事會を開き、左記の事項につき協議す。

一、本會々務刷新につきて、一、事務所變更につきて。一、外國交換雜誌種類選定につきて。一、モナコに於ける万國山岳大會へ代表者出席可否につきて。一、小集會規定變更につきて。（別項參照）

（出席幹事）木暮、中村、高野、武田、辻村、梅澤。

同九月二十七日午後三時より舊事務所に於て事務所變更に關する細目の打合せをなし、且つ幹事改選の實行方法に就きて特別委員會を開く。

（出席幹事）高野、高頭、武田、梅澤。

同十月十五日本會事務所を移轉す（別項參照）。

同十月十六日午後七時より本會事務所に於て編輯會を開き「山岳」第十四年第一號分の原稿を整理し、且雜誌印刷上の體裁及用紙變更を議定す。

（出席幹事）木暮、中村、武田、梅澤。

同十月三十一日より十一月一日に亘り本會事務所に於て會計簿整理會數次開く。

（出席幹事）近藤、武田、梅澤。

同十一月九日午前九時より清水谷當香園に於て幹事會を開き、左記の件附議す。

一、會員章變更。一、會員章再貸與規定（別項參照）。

一、不在會員取扱規定（別項參照）。正會員大平晟氏を名譽會員に推薦。

右終りて入會申込者十七名に對し銓衡を行ひ、左記十四氏入會を許可せらる。

伊藤新三、中水正雄、島田武重、松井幹雄、鳥生鶴吉、石井鶴三、田中儀助、後醍院正六、寺島理吉、一柳勝一、武田鎌次郎、Richard Irwin, Emily Sindle Elwin, Irvine Harvey Williams

（出席幹事）木暮、近藤、高野、武田、辻村、梅澤（委任）。

同十一月二十六日午後六時半より本會事務所に於て評議員會を開き左記の諸件附議す。

一、正會員白井光太郎氏を名譽會員に推薦。一、幹事改選（別項參照）。一、基本金增加案。一、万國山岳會大會に加入し、同會に地圖類出品。會員章製作に關する特別委員（中村、武田、梅澤）指名。

右終りて入會申込者證銓の結果、左記の七氏入會を許可せらる。

石橋徹。石井謙三郎。藤島敏男。小林修明。山根精一。山田篤四郎。T. H. E. Shaw.

（出席評議員）木暮、近藤、中村、三枝、高野、高頭、武田、辻本、梅澤、辻村（委任）、山川（委任）。

會者

（歐文圖書は英文欄に掲載せり）

○會員名簿

本號には會員名簿を添附する豫定なりし處、在外國會員中住所不明及び會費滯納の向少なからず、其の調査整理豫期の如く進捗せざりし爲め、遂に時機を失したるが、右近々結了す可きにより、名簿は次號の附錄として、全會員に頒布す可し。住所移轉、改姓名等の方は、大至急書面を以て事務所に届出でられ度し。

○規則の正誤

「山岳」第十三年第三號一三七頁以下に掲載したる本會規則中一二の誤植ありたるを以て左に正誤して大方に謝す。

	誤	正
第一條	(Japan Alpine Club)	(Japanese Alpine Club)
第五條	爲ズ	爲カズ
第十三條	拂込ルベシ	拂込マルベシ
第二十四條	規則ヲ變更スルニハ	規則ノ變更ハ

尙ほ「山岳」第十三年第三號は從前の印刷所にて印行したる爲め本會事務所移轉後發行したるに係はらず印刷所の錯誤にて當事務所の番地を記入する失態を演じたり大方の了恕を乞ふ。

○本會規則抜萃

（大正八年六月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ

第四條　本會ハ毎年大會及ビ小集會ヲ開ク

第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ、一切ノ會務ヲ處理セシム

第六條　本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム

第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ本會幹事ノ推薦ニヨルモノトス

第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）

第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ前納スベキモノトス（下略）

現任幹事（七名）

木暮　理太郎　　中村　清太郎　　高野　鷹藏
高頭　仁兵衛　　武田　久吉　　田部　重治
梅澤　親光

評議員（十四名）

城　數馬（在朝鮮）　小島　久太（在桑港）　近藤　茂吉
三枝　守博　　辻本　滿丸　　辻村　伊助
山川　默　　現任幹事七名

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと
一、行數は隨意なれども毎紙一定のこと、各行二十二字詰とし字體は明瞭に認むること
一、、○「」（）等は各一字分の積りに認め別に行を立つる時は一字下げのこと
一、原稿は必ず左記へ宛て御送附のこと

東京市本鄕區駒込蓬萊町三一　木暮理太郎

尚ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、又原稿は一切返戻せず。

會員各位告ぐ

本誌の發行は、大正三年十月以後、漸次に遲れて年度と伴はず、斯の如きは其間已むを得ざりし事情の存するもの多かりしに因るも、顧て忸怩たらざるを得ず、今や會務の刷新と共に努めて此不體裁を除去せむことを期せり、幸に諒恕を乞ふ。

本號は續て刊行す可き第二、第三號と共に大正八年度のものに係るを以て、以下事情の許す限り速に發行を繼續し、以て大正九年度に及ぼさんとすしかも原稿の多少は本誌發行の遲速に大關係あるが故に此際會員各位は勉めて原稿を寄せられむことを切望す。

大正九年二月十三日印刷
大正九年二月十五日發行

著作權所有

〔定價金壹圓〕

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市麹町區富士見町四丁目六番地　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

山岳圖書大販賣

今般山岳研究の權威たる左記の圖書雜誌（何れも新本）非常の苦心を以て手に入れ候に付同好諸彦に限り貴需に應じ申可く候間品切れとならざる内續々御注文被下度伏て希上奉り候　敬白

高頭式先生編纂

日本山嶽志

全一册　正價金貳圓　送料金貳拾錢

日本山岳會發行

高山深谷

第五輯　實價金拾圓　送料金拾貳錢

（但シ一部限り）

山岳

第二年第二號。第三年第三號。第五年第二號、第三號。第六年各號。第七年各號。第八年各號。第九年各號。第十年第二號。第十一年各號。第十二年第一號、第二・三號（合冊）以上年一號により定價皆異り候へば御註文に先ち一應御照會被下候樣願上候。

東京市芝區高輪南町三十番地

健全社書店

振替口座東京三二〇五二番

○會費領收廣告

大正九年一月二十五日迄に本會に於て受領せる會費左の如し。大正九年度未納の方は速かに拂込まれ度し。

○大正八年末迄

東京府——阿部國治殿。相澤肇殿。赤木樟一殿。青木軍二郎殿。[illegible]生武治殿。坂東英造殿。別宮貞俊殿。別所梅之助殿。H. Carew殿。中條常七殿。E. S. Elwin 殿。藤島敏男殿。藤田敏雄殿。藤山愛一郎殿。福原信一殿。福井玉夫殿。福永一良殿。福澤桃介殿。船橋了助殿。古川雄郎殿。二木末雄殿。何英吉殿。J. G. S. Gansden 殿。濱名增雄殿。原田憲二郎殿。長谷川萬次郎殿。長谷川敏郎殿。橋本一郎殿。服部正殿。服部與兵衛殿。日比野信一殿。日高信六郎殿。日置繁雄殿。平福百穗殿。平本淳一殿。平牛定次郎殿。宏達彌殿。寶園信孝殿。堀龜雄殿。星野光之助殿。細川賀茂殿。J. Hunziker. 殿。茨木猪之吉殿。井口武英殿。飯田光太郎殿。飯塚篤之助殿。伊木常誠殿。池田金太郎殿。池野成一郎殿。今田十五郎殿。今村巳之助殿。井上禧之助殿。石田竹太郎殿。石田常平殿。石井鶴三殿。石川光春殿。石谷讓二殿。伊藤新三殿。伊東祐弘殿。岩佐理藏殿。岩崎康彌殿。井染道夫殿。龜谷得太郎殿。神木信次郎殿。金子幾久殿。川口敏郎殿。河合良成殿。風間禮助殿。木村惠吉郎殿。木村鑛吉殿。木下友[illegible]郎殿。岸本卯之助殿。北上宗八殿。小林修明殿。小南清殿。河本清殿。小山武三殿。久保末廣殿。黑田清殿。黑田長敬殿。果田孝雄殿。桑原金之助殿。町田平次郎殿。槇山次郎殿。丸山晩霞殿。正木音次郎殿。正木多吉殿。又木周夫殿。松田舒殿。松平康民殿。松隈國健殿。松宮三郎殿。松本信廣殿。松本善二殿。月黑四郎殿。蓑田喜太郎殿。三輪邦太郎殿。三輪正雄殿。三宅市郎殿。三宅驥一殿。宮本璋殿。宮田榮太郎殿。森喬殿。森俊成殿。森井喜一郎殿。[illegible]永一殿。盛田保三殿。村田太殿。村高幹博殿。永井甫十郎殿。長澤一夫殿。內藤久寬殿。中川嘉一郎殿。中島清殿。中上川小六郎殿。中村有一殿。中村孝二郎殿。中村直男殿。中西周輔殿。中野德郎殿。中野謙殿。中山益太郎殿。中澤眞二殿。西脇健治殿。野口誠殿。野口米次郎殿。野崎靜太郎殿。沼井鐵太郎殿。大場義人殿。越智主一郎殿。小倉伸吉殿。大橋進一殿。大井信勝殿。岡田美津男殿。岡野榮殿。岡禁德之助殿。大木操殿。奧野市次郎殿。大西喜作殿。小野崎良三殿。大島文郎殿。大島永明殿。織田信大殿。太田孝之殿。大竹莊介殿。大谷光明殿。大內武次殿。六鵜保殿。西園寺八郎殿。西園寺暢殿。坂入實殿。齋藤龜之丞殿。齋藤新一郎殿。酒井忠一殿。佐野七郎殿。山東隆殿。佐々木高美殿。佐武正一殿。佐藤文二殿。佐藤傳藏殿。佐藤巳之吉殿。F. N. Shea 殿。志立鐵次郎殿。芝龜吉殿。柴崎芳太郎殿。志摩象雄殿。島田武重殿。島崎春樹殿。下村清次郎殿。鹽野叙光殿。白石萬吉殿。尙昌殿。左乙女謙吉殿。杉山正重殿。鈴木防人殿。高木菊三郎殿。高橋政治郎殿。高橋鎬三郎殿。高畑棟材殿。高畑良材殿。高松誠殿。高瀨春曉殿。高島得三殿。高田達也殿。武井眞澄殿。武居辰市殿。竹下政之助殿。玉井敬泉殿。田部重次殿。田部隆次

殿。田邊義雄殿。田中薫殿。田中富彌殿。立田銕次殿。寺島理吉殿。戸田與四郎殿。富永太郎殿。伴野清殿。鳥居忠博殿。遠山祐三殿。豐田金之助殿。戸澤英一殿。坪谷善四郎殿。辻莊一殿。辻村太郎殿。鶴岡松五郎殿。內山忠助殿。薄井貴六殿。若林祐治郎殿。渡邊六郎殿。渡正監殿。山田健吉殿。山田廉殿。山口成一殿。山川幸雄殿。山本宣治殿。山本暉吉殿。山內淳一殿。山內貞三殿。山下助四郎殿。山崎直方殿。柳田國勇殿。矢野宗幹殿。矢田城太郎殿。横江長次郎殿。横山光太郎殿。米澤竹三郎殿。與謝野寛殿。吉田白嶺殿。吉澤愛三殿。

京都府——古田榮治郎殿。樋口誠康殿。比企忠殿。市村光惠殿。石崎光瑤殿。金井千仞殿。雉本朗造殿。岸本七郎殿。小山源治殿。久保雅友殿。久保田善三郎殿。松方義三郎殿。三上治三郎殿。三上捨三殿。本野精吾殿。仲庄太郎殿。中川善太郎殿。中野忠八殿。中山再次郎殿。中澤利八殿。西繁殿。西村齊次郎殿。野平安藝雄殿。小川琢治殿。佐々木德兵衛殿。關口泰殿。下村忠次郎殿。宍戸一郎殿。杉若金一郎殿。多田佐一郎殿。高橋勇次郎殿。竹內栖鳳殿。田邊朔郎殿。田邊多聞殿。田中喜左衛門殿。田中清之丞殿。富田溪仙殿。都路華香殿。塚本純一殿。H. G. Tucker 殿。山田篤四郎殿。山元春舉殿。山添直一殿。吉田喜太郎殿。

大阪府——朝輝記太留殿。土井達雄殿。藤野磯次郎殿。後醍院正六殿。後藤市藏殿。濱谷泰次郎殿。日比吉次郎殿。伊藤英三郎殿。加賀正太郎殿。梶原啓文殿。龜岡季次郎殿。笠原正吉殿。加藤榮殿。川井源八殿。木間瀨策三殿。木下東作殿。岸本金三郎殿。北谷與一殿。小塚辰次郎殿。小島榮殿。米谷富三殿。政友巖三殿。松代鍋種殿。森田謙一殿。中江種一殿。新田谷晴埜殿。王子德三郎殿。齋藤直一殿。坂上實殿。佐々木基水殿。瀨古理一殿。鹽田菊太郎殿。宗得恒三郎殿。高浦吉三郎殿。武田千代三郎殿。竹下英一殿。田邊信太郎殿。築山廣一殿。植村光殿。宇野武男殿。D. S. Willis 殿。八木元治殿。山田種三郎殿。山口末次郎殿。山本重次郎殿。山崎彥麿殿。義山正猶殿。結城豐太郎殿。

横濱市——G. C. Alleock 殿。E. H. de Bunsen 殿。藤田未類二殿。平沼亮三殿。廣瀨正雄殿。稻垣玄三郎殿。岩永信雄殿。梶原覺三殿。鎌瀨貞藏殿。神田騰一殿。河鰭達夫殿。加山龍之助殿。北澤基幸殿。近藤藟三殿。桑原福太郎殿。E Mendelson 殿。宮川久雄殿。村上伊兵衛殿。村岡齊殿。中村房次郎殿。P. Nipkow 殿。野田哲造殿。大橋清藏殿。大島敬治殿。Paravicini 殿。佐伯立四郎殿。佐伯藤之助殿。佐々木健太郎殿。下村重次郎殿。M. Schellenberg 殿。關戸一平殿。杉浦晋殿。高畠和雄殿。W. A. Tomlinson 殿。上野誠一殿。渡邊和太郎殿。山中太三郎殿。山崎小三殿。米本賢殿。

兵庫縣——阿部安積殿。青山好孝殿。朝比奈靜雄殿。W. Cliff 殿。船江廉二殿。後藤正彥殿。葉谷忠三郎殿。庵原清殿。石井謙三郎殿。石岡保三殿。飯島庸德殿。石川文彥殿。加古儀平殿。神吉志耕殿。近藤悌助殿。熊谷建三殿。草薙彊殿。桑名芳夫殿。H. W. Malcolm 殿。正垣儀之助殿。松井邦三殿。松本幸次殿。森月城殿。森剛馬殿。中原繁之助殿。中澤政次郎殿。能登定吉殿。L Nuzum 殿。岡田英定殿。大迫武吉殿。大歲正雄殿。坂田治三郎殿。下畑保太郎殿。高城荒三殿。高砂要三殿。竹下一德殿。武山良次殿。

田中長三郎殿。田中儀助殿。田中次郎殿。田中孝雄殿。富永恒太郎殿。津田素彥殿。辻川熊太郎殿。塚本永堯殿。氏家竹次郎殿。J. P. Warren 殿。山岸信意殿。山根精殿。山崎敏太郎殿。安井元吉殿。横山次郎吉殿。由利三左工門殿。

北海道——石橋徹殿。一色周知殿。加納一郎殿。大井上義近殿。清水實隆殿。竹內亮殿。

青森縣——橋本音次郎殿。小笠原松次郎殿。

秋田縣——泉茂家殿。渡邊新三郎殿。

山形縣——加藤完治殿。米良立雄殿。

岩手縣——伊勢貞三郎殿。鳥羽源三殿。

宮城縣——井上良一殿。飯柴永吉殿。河村多郎殿。蜷川睡之助殿。佐藤武雄殿。

福島縣——早川材二殿。

群馬縣——瀧川茂三郎殿。

千葉縣——馬場善兵衛殿。深井吉兵衛殿。安川尙三殿。

茨城縣——佐藤順一殿。

栃木縣——清水兵吉殿。原田覺一郎殿。

埼玉縣——山崎吉之助殿。

神奈川縣——石上定海殿。蒲原隼雄殿。永島重吉殿。鈴木益三殿。矢野英太郎殿。

靜岡縣——木下房三殿。佐藤榮一殿。

山梨縣——綱野新左工門殿。橋本欽四郎殿。杉原伊三郎殿。

長野縣——平林廣人殿。久山淑人殿。一柳勝一殿。穗刈三壽雄殿。今井五介殿。石川源司殿。神津猛殿。加藤惣吉殿。川島祿郎殿。河野齡藏殿。前澤政雄殿。牧伊三郎殿。丸山尙殿。百瀨亥三松殿。百瀨愼太郎殿。佐藤道太郎殿。曾根原耕造殿。高橋幹夫殿。武田謙次郎殿。瀧澤彥太郎殿。土橋莊三殿。鵜殿正雄殿。矢澤米三郎殿。

富山縣——石黑淸藏殿。佐伯數馬殿。佐々木幸次郎殿。吉田孫四郎殿。吉澤庄作殿。

石川縣——林並木殿。林常雄殿。市村塘殿。松方義輔殿。西村眞一郎殿。大島時殿。

愛知縣——天野富之助殿。淺野信二殿。久山寅一郎殿。稻葉市三郎殿。伊藤鎭之助殿。伊藤孝一殿。小林良之助殿。久野眞苗殿。村瀨圭殿。圍本三郎殿。佐々木綱雄殿。佐藤鍬吉殿。種田保彥殿。梅村萬藏殿。

岐阜縣——二木長右衛門殿。今村奇男殿。小野隆義殿。住廣造殿

滋賀縣——犬井英夫殿。辻川信次殿。

三重縣——大西源一殿。洲崎隆一殿。上田濟吉殿。山本政三郎殿。

奈良縣——古家實三殿。米谷彥男殿。宮田琴治殿。

山口縣——西澤平治殿。田村旨達殿。山本信次殿。

廣島縣——藤井乾助殿。中木正雄殿。宇野太郎殿。

岡山縣——山本德三郎殿。

福岡縣——伊藤德之助殿。松本良一殿。野口萬平殿。高椋悌吉殿。山田紹之助殿。山本武男殿。山根義道殿。

長崎縣——橋本辰二郎殿。佐雙定雄殿。

福井縣——經國若亮殿。

高知縣——吉永虎馬殿。

愛媛縣——村川章次殿。野原萬里殿。佐々木一郎殿。高橋恒麿殿。谷泰吉殿。

鳥取縣——土肥俊殿。

新潟縣——安達寅松殿。旗野雅美殿。今泉鐸次郎殿。井上專行殿。

石渡三郎殿。覺張治平殿。松田周平殿。目黑十郎殿。野本靜治殿。

小川長八殿。小川□殿。佐藤定八殿。品田豐一郎殿。內田滿二殿。

渡邊六松殿。渡邊藤吉殿。橫尾義智殿。

臺灣——古賀朝一郎殿。野呂寧殿。野澤滉殿。志村寬殿。渡邊英太郎殿。

朝鮮——芦田卓藏殿。N. M. Macrae 殿。F. J. L. Macrae 殿。中山勝之助殿。杉本良殿。勝鉦次郎殿。

支那——井上伊八殿。岩城正二殿。梶平治殿。三上孝司殿。中土庄之助殿。大木良藏殿。P. H. F. Shaw 殿。田中秀作殿。

米國——今村幸勇殿。勝木市太郎殿。豐川良之助殿。山中五郎殿。

英國——神尾毅一殿。八代準殿。

○大正八年末迄、外に金壹圓領收

東京府——星野爲太郎殿。神尾錠吉殿。中村左衞門太郎殿。岡田元殿。上原亨祿殿。山崎武二殿。橫山俊平殿。吉川遠勇殿。芝野安兵衞殿。

兵庫縣——福田門彌殿。

北海道——山林遲殿。

長野縣——手塚順一郎殿。

石川縣——吉岡八二郎殿。

愛知縣——八木道三殿。

愛媛縣——淺井記博殿。

○大正八年末迄、外に金壹圓參拾錢領收

東京府——岩村圓殿。

○大正八年末迄、外に金貳圓六拾錢領收

兵庫縣——橘正一郎殿。

○大正八年末迄、外に金七拾錢領收

京都市——森平藏殿。

大阪府——大平千吉殿。田口虎之助殿。

○大正八年末迄、外に金貳圓領收

東京府——廣瀨龍次殿。礒貝藤太郎殿。野口幽香子殿。

大阪府——小林鹿藏殿。

兵庫縣——N. Libeaud 殿。

米國——西村武一郎殿。

○大正八年末迄、外に金貳圓四拾錢領收

大阪府——東光治殿。

○大八年末迄、外に金貳圓七拾錢領收

東京府——岡庄五殿。

○大正八年末迄、外に金壹圓四拾錢領收

神奈川縣——澤田武太郎殿。
高知縣——齋藤兵三郎殿。

○大正八年末迄、外に金六拾錢領收

富山縣——佐伯忠胤殿。

○大正八年末迄、外に金七拾五錢領收

愛知縣——村野時敬殿。

○大正九年末迄

東京府——W. H. Erwin 殿。伊丹英之助殿。松井幹雄殿。村越匡次殿。二階堂保則殿。雄山通季殿。芝崎安秀殿。高木伊八殿。谷内重夫殿。島山悌成殿。塚本丈助殿。山下雄昇殿。I. H. Williams 殿。
京都府——神谷仙一郎殿。三木市太郎殿。宮部市次郎殿。上田清太郎殿。山中重吉殿。
大阪府——榎谷徹藏殿。影山寅造殿。西井常造殿。大中德三郎殿。杉浦龍之助殿。山中治三郎殿。
橫濱市——O. M. Poole 殿。H. Treichler 殿。
兵庫縣——B. Abraham 殿。有坂忠平殿。別所史郎殿。H. E. Daunt 殿。毛馬新次郎殿。小谷桂三殿。長野武之亟殿。直木重一郎殿。岡本治之助殿。乘野善二郎殿。渡邊萬太郎殿。山口賢次郎殿。山崎義一殿。
秋田縣——奈良環之助殿。
宮城縣——角倉邦彥殿。
栃木縣——濱田千三郎殿。原田保之助殿。
長野縣——八木貞助殿。
愛知縣——深見太郎左衞門殿。松岡利英殿。村井德三殿。祖父江重兵衞殿。
滋賀縣——馬場孫七殿。井花伊左衞門殿。
廣島縣——島生鶴吉殿。W. H. M. Walton 殿。柳直次郎殿。
和歌山縣——榎本佳樹殿。
福岡縣——蒲瀨知足殿。
福井縣——大野源五郎殿。
愛媛縣——松岡貞藏殿。
朝鮮——楠常藏殿。
支那——F. Dinsdale 殿。A. G. Hearne 殿。片平重次殿。H. Middleton 殿。

○大正九年末迄、外に金壹圓領收

兵庫縣——竹田龍太郎殿。
富山縣——笹岡久彥殿。

○大正九年末迄、外に金壹圓七拾錢領收

石川縣——油谷源兵衞殿。

○大正九年末迄、外に金四拾錢領收

愛知縣——柴山乙彥殿。

○大正十年末迄

東京府——冠松次郎殿。G. Moillet 殿。大橋良一殿。
大阪府——山本隆三殿。

○大正十年末迄、外に金壹圓四拾錢領收

東京府——黑木三次殿。

○大正十年末迄、外に金貳圓領收

東京府——濱口麟藏殿。

PHOTOGRAPHIC ILLUSTRATIONS IN THE JAPANESE PART.

Page

(5) The late proprietor and his daughter of Kumanoyu Onsen, at the foot of Kasagatake.
Phot. by Dr. M. Tsujimoto.

(6) Yokote-yama (right) and Ikenotôyama from the triangulation station on the summit of Benten-yama
Phot. by Mr. S. Hidaka.

(38) Lake Nozori and Mt. Hachijûsan as seen from the triangulation station on the summit of Benten-yama.
Phot. by Mr. S. Hidaka.

(39) Ôtakayama from the triangulation Station on the top of Benten-yama. Phot. by Mr. S. Hidaka.

THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the Japanese Part of this number are :—

Ascents of Kasagatake and Yokoteyama, by Dr. M. Tsujimoto.

From the Diary kept during the Trip in Kyûshû, by Mr. H. Yoshioka.

An Ascent of Shirasunayama, on the Boundary between Jôshû, Echigo, and Shinshû, by Messrs. T. Mori and S. Hidaka.

Sculpture of Mountains, by Mr. T. Tsujimura.

Kanotoiwa and Gozen-yama, Pt. I, by Dr. H. Takeda.

PLATES IN THE JAPANESE PART.

Facing page

(8) 1. Kasagatake from Manzatôge.

Phot. by Dr. M. Tsujimoto.

2. The Shrine dedicated to Hiyori Tengu at the summit of Kasagatake.

3. A view towards S.E. from a spot near Onsenji at Shibu, including Mt. Bôdaira (left), Kasagatake (middle), Ko-gasa, and Nakagurayama (right).

4. Yokoteyama viewed from near Suzurikawa.

5. Kasagatake from the same spot as above.

2–5, Phot. by Dr. H. Takeda.

(40) 1. Kasagatake from the Shinshû side of Shibutôge.

2. Kasagatake viewed from Shiranesan over the Ridge between Jôshû and Shinshû.

3. Yokoteyama as seen from Shiranesan over the crater-lake Midzugama. 1–3, Phot. by Dr. M. Tsujimoto.

4. Kasagatake and Kogasa from the western end of Shibutôge. Phot. by Dr. H. Takeda.

(73) 1. Benten-yama viewed from the north-eastern shore of Lake Nozori.

2. View towards S. from Nembazaka.

3. Lake Nozori as seen from a saddle between Benten-yama aud Hachiken-yama.

4. Lake Nozori, from its southern end.

5. A somewhat similar view.

All by Mr. S. Hidaka.

payment of Yen 2 for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they should resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.

All payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account, which is the safest and simplest way of remitting money at home, or by P. O. O. payable in Tôkyô, when sent from abroad. *Neither cash nor cheques are accepted.* When sending money through Postal Transfer Account kindly add Sen 1 to the amount intended, this being the fee for registration of the sum at the Postal Transfer Account Bureau.

NEW MEMBERS.

The following new members have been admitted into the Club in November:—

Mrs. Emily Sandle Elwin, Sasugayachô 7, Koishikawa-ku, Tôkyô.

Mr. Richard Irwin, Kaminibanchô 36, Kôjimachi-ku, Tôkyô.

Mr. Irvine Harvey Williams, Hotel Central, 12, Tsukiji, Tôkyô.

Mr. T. H. R. Shaw, c/o Messrs. Butterfield & Swire, Shanghai.

MEMBERS EXPELLED.

Carl Thorn. O. F. Mocock.

PROCEEDINGS OF THE CLUB.

The Sixth Ordinary Meeting was held at the Kaikôen, Shimidzudani, Kôjimachi-ku, Tôkyô, on Nov. 9th, 1919, presided by Mr. I. Tsujimura. The following lectures were given:—

On the Cultivation of Alpine Plants... Mr. I. Tsujimura.

A Climbing Trip near and over the boundary between Jôshû and Shinshû... Dr. H. Takeda (illustrated with about 70 photographs).

Twenty four members and five guests were present.

An amendment of the rules regarding the Ordinary Meetings was made by the Officers at the Meeting held on September 7th as follows:—

Ordinary Meetings are to be held on the first or, when desirable, second Sundays in February, June, September, and November.

Each time they meet at a place which the Officer on duty considers to be suitable.

Members are entitled to bring or introduce theier friends as guests.

According to the meeting-place etc. a small sum is collected from each person present.

Each Meeting is managed by the Officers in turn.

Members who wish to receive a notice before each Meeting should send their names to the General Secretary.

The Officers have decided to change the design of the Club Badge. The new Badge will be ready for distribution by early April. Members are requested to send back their Club Badge for exchange.

Notice is hereby given that Badge being the Club's property and sent to each member on loan, members are particularly requested to be careful not to damage nor lose it. In case a Badge gets lost, the number should at once notify the General Secretary of the matter, and request him, on payment of Yen 2 until further notice, to send a new one.

Bye-laws regarding Absent Members have been provided for by the Officers as follows:—

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on

CLUB LIBRARY.

The following publications have been added to the Club Library since September 1919 :—

The Canadian Alpine Journal, Vol. X.	Banff, 1919.
The Mountaineer Bulletin, Vol. IX, Nos. 10–13.	Seattle, 1919.
The Bulletin of Prairie Club, Nos. 87–90.	Chicago, 1919.
Trail and Timberline, No. 16.	Denver, 1919.
The Mid-Pacific Magazine, Vol. XVIII, Nos. 4–6.	Honolulu, 1919.
Bird-Lore, Vol. XXI, No. 5.	New York, 1919.
The Alpine Journal, Vol. XXXII, No. 219.	London, 1919.
The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. XV, No. 88.	Edinburgh, 1919.
The Geographical Journal, Vol. LIV, Nos. 2–4.	London, 1919.
Alpina, Jahrgang 26, Nr. 8–10.	Genève, 1919.
Jahrbuch des Schweizer Alpenclub, Jahrgang LIII, 1918.	Bern, 1919.
La Montagne, 15me Année, No. 137.	Paris, 1919.
Svenska Turistföreningens Årsskrift, 1919.	Stockholm, 1919.
Butletti del Centre Excursionista de Catalunya, Any XXIX, Núm. 288–296.	Barcelona, 1919.
L'Echo des Alpes, 55me Année, No. 5–6, 7–8, 9–10.	Genève, 1919.
Revue Alpine, 22e et 23e Annees, No. 1.	Lyon, 1919.
The Annual Report of the Tourist and Health Resorts Department, New Zealand, 1919.	Wellington, 1919.
The Annual of the Mountain Club of South Africa, No. 22.	Cape Town, 1919.

The following books have been presented to the Club Library :—

John H. Williams—The Yosemite and its High Sierra, (Seattle, 1914.)	By M. Yagi, Esq.
Edward Whymper—How to use Aneroid Barometer, (London, 1891.)	By Rev. Walter Weston.
"Bell Goat"—Inaka, Vol. XI, (Kôbe, 1919.)	By H. E. Daunt, Esq.

was from appendicitis. It took place in October 1899 in the upper Engadin.

Giovanni Segantini who although only fourty years of age was already recognised as one of the greatest scenic painters of his time was painting the magnificent mountain scenery from Muttos Muraigl, living in an alpine hut 2800 metres above sea level. He was taken suddenly ill, but managed to send for help and my chief Dr. Bernhard went up and found his condition so serious that he remained with him. A few days later a message reached me: 'Hurry up here as quickly as possidle and bring everything necessary for an appendix operation.'

Two medical authorities of world wide reputation, Professors Erb and Neisser happened to be staying in St. Moritz as guests at the time and they were also summoned. Neisser, himself a very good mountaineer, decided at once to accompany me. He set a tremendous pace for those 1000 metres ascent from Pontresina to the primitive hut on Muttas Muraigl, occupied by poor Segantini but unfortunately the summons had come too late. General peritonitis had in the meantime developed and the patient was in that hopeless septic condition when even the physical suffering was passed, moreover owing to the altitude we found it impossible to raise the temperature of the interior of the hut to more than three degrees above zero, a temperature in itself which would have been fatal to the success of such an operation. The whole upper Engadin was already deeply wrapped in its wintry mantle of snow and the air was pregnant with that intense light of the high altitudes in winter on a cloudless day.

.Poor Segantini was still conscious. "Voglio vedere le mie montagne" "I want to see my mountains," he said fainly. It was a pathetic moment.

We gently raised him with pillows until the Kings of these summits Piz Bernina and Palu, luminous beyond description, appeared in the little window of the hut facing his cot, and with these glorious Peaks which he loved so well before his fading eyes, the great Master died.

fig. 8 after Warbasse: Surgical Treatment.
(W. B. Saunders Co.)

the others after Eliason: First Aid in Emergencies.
(Lippincott Co.)

---

stretcher or litter, but a good emergency litter can be formed with a chair (fig. 10) or with the aid of two coats and two poles. Turn the sleeves of the coats inside out, place the coats on the ground ends reversed, that is, tail to tail, run the poles through the sleeves, and button up the coats having the buttoned up side underneath. A blanket and two poles can be made to serve the same purpose (fig. 8) by rolling in the ends of the blanket to the poles and as additional security, tying the extremities of the blanket to the poles. In undressing an injured man, slip the sound limb out first or rip the garment up the seams or cut them.

I have confined myself so far to surgical lesions, as real accidents are surgical cases, but sometimes sudden internal troubles assume nearly the importance of accidents and require immediate attention. The means here are simple: for fevers, rest and liquids only, assisted by a few doses of aspirin, a remedy which is also useful for headache, earache, toothache, rheumatism, and which is always worth being carried along together with a few laxative pills or salt and some Dover's powders to stop diarrhoea and cough.

It is of great importance not to confuse indigestion and ptomain poisoning caused from eating bad fish or canned meats that have become spoiled, with the more serious abdominal complaints such as peritonities, due to intestinal perforation and particularly with appendicitis. All these things occur occasionally with the suddenness of a catastrophy in the mountains and while in the case of the last named, absolute rest and starvation offers the only hope, simple indigestion and ptomain poisoning do better if a good amount of stimulating hot liquids, tea or coffee, are allowed, and laxatives are given. In cases of appendicitis the giving of these latter things has caused the death of many a man whose life would have been saved by rest and absolute abstention even from liquids.

All these complaints have in common: nausea, vomiting, pain pallor, faintness prostration, weak pulse, and sometimes collapse, but in indigestion and food poisoning the pain is usually of a colicky intermittent character, which is relieved by pressure on the abdomen, and usually diarrhoea sets in, and the condition shows a tendency to improve.

In intestinal perforations the pain is extremely distressing and continuous, pressure is unbearable, and in appendicitis the pain usually locates in the right lower abdominal quadrant, below the level of the navel and there is pronounced tenderness and muscular rigidity in that region, and a rising temperature.

The most tragic death I have ever witnessed in the mountains

suspicion of a fracture near the joint. But the most important thing in all these cases is the immobilisation of the affected limb by the use of splints. These you will not find in any first aid packet, so you have to improvise them. Sticks, branches of trees, bamboo, strong bark, clothes, rugs, blankets make good material. A very good splint or even a stretcher can be formed out of two poles and a blanket (fig. 8). If none of these things are at hand a broken leg may be tied to its healthy companion or a broken arm to the chest. A splint must be applied on two or more sides of a broken extremity and always reach beyond the joints above and below (fig. 9). The best position for the limb is the one in which the patient suffers least. In compound fractures where the skin is torn or pierced with sometimes fragments of bone sticking out, a dressing is of course necessary and special care must be taken in handling the part.

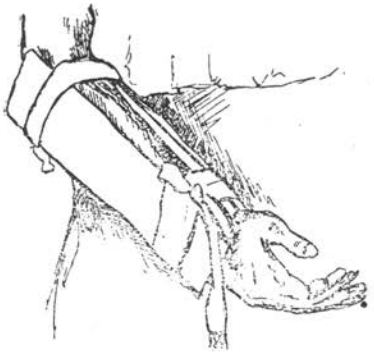


Fig. 9.

The transport of injured people is always a difficult question and it is not always the wisest thing to move a patient at any price, as careless transport may quickly transform a simple fracture into a compound one, sharp ends of broken bone may pierce the skin or even a bloodvessel and there is danger both of infection and hemorrhage. Let him recover somewhat and try what he can do without help or with gentle assistance.

Internal lesions get worse by jerky movements. For these the best position for transport is what surgeons know under the name of Fowler's: half sitting with bent knees and hips. There are ways for two men and even for one man to carry another one without a

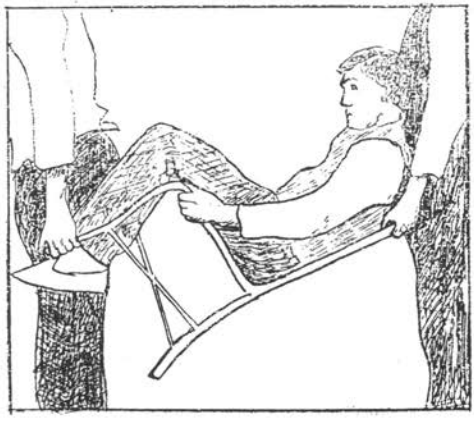


Fig. 10.

tying up of the extremities as mentioned above are about the only resources you have. If the patient gets very thirsty from loss of blood, it would be cruel to withhold liquid from him, even at the risk of increasing the blood pressure, but give him as little as possible, and there is no objection to some alcohol then. Fortunately all these alarming accidents are very infrequent in the Alps. Of much more common occurrence are bruises, sprains, dislocations and fractures. For simple bruises the application of a cold water, alcohol or oil compress will suffice. The other three conditions are not always easy to distinguish from each other even for a surgeon. A fracture near a joint looks very much like a bad sprain or dislocation, and as a matter of fact they are sometimes combined. Don't try to make a diagnosis by handling the poor victim, as you will only cause him a lot of unnecessary suffering, and the X rays can later on settle the theoretic side of the question without much discomfort to

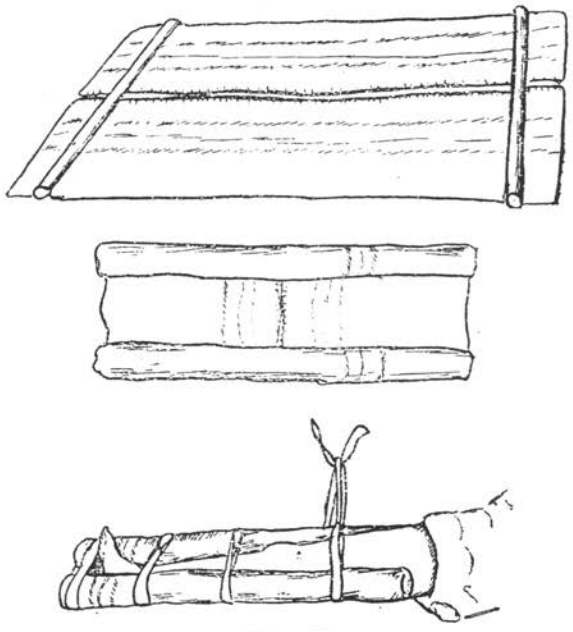


Fig. 8.

the patient. The pain can be slightly relieved by hot or cold compresses, fractures do better under cold applications, and if a sprained ankle feels worse under a hot compress there is a strong

forced flexion can also be applied to the hip and the knee and will stop hemorrhages below these parts. (fig. 6.) Another method is the tourniquet, or a kind of Spanish windlass easily extemporised with a strip of cloth, a rope, any bandage tied round the limb with a stick thrust under it and tightened by twisting it till the bleeding stops. (fig. 7.) It ought not to stay in place longer than two hours on account of the danger of gangrene. For wounds of the scalp where forced flexion cannot be applied the tourniquet round the head is useful. If there is a suspicion of internal hemorrhage, tourniquets at the base of the four extremities will keep some reserve blood in the limbs and reduce the pressure in the internal system.

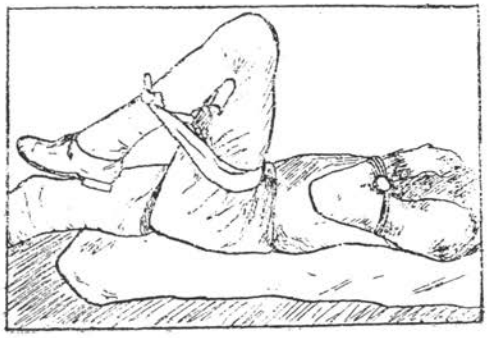


Fig. 6.

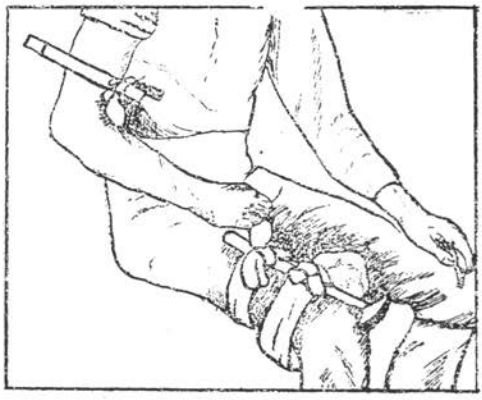


Fig. 7.

If fainting and shock occur, leave the patient alone in a comfortable position, as nature comes to his assistance to relieve the pain and blood pressure. Don't interfere by trying to prop him up, rubbing him, or pouring brandy down his throat, just watch him. If he comes too, that is the time to give him something, strong coffee or tea is best, brandy is more a narcotic than a stimulant, but may give a feeling of relief and keep the patient quiet. If he gets worse, and the pallor increases, the pulse becomes weaker, he becomes restless, gasping for breath and so forth and the situation becomes critical, there is internal hemorrhage which the giving of stimulants would only make worse. In this case absolute rest, the

quadrangular piece of cloth folded once diagonally (fig. 1. a) makes a triangular bandage useful for nearly any purpose, such as an armsling, or for the dressing of extremities. (figs. 2, 3, 4 a, b, c.)

A four tailed bandage can also easily be made and is useful for the head (fig. 5.) and a many tailed one for the trunk.

Fig. 5.

Smaller dressings can be easily kept in place by strips of adhesive plaster. Every wound which cannot be freely exposed to sun and air needs a dressing for protection against chemical and mechanical injury, and in deeper wounds also for the arrest of hemorrhage.

If there is a great deal of bleeding try first steady pressure with a handkerchief for instance. The patient must be kept as quiet as possible and must have no stimulant as this increases the blood pressure. No swabbing or mopping of the bleeding surface as this only removes the small blood clots forming to seal up the bleeding vessels. In punctured wounds a plug made from some clean material may be pushed hard down and be kept in place by a tight bandage, plugging with a strip of linen and a match or a pencil, if gently done, will also stop obstinate nose bleeding, if a cloth wrung out of cold water held against the nape of the neck or a roll of paper put between the upper lip and the gum are not sufficient.

If bright red blood spurts from an artery simple pressure sometimes is not sufficient to stop the hemorrhage, so the artery must be compressed above the wound. You find elaborate instructions in first aid books about the different spots where the finger can effectively compress the main arteries, but I doubt whether anyone without any anatomical and surgical training can carry out these instructions and if he can, that pressure limited to a very small area soon becomes quite unbearable to the patient, and is also very difficult to maintain for the operator. Fortunately there are other ways of indirectly suppressing circulation. The brachial artery in its upper part runs on the inside of the upper arm, a pad in the armpit formed from a rolled up towel for instance will stop bleeding lower down, if the arm at the same time is tied firmly to the chest. Lower down the artery can be effectively compressed by forced flexion of the padded elbow maintained by a bandage. That principle of

them along and they are generally left behind just on that particular occasion when they are most needed.

Fortunately dressings and bandages can be extemporised. Any article fresh from the laundry, which has not been handled

Fig. 2.

Fig. 3.

with dirty fingers, may be considered as surgically clean: Handkerchiefs, shirts, and other underwears. The mere boiling of these things would make them absolutely sterile. Cotton wool should not come into direct contact with wounds as the fibres are very difficult to remove afterwards. It is useful for padding the dressing, even Japanese paper might be used for this purpose at a pinch. Bandages to keep the dressing in place may be improvised from neckerchiefs, bandannas, furoshiki or cloth. A

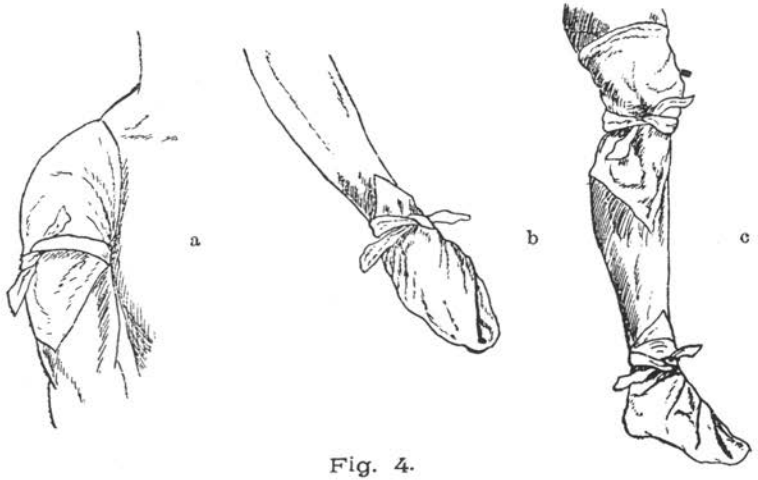


Fig. 4.

There is also not the slightest use in washing them with antiseptics, but if any mechanical cleaning seems advisable, the best thing is to pour some clean water over them. Surgeons like what we call physiological saline solution for the purpose of irrigating wounds, that is, simply boiled water with about a teaspoonfull of table salt to a quart of liquid. Wounds in contact with clothes and particularly chafed feet may need an antiseptic. It is in fact advisable in the latter case.

There are some very good antiseptics in solid form which have the advantage of being easy to carry, the most useful of these being boracic acid, chinosol, and pemanganate of potash, the last named being very good as a local application in snake bites. When once we can obtain out here the hypochlorites which were so widely used during the War, in solid form, they will be invaluable, being very efficacious and non-poisoning. Bichloride of mercury (corrosive sublimate) is powerful but a dangerous poison, carbolic acid must never be used for compresses on fingers or toes as it produces gangrene if left on too long. Tincture of iodine forms a very effective antiseptic paint, but if the bottle breaks in the luggage or the cork perishes, it causes general destruction. Lysoform is a good liquid antiseptic and very useful in addition as a protection against insect bites, and as a means of stopping the itching caused by these troublesome things. Alcohol, whisky, oils and fats are of value for compresses, and pure olive oil will remove insects from the ears if a drop or two is put into these parts. A knife or needle can be readily cleaned and disinfected by thrusting it several times through a wet, well soaped towel or rag, or into a cake of wet soap.

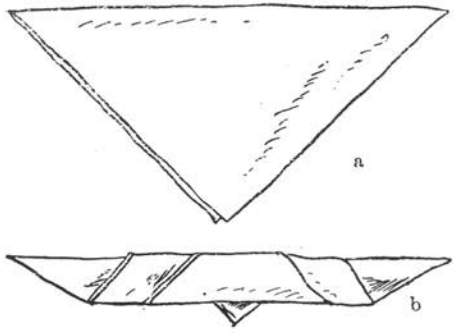


Fig. 1.

I have mentioned all these antiseptics because one or more of them is usually to be found in emergency outfits, but I think in the mountains they are seldom required. Talking of emergency outfits, first aid packets etc. these are theoretically very useful, but if they really contain dressings and bandages sufficient for a major accident, they are bulky, and as there is fortunately very seldom any use for them on a trip, people get tired of carrying

FIRST AID IN THE MOUNTAINS.

Talk at a Meeting of the Foreign Members of the Japanese Alpine Club, in February 1919.

BY

DR. PARAVICINI, J. A. C.

IT is now just twenty years since I was working as House surgeon of the Engadin District Hospital, high up in our mountains, perhaps the "highest surgical position" in Europe, 1800 m. above sea level, under a very good chief surgeon, Dr. Bernhard, who had made a speciality of emergency surgery and published a very useful little book on this topic, now unfortunately out of print and not in my possesion.

The Engadin, now within easy reach of London by the excellent Engadin Express, had no railway connection in those days, but was already world famed for its scenery and particularly for facilities for winter sports.

The valley, at an altitude of nearly 6,000 feet, was sometimes isolated from the rest of civilization by enormous quantities of snow. A trip up there, always a long and somewhat strenuous journey over mountain passes, for strong and healthy persons, but practically impossible for others.

Amongst the great number of sportsmen and mountaineers who went there, accidents of all kinds were not infrequent, and there being no other place to go to, they all came before the surgeons of the district hospital for treatment.

My chief, Dr. Bernhard later made quite a name by his pioneer work on treatment by sunlight. He was a keen observer, and it struck him how well wounds used to heal in the mountains. Sunlight contains germicide rays; they are of the ultra-violet kind and have different chemical activities which they exercise freely in the pure and thin air of these high altitudes, while in lower regions these rays having first to pass through a considerable thickness of atmosphere with all its impurities, lose much of their healing properties. The purity and dryness of the mountain air alone, without that special action of the light rays would favour wound healing as the number of germs of wound infection moreover in high altitudes is extremely small. Superficial wounds will therefore take care of themselves and need no special treatment as long as they are exopsed to air and sun.

These "stymies" were wet and greasy from the continuous rain, and effectually masked by rank vegetation. This was one of the most trying descents of a big mountain it had ever fallen to the lot of the writer to experience. Needless to say we were all more than glad to reach more open country in the shape of the river's bank. Here we had lunch, perched on the rocks like cormorants, with the rain coming down in torrents. We pushed on through sheets of rain to the onsen which haven of refuge was reached at 3.10 p.m. after many perilous crossings of the now swollen and turbulent Koshibugawa. We therefore crossed this stream no less than 108 times in the space of four days during our two attempts on The Red Rock Mountain. A few hundred yards from the onsen our guide caught a wicked looking mamushi by pinning its head down to the ground between the stones with a long bamboo stave. This snake was a bright red-brick colour with a rat tail. He took it to the onsen alive, where he killed it and sold it to one of the party for 20 sen, who eventually ate it in small homeopathic doses with a view no doubt of securing for himself more strength and beaucoup de courage.

The following morning the weather was still anything but set fair, being dull and showery; we therefore decided to say a fond farewell to the onsen, and the old man and his belongings, as it was hardly good enough to hang round for a day or so longer with the view of trying to scalp Arakawadake and Higashidake. However soon after reaching Okawara there was a change for the better, and we pushed on in the afternoon for the Ichinose-toge en route to Kamikochi Onsen and Kasadake—the Peak of the Umbrella. We paid off the guide, and the coolies at Okawara, hiring some pack horses to carry our impedimenta. We gave the former a good tip as he was a very fine specimen of a guide. One of the carriers—an old man to whom we had given the nick name of "The Humourist" also went away rejoicing, and he thoroughly deserved all that was coming his way, as he had been the life and soul of the expedition under most trying circumstances. He was cracking jokes up to the last minute, and his parting words were:—"May you come back to climb the mountain ten thousand times."

---

yoshi Goat outside with the guide and the goriki must have had a very poor time of it indeed. In a thick driving mist which soon soaked through our clothing we left the camp the next day (26th) at 6 20 a.m. After climing a short distance rain began to fall, but as we were already very wet we decided to go on feeling like the famous general in ancient history who had burnt his boats behind him. So the motto of the day was "Nil desperandum," though if the truth must be told, the clerk of the weather came in for his fair share of vituperation - in fact the air might have turned blue from the amount of blasphemy that was hurled at him. This outburst of superheated and superfluous steam must have had some effect, for as soon as we reached the final ridge the rain stopped. To the peak of Akaishisan we had to climb one ri, negotiating several small peaks on the way to our goal. This fine mountain much resembles the famous White Horse Peak—Shirouma-dake—in the Orenge group in the Northern Alps, in as much as on the east side the ridge along the summit falls away in steep precipices for thousands of feet, whilst on the western edge there are tangled masses of the ubiquitous haimatsu, and large patches of red rock, from which latter the mountain takes its name. The climber has therefore to keep to the knife-like ridge all the way to the highest point. We reached the top of the peak—10,200 ft.—at 8.14 a m. with a temperature of 50° F. on the thermometer, and a bitterly cold wind blowing from the north'ard. A thick mist swirling round us like an enormous phantom enveloped us in its folds, and the Blue Dragon-fly for one felt like a lost soul on his way to the Land of Shades. A photograph was taken, but in such weather it is hardly to be wondered at that the negative was not very much of a success. After this with another curse or two thrown at the weather we made a bee line for the onsen for the prospect was absolutely cheerless. Picking up our goriki below the ridge we made as much haste as we possibly could as the weather became steadily worse, rain falling most monotonously in heavy showers. We dropped down to the tree-clad spur in double quick time, and several howling croppers had to be recorded. This was in the days before the Bell Goat imported the clou Tricouni from Switzerland. In fact more than unusual care had to be taken to avoid accidents. The Blue Dragon-fly's ice-axe from Chamounix came in more than useful in the way of a third leg. Fallen timber in every kind of state of decay had to be negotiated with caution, whilst the half-hidden roots of huge forest trees covered with moss and lichen had to be carefully avoided. Between these roots there were some large holes which formed a veritable leg-breaking trap for the hasty and unwary.

got a good view of Arakawadake the middle peak on the Akaishi range. Just below us the Arakawazawa runs into the river we had just ascended. After a rest for lunch we began the real climb which is made on the ridge of an extremely steep spur of the mountain covered with dense forest vegetation. Frequent halts had to be made in order to allow the coolies with the impedimenta to catch up with us. In many places hands and ice-axes were freely used. At a height of 9100 ft. we got clear of the tree zone, and got into haimatsu or creeping pine country. Luckily there was not much of this, and then came a hard scramble up a very steep slope plentifully covered with loose stones and boulders. Passing over a ridge, we had to descend the far side for some little distance to a large rock, where we camped for the night. We got to this place at 5 p.m. say 9 hrs. 20 min. from the onsen. The Japanese contingent took up their quarters in a large rift of the rock, whilst we pitched our small tent on the northern side. This bivouac we estimated to close on 9000 ft. above sea level, and consequently we found the weather exceeding cold during the night.

On the 25th we got up early to see the sunrise but the outlook was not at all inspring, in fact there was a decidedly sullen and fiery aspect about the dawn which betokened anything but fine weather. A red sunrise is nearly if not always an evil omen, whilst on the other hand a red sunset betokens a fine day on the morrow. The French have a proverb to the latter effect:—"Le rouge soir et blanc matin font réjouir le pélerin," whilst we say:—"A red sky at night is the shepherd's delight, but a red sky in the morning is the shepherd's warning.

In the dim light we saw two other giant peaks—Higashidake and Arakawadake—on the same range looming up like the sails of a phantom ship to the north-west through a thin gray mist on a phantom Sta. The former according to the map is 3146 metres and 63 metres higher than the latter but reputed to be easier to climb. If the weather had only held out we might have "scalped" both of them. The wind began to blow in strong and fitful gusts and blew stronger and stronger as the day wore on. The guide held out small prospects of fine weather, so as rain started to fall heavily there was nothing to do but to turn in again after breakfast. Climbing accordingly was postponed on account of the wind and mist and rain. That night the weather got worse, and the glass fell several points. It looked to us as if we were in for a typhoon, or the tail-end of one at least. The rain came down harder than ever, and the wind blew "great guns." Our tent would only hold two, and we were very much like sardines in a tin at that, so the Sumi-

It was just five on the morning of the 23rd when the B.D.-fly rose from his balmy couch after a terrific battle—lasting more or less the entire night—with the hordes of rapacious nomi for which Koshibu Onsen is justly famous. The barometer showed a height of 2900 ft. whilst the thermometer registered 70° F. Shortly after six we set out for our mountain, but the Fates were most unkind. The weather although fine in the early morning turned out decidedly unpropitious, rain falling in heavy and continuous showers as soon as we had reached the foot of the tree-clad spur of Akaishisan. Here after a most disconsolate halt of over an hour we came to the conclusion that discretion is sometimes the better part of valour, so we retraced our steps to the onsen getting back shortly after 2 p.m. thoroughly soaked to the skin, not only by the rain but by the water in the stream, which going up and down we had crossed no less than 54 times. However the scenery in this gorge is magnificent, and amply repaid us for any discomfort caused by our failure and the moisture encountered. Perpendicular cliffs rose sheer for several hundreds of feet from the river bed. Feathery pine trees of fantastic shape growing out of cracks in the solid rock spread their branches into space above the rushing torrent, which had turned to a dark brown hue like the Thames at London Bridge from a beautiful sea-green colour earlier in the day. A long soak in the hot bath, and then a magnificent concoction consisting of fried negi, hot water, Liebig's extract of meat, new potatoes, rice, beans and Hamburger steaks with sausages and mushrooms, all stewed together, filled us with the firm belief that life after all sometimes was worth living. The old man was more than pleased to see us back so soon as it meant another dose of the magic "goat reviver." Next morning —the 24th—when we started off again at 7.40 a.m. he assured us that the weather was going to be "daijobu," but it must be stated he turned out to be a false prophet. The large waterfall about one hour out from Koshibu was in fine working order on account of the recent rain, and it came rushing over a cliff with a loud roar. There are many huge rocks and boulders lying in picturesque confusion in the Koshibugawa, some of them so large that we had to climb over them. There are no bridges consequently the work was pretty strenuous, as what with fording the stream twenty-seven times again, and surmounting other difficult obstacles such as huge fallen trees, etc. we had plenty of opportunities to show what we were made of in the way of mountain goats. We made excellent time up to the foot of the spur reaching the edge of the forest at 10.20 a.m. a little under three hours. This point is 4800 ft. above sea level. Here we

Red Rock Mountain from the Tenryugawa side, and after descending on the other and crossing the Oi-gawa, eventually got back to civilization by way of Shidzuoka. He was of opinion that this particular peak was "some" climb, and well worth the time, trouble, and expense. From what we saw of it we should estimate he was not far wrong. This of course given fine weather, but as for us our luck in this direction was dead out. Leaving the following day shortly after noon, being somewhat delayed by the man from Tokyo having to wait for some important advice at the local Post Office in connection with the payment of a remittance from his bakers, we tramped 2 ri along a flat and dusty road to the river's bank. Crossing over to the far side by means of a long bridge, and the payment of a small toll, we immediately got into some interesting country for the stream hereabouts flows alongside some high cliffs with the road running high above it. At the small hamlet of Kawano-mura we took lunch, and were lucky to get some fresh trout. After leaving this place the weather became dull, oppressive and showery. Crossing a low range of hills and the Hojo-toge we descended into the valley of the Koshibugawa—a river with which we were soon destined to become rather closely acquainted. It is some 11 ri to Okawara from Iida, but it must be remembered that some ri in the inaka are rated at 50 cho apiece instead of the regulation 36. However after a very long walk we got to the village inn at Okawara a little after 10 p.m. The entire staff from the proprietor down had all turned in for the night, but a few cheery yells and howls from our goriki soon brought them to the door, and in spite of the lateness of the hour we received quite a warm welcome. A hot tub had our first attention after which the kori containing the commissariat received due consideration. "Lights out" was sounded at 1.30 a.m. The route up to the yuba from Okawara past the mountain village of Kamazawa runs through magnificent mountain scenery. After the previous late night we took things easily and reached our destination for the day at 7.30 p.m.

Koshibu Onsen is not an onsen in the literal meaning of the word as the water in the sulphur spring is stone cold, and has therefore to be treated to the application of heat to make it acceptable to the few pilgrims who chance to pass that way. After dinner that night we presented the old man who ran the onsen at Koshibu to a dose of some magic liquid known as „Goat Reviver," and it must have done him a world of good as he soon came upstairs for more which he said was for his son, but it is doubtful whether it ever got as far as this individual waiting on the ground floor.

SCRAMBLES IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS.

Part II:—Akaishisan—The Red Rock Mountain.

BY

"BLUE DRAGON-FLY."

LIGHTER than a web of gossamer yet withal stronger than a net of steel once more the magic spell of the mountains had cast itself over us, mesmerising, fascinating and enveloping us in its thraldom far more effectually than ever a serf was held in bondage, or a devout lover in the warm embrace of his inamorata. The exquisite charm of those mountain solitudes together with the witchery of the pine-clad ridges floating through the mists of early morning, and the majestic peaks of the Japanese Alps tipped with lilac, crimson, and gold by the reddening dawn, ran riot through our veins just as some potent love philter; and like the lode-star beckoned us from afar, and away from the sordid, humdrum, and monotonous life of the "open ports," with far more powerful a gleam than ever was flashed from Aladdin's wonderful lamp. But, back to the everglades!!

Iida, described in the guide books as a large and flourishing town, on the Ina Kaido in the valley of the Sky Dragon river was the rendezvous that year; and curiously enough one of the party hailing from Yedo was discovered pulling off his boots on the steps of the front door of the Shogodo Hotel by the Blue Dragon-fly, who had just walked 10 ri that day from Tsumago on the Nakasendo over the Odaira-toge. And that was the 20th of August 1915, and a roasting hot one at that. Without fear of contradiction it can be stated that the futon and the tori-nabe at the Shogodo Hotel at Iida are hard to beat, and moreover quite in a class by themselves. The former are at least a foot thick covered with pale rose silk and soft as eiderdown, also somewhat of a contrast to our sleeping places of the following nights where filthy tatami infested with voracious nomi were the best the inaka had to offer, including our bivouac on the shoulder of Akaishisan, where we slept soundly on creeping pine with the rain water trickling beneath us and the abura-kami on its way to the Koshibugawa and the sea. In "The Playground of the Far East" one has to take the rough with the smooth. It is all in the day's work.

At Iida we met a Japanese climber who had "done" the

NIPPON SANGAKU KWAI.

(THE JAPANESE ALPINE CLUB.)

Fujimichô IV: 6, Kôjimachi-ku, Tôkyô.

Postal Transfer Account: No. 4829 Tôkyô.

List of the Officers (Honorary).

Elected Nov. 26th, 1919.

General Secretaries.

N. Takatô, Esq. Dr. H. Takeda.

Recording Secretary & Treasurer.

Prof. C. Umezawa.

Librarian.

T. Takano, Esq.

Editors.

R. Kogure, Esq. S. Nakamura, Esq. Prof. J. Tanabe.

Council.

Hon. K. Jô.	M. Saigusa, Esq.	Dr. M. Tsujimoto.
R. Kogure, Esq.	T. Takano, Esq.	I. Tsujimura, Esq.
K. Kojima, Esq.	N. Takatô, Esq.	Prof. C. Umezawa.
S. Kondô, Esq.	Dr. H. Takeda.	S. Yamakawa, Esq.
S. Nakamura, Esq.	Prof. J. Tanabe.	

The object of the Club being promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it always welcomes to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

An applicant for admission into the Club must be proposed and seconded by three of the members, one of whom must be a Member of the Council, and it is necessary that he should fill up an official form with particulars of ascents made or nature of the work accomplished by himself, and send it in to the Club. The admission will be decided at a Meeting of the Officers.

Members are required, on their admission into the Club, to pay Yen 5 as entrance fee, and Yen 3 as subscription for the current year, and thereafter an annual subscription of Yen 3, payable in advance on the 1st of January in each year. Payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account or by P.O.O. Neither cash nor cheques are accepted.

Members are entitled to receive the Club's Periodical Publications. They may also attend the Ordinary Meetings of the Club and have access to the books and maps in the Club Library.

Every member shall receive a Club Badge on loan, which must be returned, on his resignation of membership.

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on payment of Yen 2 for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they have to resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.*

All communications should be addressed to the General Secretary. Enquiries requiring a reply should enclose return postage.

SANGAKU

Vol. XIV | February 1920 | No. 1

(English Supplement)

CONTENTS

PAGE.

SCRAMBLES IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS, II—"Blue Dragon-Fly" 1

FIRST AID IN THE MOUNTAINS.—Dr. Paravicini . . 7

CLUB LIBRARY 16

PROCEEDINGS OF THE CLUB 17

NEW MEMBERS 18

MEMBERS EXPELLED. 18

JAPANESE PART OF THE JOURNAL 18

PLATES IN THE JAPANESE PART 19

PHOTOGRAPHIC ILLUSTRATIONS IN THE JAPANESE PART . 20

Tôkyô
Nippon Sangaku Kwai

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XIV 1920 No. 1